NO TITLE NO EXIT VOL.9

EL ZINE



BOSS TUNEAGE
PROFANE EXISTENCE
MUKA-CHIN LONG INTERVIEW
90S US CRUST-POLITICAL PUNK
LATIN AMERICAN PUNK HARDCORE

Contents vol.9



Making Punk a Threat Again!



PROFANE EXISTENCE

しばらく音沙汰のなかったアメリカ・ミネアポリス拠点のアナーコ・パンク・レーベル/ジン、PROFANE　EXISTENCEがAMEBIXの新譜リリースと共に復活の狼煙を上げた!!
1989年の発足以来、古くはNAUSEAやDOOMといったバンドのリリース、そして90年代から現在に至るまでUSクラスト～ポリティカル・パンク・シーンの一翼を担い続けているレーベルであり&政治的色合いの濃いジンも発行し続けているPROFANE EXISTENCE、その首謀者であるDanに話しを聞きました。AMEBIXの新録盤も予定しているようです!

■PROFANE　EXISTENCEはしばらくリリースが止まっていましたが、どうしてですか?再開したことを嬉しく思っています。

「そうだね。台所事情が良くなくて、2008年の中頃から止まらざるを得なかった。これはちょうどアメリカ経済が悪くなり始めた頃だね。多くの人々は仕事を失うことに対して恐れを抱くようになり、"生活必需品"ではないレコードやCDといったものを買わなくなった。みんながPROFANE　EXISTENCEのリリースやディストロから買うのを止めたのが痛手だったね。同時に多くのディストリビューターからの支払いがなかったのも大きな問題だった。彼らは金がなかったりして、そのまま姿を消した奴らが沢山いたんだよ。2008年の夏に、結局俺たちの資金は底をつき、やむを得ず新しいリリースの全てを取り消さなければならなくなった。2008年の秋には雑誌の発行も止めなければならなくなった。PROFANE　EXISTENCEにとっては物凄くしんどい時期だったんだよ」

■AMEBIXをリリースしたのには驚かされました。BARONにあなたがオファーしたのですか?12"にパッチやダウンロード・コードをつけたのは誰が提案したのでしょうか?詳細を教えて下さい。

「俺の中ではPROFANE EXISTENCE RECORDSは2008年に死んだんだ。でもBARON

には、AMEBIXが支援を必要としているなら俺がやるよって伝えていたんだよ。スクリーン・プリントのポスターといったマーチャンダイズの販売やAMEBIXのウェブサイトの制作を手伝ったりして、彼らとは既に関わっていたからね。そうしてBARONが"REDUX"のリリースに協力してもらえないかと尋ねてきたんだ。もちろん俺はすぐにイエスと言ったよ。AMEBIXからレコードのリリースを依頼されて、ノーと言える奴がどこにいるっていうんだ!?自分の財布からプレス代金を支払い、そしてPROFANE EXISTENCEを復活させるなら今だって決意した。(PROFANE EXISTENCEからリリースしようという)BARONの決定は、AMEBIXの新しいドラマー、ROY MAYORGAからの影響があったと思うな。彼はPROFANE EXISTENCEが出した初期のレコードでもある、NAUSEAのドラマーでもあったからね」

■PROFANE EXISTENCEマガジンの新しい号は計画していますか?印刷物の現状についてはどう考えています?

「うん、PROFANE EXISTENCEは2008年以来となる雑誌をちょうど出したところだよ!PROFANE EXISTENCEマガジンへの強い関心はまだあるように思うけど、コンピレーションCDやカラーの表紙などのために、高い定価を払おうっていう人はそんなに多くないみたいなんだ。新しい号では俺たちのルーツに立ち返って、モノクロの新聞紙スタイルで、定価もたったの1ドルにした。
この"ベーシック"なフォーマットは、PROFANE EXISTENCEの新基準になるだろうね。作るのも簡単で安いから読者は手に入れやすいし、他のレーベルやディストリビューターともトレードがしやすいから。この数年で、少部数のジンが生き残るのは非常に難しくなってきている。インターネットによって読者の奪い合いが引き起こされているし小さな出版社にとっては流通させることすら現状では困難になっている。PROFANE EXISTENCEはずっとレコードをリリースしてきた。そのおかげで巨大なトレード・ネットワークを既に持っているから、俺たちは生き残れるんじゃないかなとは思っているよ」

■様々なインターネット・ツールやMP3の違法ダウンロードについてはどう思いますか?

「インターネットはコミュニケーションをとる上で素晴らしい道具だし、活動のプロモーションやその方法を見つけ出すのにもとても良いね。しかしながら、そういった良いこと以外には多くの弊害がある。時として"やりすぎ"に感じることがあるよ。みんな、ブログやオンライン・ジンなんかを読むのは好きだとは思う。そういったものは重要なことは載ってなくて戯れ言ばかりだからね。MP3のダウンロードだけど…、PROFANE EXISTENCEやバンドのためにも、リリースをブログ・サイトに勝手に投稿しないようお願いしている。大部分の人たちは尊重してくれているけど、それでもやはり俺たちのリリースを至るところに投稿していく"著作権侵害者たち"はいるね。そいつらのことをいちいち考えたり戦ったりする時間は俺たちには全くないんだけどさ」

■前に話しを聞かせてもらったのは2005年でしたが、それ以降のPROFANE EXISTENCEの大きな変化というと?

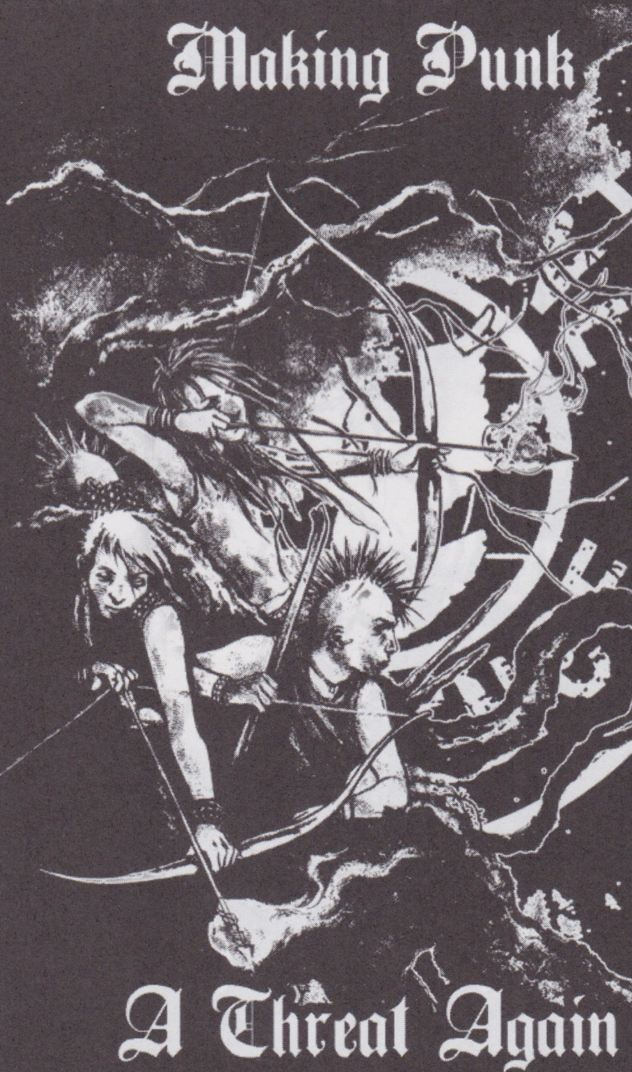
「2004年から2006年はPROFANE EXISTENCEにとってとても大きな年になった。沢山のレコードをリリースし、ツアーを企画したりしてね。全てが本当に順調だったよ。それから一連の不幸な出来事に見舞われて、結果的にスタッフやオフィスのスペースを失うことになった。2007年から2008年は、レーベルも雑誌もその殆どすべてを俺が一人でやっていたよ」

■その2005年の時には、ブッシュ～アンチ・ブッシュ・ムーヴメントについても話しましたが、オバマ大統領についての意見を聞かせて下さい。

「アメリカの政治にはそれほど大きな変化なんてありゃしないよ。誰が大統領になろうとも、同じ政府の官僚組織がまだ存在しているからね。あらゆる政治家が俺は好きじゃないけど、ブッシュほどはオバマのことは嫌いじゃないね!」

■曖昧な質問ですが、最近のUSアンダーグラウンド・ハードコア・パンク・シーンについての意見も聞きたいです。数えきれないほどのバンド/シーンがありますが、5年前と比べてどう感じていますか?

「俺が考える限り、アメリカの多くのハードコア・パンク・シーンは遥かに縮小しているように感じる。人気のあるTRAGEDYやFROM ASHES RISEといったバンドと比較できるような新しいバンドもいないしね。多くのアンダーグラウンド・ムーヴメントが細分化の一途をたどっている。5年前より巨大になっているかもしれないが、一つのギグを見に行ったところで大勢の観客を目にすること




PROFANE EXISTENCE
Defenders of the Faithless

はまずないね。その代わりに、ごく小さなシーンがそれぞれの都市に大量に存在している。それぞれが自分たちのスタイルとルールを持っているシーンがね」

■テキサスで開催されているフェス、CHAOS IN TEJASは日本でもよく知られていますが、あなたも行っていますか?

「仕事から逃げられなくて、この2年間は行っていないんだよね。世界中から良いバンドを沢山集めているし、そこに行けば多くの友達とも会えるからCHAOS IN TEJASのことは好きだよ。会場のEMO'Sもこのイヴェントと凄くマッチしているし、オースティンという都市自体、訪れるには良い場所だからね。もちろん出演するバンドについて常に賛同できるわけじゃないけど、CHAOS IN TEJASでは世界でもベストの部類に入るバンドをいくつも見た。まあ、実に酷いバンドも何個か見たけどね!」

■最近のお気に入りのバンドは?

「新しいAMEBIXのLPを出したことによって、"クラシック・クラスト"に対して、興味がまた新たに湧いてきてね。ヘヴィーなやつを色々と聴いている。MORNE、MISERY、HELLSHOCK、HIBERNATION、FILTH OF MANKIND、CHRISTDRIVER、AXEGRINDER、DEVIATED INSTINCTとかね。地元のバンドじゃもちろんMISERY、それにWAR//PLAGUE(ex.PROVOKED & CALLOUSED)、IN DEFENCE。あと仕事している間は、主にテクノとトランスを聴いているよ!俺のパンク観って今、どうなってんだろうな?!」

■これまでを振り返ってみての感想を。

「今、振り返ってみて良い思い出として挙げられるものの大部分は、元々最悪な出来事として起きたことばかりだよ。ナチ・スキンズと喧嘩になったことや、警察から襲撃されたこと、何もないところでツアー・バンがぶっ壊れたこととかね。当時はこれらの出来事全てにクソって思ったけど、こういったことが俺を鍛えてくれたんだ。もちろん新しいレコードや雑誌を出した時は嬉しいよ。そして常に新しいプロジェクトがベストなものになるよう考えているよ!」

■パンクの未来について考えたりします?

「今から20〜30年経てば、老人ホームは車椅子に乗った年寄りパンクスでいっぱいになり、控えめな子供たちは俺たちに近づきもしないだろよ、ハハハ!
冗談はさておき、シーンにいる俺より20歳も若い新しい"キッズ"は、その大部分において本当に素晴らしいアティチュードを持っている。パンクはずっと存在し続けるだろうと、彼らは俺にそう思わせてくれるよ。俺はまだアンダーグラウンド・パンクが効果的な社会運動であり、社会を変える良い手段だと信じている。次の世代への指針となるパンクをどう残していくかは、俺たち年寄り次第だ。反抗のための選択肢をキッズに残さなければならないんだよ」

■ところで90年代のクラストというと何をまず最初に連想しますか?やはりMISERY?

「MISERYは確実にUSクラスト・ムーヴメントのゴッド・ファーザーであり、他の追随を許さない存在だ。1986年に彼らは始動し未だに活動中だよ。つい先週、ミネアポリスで開催されたアナーキスト・ブック・フェアでもプレイして、実に素晴らしいライヴを見せてくれた」

■それでは、アメリカで最初のクラスト・バンドというと何になると思いますか?

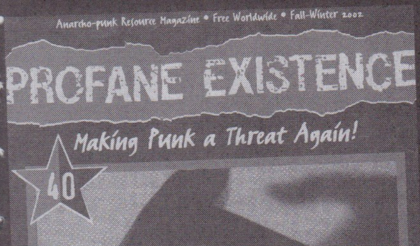
「AMEBIXにインスパイアされたクラシック・クラストのことを言っているなら、再びMISERYの名を挙げるね。それとNAUSEA、JESUS CRUSTといったニューヨーク勢、そして南カリフォルニアで起こった大規模なクラスト・ムーヴメントのバンド、APOCALYPSE、CONFRONTATION、A//SOLUTION、GLYCINE MAXとかね」

■今後の予定についても聞かせて下さい。

「まだPROFANE EXISTENCEは立ち直りの途中にある。俺は今、金払いの良い別の仕事についているから、プレス代金とかはその金でまかなっているんだ。多分、いつかPROFANE EXISTENCEから利益が出るかもしれないが、それは全く重要なことではない。大切なことは俺たちが雑誌やディストロ、レーベルなんかを続けられることだよ。多くの人たちが俺たちの次のプロジェクトを楽しみにしてくれているし、価値を見出してくれていると思う。今後リリースする予定のレコードはね、POLICE BASTARD/WAR//PLAGUEのスプリットLP、APPALACHIAN TERROR UNIT/OI POLLOIのスプリット7"、AMEBIXの"SONIC MOSS"LP(新しいスタジオ・アルバム!)、IN DEFENCEの新しいLP、AGAINST EMPIREの新しい12"EP、DRESDENの新しい7"、それにもっともっとあるよ!以前にPROFANE EXISTENCEマガジンでとったインタヴューの全てをまとめた本も考えているんだ」

■最後に、読者にメッセージを。

「アンダーグラウンド・シーンをサポートしてくれ。そうしないとなくなっちまうよ!インタヴューにカンパイ!」

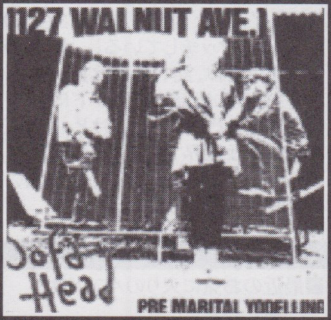






PROFANE EXISTENCE PICK UP DISC REVIEW

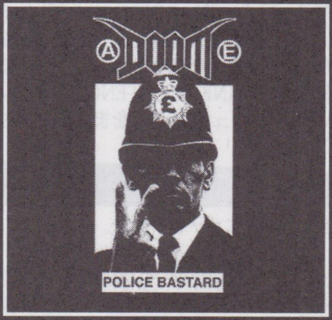
PROFANE EXISTENCEが過去に発表した音源の中から9枚ほどピックアップして紹介します。
振り返ってみると、特に90年代は結構手広くリリースしていたレーベルだったんだなと再認識しました。日本国内への流通はしっかりしているので、既に廃盤になっているものでも根気よく漁れば中古で入手できると思います。未聴のものがあった方はこの機会にチェックしてみて下さい。



SOFA HEAD/Pre Marital Yodelling (1127 Walnut Ave.)

PROFANE EXISTENCEと今号に掲載のBOSS TUNEAGE。全く繋がりはなさそうですが、SOFA HEADという一点においてのみ繋がります。レーベル第一弾のリリースとしてDANを出そうと思っていたら解散してしまったため、そのメンバーらによる新バンド、SOFA HEADのアルバムをリリースしたPE。そしてBTは本作と「WHAT A PREDICAMENT」をまとめた再発盤CDを数年前にリリースしました。あ、SOFA HEADの音は女性ヴォーカル・UKメロディック・パンクで言うまでもなく最高です。

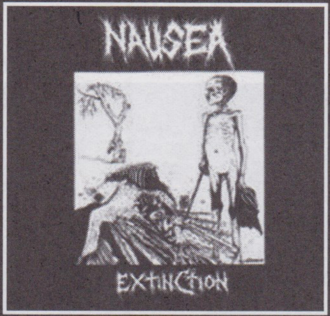
(001)LP 1989年



DOOM/Police Bastard

PROFANE EXISTENCEと言えば、UKクラストの金字塔、DOOMのこの作品をまず最初に連想する人も多いのではないでしょうか。表題曲"Police Bastard"をカヴァーしたバンドは数知れず、ジャケットのアートワークを模倣したバンドも沢山いましたが、もう定番過ぎるのか最近は殆ど見かけませんね。PROFANE EXISTENCEからは95年に、長年連れ添ったPEACEVILLEとの決別を示す「Fuck Peaceville」もリリース。再結成を繰り返しながら今も現役続行中。

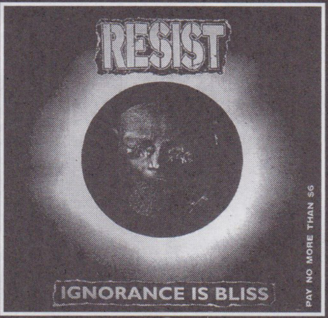
(001.5)7" 1989年



NAUSEA/Extinction

何はなくともニューヨークのNAUSEAは外せないでしょう!男女ツイン・ヴォーカルのスタイルを世界に広め、アメリカのクラストの象徴にもなった一枚。クラストと一口に言っても、その豊かな音楽性は今聴いても全く色褪せていません。極初期にはREVELATION RECORDSのNYハードコア・コンピにBOLDやSICK OF IT ALLなんかと共に収録されたり、ギターのVictorは元REAGAN YOUTHだったりと、混ざり合っていた当時のシーンを考えるだけでも面白い。軽く1万枚以上売れたそうです。

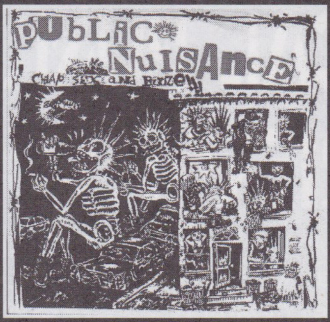
(002)LP 1990年



RESIST/Ignorance Is Bliss

後に一世を風靡することになるポートランド・シーンの基礎となったバンドの2ndアルバム。PROFANE EXISTENCEと90年代の米国ポリティカル・パンクを語る上では外せないバンドでしょう。色んなバンドを渡り歩き過ぎているKelly(DEFIANCE、DETESTATION、SEVERED HEAD OF STATEなどなど沢山)が在籍していたため、ここから派生していったバンドを挙げるとキリがないわけですが、なんと近年復活を遂げ、ディスコグラフィーもリリースされています。90'sクラシック!!

(016)LP 1994年



PUBLIC NUISANCE/Cheap Sex And Booze

懐かしの一枚。当時の二大巨頭だった(…と思う)CASUALTIESとBLANKS 77の影に隠れて結局バンド自体は鳴かず飛ばずだったような気がしますが、これはニューヨーク・ストリート・パンクの名盤と言える作品ではないでしょうか。尖りまくったパンク・ロックは今でも鮮烈です。PUBLIC NUISANCEやSUICIDAL SUPERMARKET TROLLEYS(UKストリート・パンク)といったバンドをPEがリリースしていたという事実にも、時代を感じます。

(025)7" 1995年



DEFIANCE/No Time

DEFIANCEがPROFANE EXISTENCEからリリースした唯一の作品。PEとは馴染みのあるメンバーがやっているにも関わらずちょっと意外です。前述のRESISTにDEPRIVED(RESISTとメンバーの重複あり)、UNAMUSEDのメンバーによって結成されたバンドで、本作に収録された3曲はいずれもミドル・テンポ&キャッチーなパンク・ロック。シンガロング・パートなんかは多分にOi!からの影響も伺えます。2008年に来日しもちろん現在も精力的に活動中。

(042)7" 1997年



REACT/Disturbing The Souls Of Buried Rage

NAUSEA以降に登場した男女ツイン・ヴォーカルのクラストと言うと色々ありますが、PROFANE EXISTENCE周辺で言えば、DEFORMED CONSCIENCEやPISTのメンバーからなるREACTが印象深いです。2010年に聴き直すと基本過ぎて新鮮味はまるでないのですが、分厚い音作りでスウェディッシュ・ハードコアの要素も打ち出したサウンドは当時強烈に響いてきました。90年代のPEのリリースを紐解くとREACT、RESIST、PISTのメンバーをいたるところで散見できます。

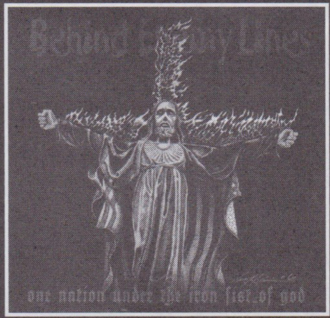
(048)7" 1998年



DISRESPECT/ST

Dan/PROFANE EXISTENCEがやっていたバンドだから紹介しないわけにはいきません。元々は遊びのカヴァー・バンドから派生し、彼を含めたトリプル・ヴォーカル・スタイル。MISERYのメンバーも含んでいますが、音は80's UKハードコア全般を基礎とした、オーソドックスなハードコア・パンクでした。当時アメリカ大統領だったブッシュに対する辛辣な姿勢も体現していましたが、単独としては3枚の7"をPEから発表しあっさり解散。やっぱりDanはバンド活動よりも裏方が好きなのか。

(062)7" 2004年



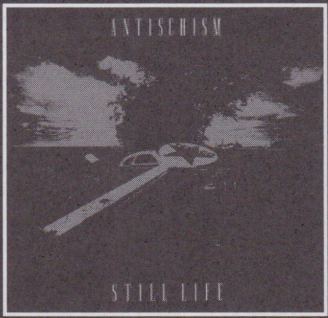
BEHIND ENEMY LINES/One Nation Under The Iron Fist Of God

AUS-ROTTENやPISTなどのメンバーからなるCONFLICT型ポリティカル・ハードコア・パンク・バンドの3rdアルバム。アジテーション・ヴォーカルが特徴的だったAUS-ROTTENのDaveが、そのままのスタイルで歌っているためどうしてもAUS～が頭をよぎり、そして、どうしてもあと一歩のところでAUS～を超えられていないような…。単体で考えれば十二分にパワフルで格好良いだけに残念。解散はしていないようですが、長期にわたり沈黙中です。

(098)LP 2006年

90S US CRUST - POLITICAL PUNK SELECTED DISC REVIEW

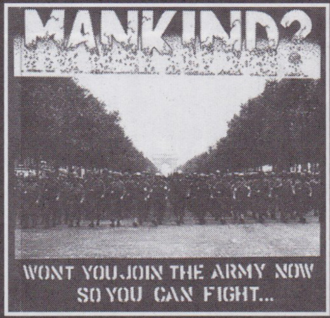
続いては、PROFANE EXISTENCEモノ以外で個人的にオススメの90年代USクラスト/ポリティカル・パンクの音源を紹介します。80年代だとある程度バンドが限定されてしまうし、2000年以降だとノイズ・コアやメタルからの流れに、エモーショナルな要素を足したネオ・クラストとか出てきてもう収拾がつきません。そんなわけでの90年代。ここいらへんを今一度、振り返ってみるのも一興かと思います。



ANTISCHISM/Still Life

NAUSEAに次いで重要な男女ツイン・ヴォーカルのUSクラストと言えば、サウス・カロライナのこのバンドでしょう。性急&直情的なナンバー+様々なギミックも施した鉄壁の一枚にして唯一のアルバム。PRANK RECORDSからの再発盤やディスコグラフィーは比較的入手しやすいはずです。メンバーは解散後、後述のINITIAL STATEやGUYANA PUNCH LINE、DAMADへと繋がっていく。ところで、殆どの楽曲をわざわざニューヨークで録ったのは何故なんでしょうか?

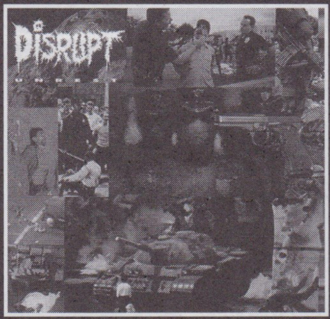
(Allied Recordings 5)LP 1992年



MANKIND?/Wont You Join The Army Now So You Can Fight...

ここで紹介しているバンドは多かれ少なかれCRASSからの影響はもちろんありますが、MANKIND?の女性ヴォーカルの歌い回しはかなりEveを意識しているような気がします。コネチカットを拠点に活動し、DIRTやFINAL WARNINGとのスプリットEP、オムニバスにも数枚参加しましたが結局アルバムを残すことなく解散。今のバンドで言うと、サンディエゴのOK?が好きなら間違いのない一枚です(どっちもバンド名が疑問符だ)。

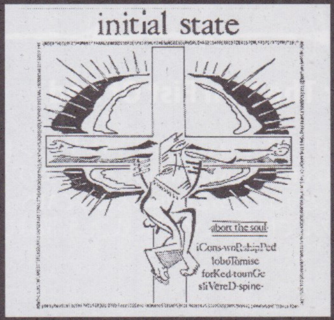
(Eugene Records ER07)7" 1993年



DISRUPT/Unrest

アメリカのEXTREME NOISE TERRORなんて言われていた、ボストン・グラインド・クラスト・バンドのデビュー・アルバム。DeanとPhilみたいに役割分担ができているツイン・ヴォーカルで曲展開も確かに似ています。ただし良くも悪くも米国産らしい乾いた音。女性ヴォーカルが入る曲が震えるほどに格好良いのですが、インタヴューを読むと「彼女とは全然連絡とってない。一緒にやったショーは3回だけ」と冷たい感じで…。Havocが率いたDESTROY!などともスプリットを発表しておりました。

(Relapse Records RR6906-2)CD 1994年



INITIAL STATE/Abort The Soul

女性ヴォーカルのLyz含めANTISCHISMのメンバーが3人いるのでやっぱりその色は濃いのですが、既にあった音楽性を突き詰めて突き詰めて、その結果突き抜けた作品。NAUSEA的だったところが薄まって、速い曲も独自のカオティック・ハードコア・パンクへと昇華されています。ヒリヒリとした、神経を鷲掴みにする珠玉の一枚。こちらもPRANK RECORDSから再発されているので、見かけたら是非チェックしてみて下さい。

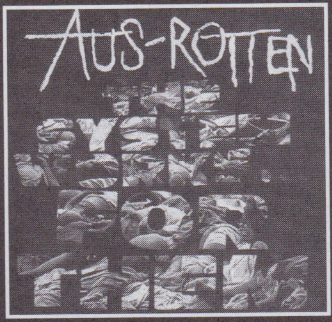
(Clearview CRVW38)LP 1994年



MISERY/ST

AMEBIXとDISCHARGEの要素をいち早くミネアポリスの地で取り入れた、グレート・ベテラン・バンド。どの作品にするか悩みましたが、90年代中頃のライヴが主に収録されているMISERY唯一の映像作品に。Gagsの渋過ぎるベース・プレーもたっぷり拝めますし、NEUROSISを革ジャンにペイントしているパンクスが映っていたりと、当時の雰囲気も存分に味わえます。極初期にはNAUSEAのAlがヴォーカルをとっていたようですが約20年間メンバーが不動というのも凄い。今年中に新譜の噂も。

(MCR Company MCR088)VHS 1995年



AUS-ROTTEN/The System Works For Them

90年代アメリカのポリティカル・パンク=本作が最高峰という認識なんですが、世間的にはどうなんでしょうか。長い長いイントロからツイン・ヴォーカルで押しまくる、CONFLICT直系の表題曲なんて鳥肌ものです。今更ながら、このバンドをスルーしている人がいたら一度は聴いてみて下さい。今では考えられないことですが、「Fuck Nazi Sympathy」7"は2万枚以上売れたと言われています。来日ライヴは吉祥寺WARPで見て、とてもハラハラしました(苦笑)。

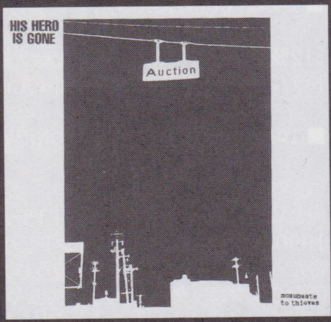
(Tribal War Records No Number)LP 1996年



ANTI PRODUCT/Big Business And The Government Are Both The Fucking Same

ピッチの高い女性ヴォーカルが光るこれも男女ツインのNAUSEAスタイル、ニューヨーク産。男2人のヴァージョンも含めて、90年代の米国ではとにかくツインがブームだったのか、それとも単に自分がツイン好きだったのかは不明ですが…。歌詞とその解説がついた詳細なブックレットと重機が森林を伐採している写真のポスター、とどめにジャケットの中にもメッセージがビッシリ。TRIBAL WARはこの時代、実に良い仕事をしていたと思える佳作です。

(Tribal War Records No Number)7" 1997年



HIS HERO IS GONE/Monuments To Thieves

この括りならRESIST AND EXISTやDESTROY!といったクラシックか、初期NEUROSIS、DYSTOPIA、PHOBIAなんかの方が適していると思うのですが、新たな地平を切り開いたこの大名盤はどうしても欠かせないです。クラストか否かと単純に問われれば違いますが、今日のクラスト、特にヨーロッパ方面に与えた影響は計り知れません。後にTRAGEDYへと発展したのは承知の通りですが、ベースのCarlはDRAIN THE SKYとなり、昨年、札幌REALIZEDの招聘で来日ツアーを行いました。

(Prank Records 016)LP 1997年



REMISSION/Time Served 95-98 Discography

ウィスコンシン州のREMISSIONは90年代当時、ファスト～パワー・ヴァイオレンス・バンドだと認識して音源を買い漁っていたのですが(多分、どの曲も1分台と短かったから…)、10年振りに再聴してみるとクラストとして大いに有りでした。反っくり返りまくった高音ヴォーカルの掛け合いがクセになる、BATALLION OF SAINTS、NEGATIVE APPROACH、CRUCIFUCKSのカヴァー含んだ音源集。アメリカのライトな感覚を保ったまま、クラスティ・スラッシュで一閃。

(Bovine BO45/Power Ground PG10)CD 1998年

LUCIATION

デンマーク・サタニック
ノイズ・ブラック・メタル

SEXDROME(Vol.4にインタヴューを掲載)をリリースしたデンマークの地下レーベルPOSH ISOLATIONが、今度はLUCIATIONというバンドの1st 7"『Darkened Apocalyptic Occult Goat Ritual』を発表しました。
西新宿の某店で「SEXDROMEよりヤバいの入ったよ」と、なんだか人様に聞かれたら誤解されそうな誘いを受け入手したその盤は、地獄のようなノイズ・ブラック・メタル。メタルに疎い僕でも、この邪悪すぎる雰囲気にはたまらない興奮とどこか背徳感すら感じてしまいました。ネガティヴ思考まっただ中の午前3時頃に部屋を暗くして聴くと、もう世界に対する負と呪詛の感情だけが沸き上ってきて最高です。
更にレコードに付随してきたメンバー写真(隣ページにでっかく掲載してみました)を見てみたら、ヤダ、やっぱり演っている人らも怖い…。インターネットでもっと写真を探したら、黒頭巾やらガスマスクを被って武装していたり、あと木の枝をみんなで持ってたり(これは怖くない)、もうどうすればいいのか分からないので取材してみた次第です。
ドラムのGru den Grusommeが、サタニズムとか悪魔とかを連呼しながら応答してくれました。

■まずはLUCIATIONのメンバー紹介を。

「12弦ギターのVoktor、ベース&ヴォーカルのBestial Butcher、ドラム&ヴォーカル&エフェクトのGru den Grusomme」

■このバンドを始めたのはいつ頃?始めた理由も教えてください。

「できるだけ短くまとめてみる…。
俺とVoktorがBLOODNUGGETSって名でバンドを始めたのが1990年のことだった。グラインドとパンクを混ぜ合わせた中間の音だったが、1991年にはもう違うバンドへと分裂しちまった。その頃からサタニック・オカルティズムやオーディニズム(※エーシルの最高神オーディンを中心に崇拝するもの、という意味らしいです…)なんかの過激なアートのほうにのめり込んでいったんだ。
俺は兄弟のValeskaldとHrodvitneとでFALLEN ANGELってバンドもやり始めた。デモを3本出し、コンピレーションに参加したりして…1994年にこのバンドはSOLHVERVへと変わっていった。
Bestial Butcherと出会ったのが1992年頃だった。やつはSaxtorpってやつとDOMINUSをやっていたが、2人でバンドをぬけてLEGIONっていう自分らのバンドを作ったんだ。これが1993年あたりだったか。
俺たちのSOLHVERVは1996年に解散し、その後にここ北欧ではよく知られることになるフル・アルバム『Tågernes Årtusinde』をリリースすることになる。その後の俺は実験的な曲を作り始めた、確か1997年だったか。1997年から2003年あたりはシュールで儀式的なサウンドのCDを12枚ばかり作り、奇抜で現実離れしたような、実験的としか言いようのない曲を大量に作り続けていた…。
だが、Voktorと俺とはまたノイズを作り始めた。それがLUCIATIONの誕生につながっていったんじゃねぇのかな…。
だけど、俺はだんだんオカルト色の強いものや心霊がかった感情を懐かしく思い始めていた。その頃、お手軽なメタルがよく耳に入ってきて、俺が実験的な音楽にのめり込んでいた7年の間に出てきた、この"新しい"って言われるシーンが退屈で胸クソ悪くてたまらなかった。全部がクソだし、軽音楽みたいなメタルで最悪だったな…。俺たちはまた地獄から戻ってくる必要があったんだ。罪深く、狂ったノイズ・メタルをやるためにな。
俺とVokorは2003年から2005年にかけてレコーディングを始めた。ロウなブラック・サタニック・メタルだ。 2004年にBestial Butcherに連絡をとった。一緒に組むには申し分ないやつだからな。Bestial ButcherのやってたLEGIONはまだ活動中で、俺もこのバンドに加わったんだが、すぐにLEGIONはWOLFSLAIRへと変貌を遂げ、『ODIN』てアルバムをリリースした。
…それから、Bestial Butcherと俺とでBLODFESTを組み、そこに俺の兄弟のValeskaldが加入した。WOLFSLAIRのほうは作品も作ったが、2009年にストップした…だが、BLODFESTはまだ曲を作っているぜ。2006年から俺のメイン・バンドになってるし、ずっとやっている。かなり邪悪なアンダーグラウンド・メタルさ。まぁ、デンマーク語なんだけどな…。
LUCIATIONに話を戻すと、2006年にBestial Butcherが加入してスタイルができあがった。ピュアなサタニック・ノイズに餓えていたから、そんなやつをやった…。俺たちはサタニックなカオスを撒き散らしたかった。そういうもんをLUCIATIONが呼び起こす。暗黒



Q：デンマークのハードコア・パンクは好きですか？

A：好きじゃねぇよ



の魂が俺たちをコントロールしているんだ。それがLUCIATIONの運命だ…」

■ノイズ・ブラック・メタルのように感じるのですが、あなた自身、LUCIATIONのジャンル/音楽スタイルについて意識していますか?本当、凄い音だと思います。

「ジャンルが何なのかは考えない。だが、お前が言ったようなものだと思う…破壊的なサタニック・ブラック・ノイズだってな…」

■MAYHEMのようなブラック・メタルが好きなんだと思いますが、ノイズ音楽に関してはどうなんですか?

「違う、MAYHEMのことは好きでも好みでもない。BATHORYやSAMHAIN(デンマーク)を初めとする多くの昔のバンドから主に影響を受けている。
それとノイズに関してだよな。ノイズは何年間も聴いてきているから、俺には当たり前のものになっているんだよ。THROBBING GRISTLEやSPKみたいな昔のバンドにも夢中だし、CAPTAIN BEEFHEARTやMX-80、SONIC Yなんかの奇才っぷりが目立つ昔の音楽も好きだ。だが一番インスパイアを受けているのは、動き続けている自分たち自身からだ」

■曲のテーマを教えてください。

「神聖なやつらに対する、サタニックな呪い、神への冒涜…。山羊(サタンの象徴)や魔王を崇拝する曲もある。タイトルをいくつかあげておく。「Ancient ways of Evil Darkness」、「Consumed in Heroin and Feaces」、「Alter of Satanic Bloodgasm」、「Stuffing a nuns cunt with rotting Maggots」。そうだな、オカルト的な罪深いテーマが多い…」

■一体何を考えて曲を作っているんですか?

「俺たちにとっての儀式…プレイしているときは、常に邪悪な魂にとりつかれている。儀式を通して作り上げる。LUCIATIONの作品は曲に真のスピリットを注入するために、全てファースト・テイクと決めてる。罪深い暗黒の３次元に近づくようにぶっ飛んでな。LUCIATIONの本物のアートに近づくためだ」

■使っている機材も教えて下さい。
『Darkened Apocalyptic Occult Goat Ritual』のレコーディングの状況も知りたいのですが、レコーディングにはどれくらいの日数をかけたのですか?

「3時間くらいだったかな…。凍るような寒い冬の日だった。Phlegmスタジオってところで録ったんだ。俺たちはいつものように、かなりぶっ飛んだ状態でとりつかれたようにセッションしていた。追加の曲も用意する必要があったし、6パターンも考える必要があったからな。
俺たちが使っている楽器は、どれもかなり古い。ギターもアンプも…ペダルもエフェクトもめちゃくちゃ古いしな。俺は年寄りのサウンド・テクニシャンだから、セットアップに関しては秘密にしておく。常にセットアップは複雑にしているんだ…。LUCIATIONは過激なサウンドだが、楽器はひどいもんだ。だが、そのせいで俺たちが演奏をやめることはない」

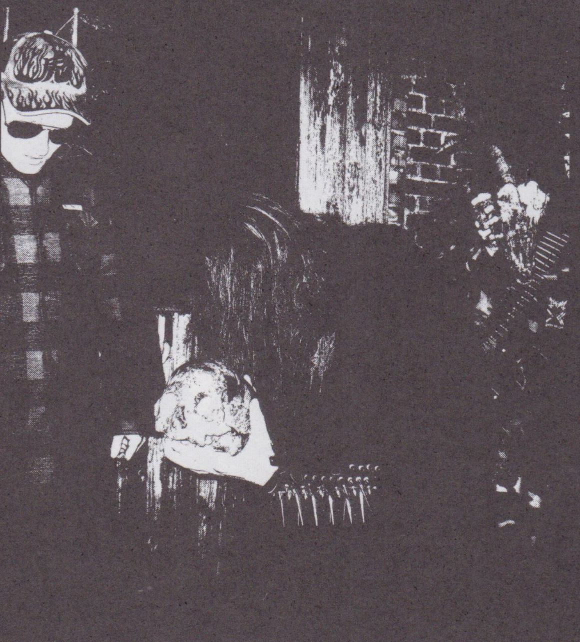
■これまでにカセットテープも数多く出していると思いますが、全部自分たちで出していたのですか?
POSH ISOLATIONから1 st 7 "を出した理由は?

「今のところ、4つのレーベルからリリースされている。レーベルのほうが俺たちを見つけ出したんだ。POSH ISOLATIONはアンダーグラウンドに本当に夢中なレーベルだ。POSH ISOLATIONから出せて嬉しく思う。世界中に作品を広めてくれたしな。デンマークのPHLEGM PRODUCTIONからはテープを4本リリースしている(NASTRANのようなプロジェクトも含む)。UKのBARGHESTレコードからもCDを1枚。それと11月にはUSAのFINAL AGONYレコードから、先にPOSH ISOLATIONからテープで出た『Satanaelic Bloodgasm Ritual』をLPで出すことになっている。あと、NIGHT MARELIFEレコードからもテープが出るはずだな…。最新作としては、PHLEGM PRODUCTIONから出るPANOPTICAL MYCOSISとのスプリット・テープになる("Order of the Nonagram"を見てくれ)」

■LUCIATIONにとっての信仰とは?

「LUCIATIONってバンド名が物語っているだろう…。俺たちは自分たちを取り巻いているスピリットを信じている。古代のスピリットの憑依をだ。俺たちは真の異教徒であり、オーディン(北欧神話の最高神。戦争と死の神であり、魔術の達人)は俺たちの中に深く巣くっている。サタン、野獣も俺たちの内にある。
このデンマークはお前の国なんかとはだいぶ違う。俺は悪魔崇拝者でヒッピーの父親のもとで育った。LUCIATIONの他のメンバーもそれぞれアブノーマルなバックグラウンドがある。本物のアートや真実の人生のためには信念を絶対に曲げないやつらだ。俺とBestial Butcherは1992年ごろからオカルトにまつわるものに夢中だったし、魔王を崇拝し始めた。サタンは俺たちの内にある。名も無き悪魔。それは俺たちの論理であって、宗教とは違う」

■デンマークのハードコア・パンクは好きですか?K-townハード



コア・シーンは日本のパンクスにも人気がありますが。

「好きじゃねぇよ。新しいハードコア・バンドは好きになれねぇ…。俺がこの質問に答えるのは間違っている。でもSODSやWAR OF DESTRUCTIONなんかのデンマークの昔のバンドは素晴らしい」

■UNDERGANG(デンマークのデスメタル・バンド)は知っていますか?UNDERGANGのメンバーはハードコア・バンドもやっていたりするのですが(THE ASSASSINATORSのドラマー在籍)。デンマークではメタルとハードコア・シーンには隔たりはありますか?

「知らねぇ。シーンにも音にも全く興味がねぇ。もちろん、シーンには違いがある。ただ俺にとっては新しいバンドの音はどれも同じなんだ。作り込み過ぎてひどいもんだ。流行にのってるだけだしな。LUCIATIONがノイジーで容赦ない音を出したいと思っている理由がそれだ。
ゴスもエモもガーリィッシュなのもロックスター気取りも、俺にはどれもこれも軟弱だ。クソったれ、くたばっちまえ。俺たちは暗黒の闇に包まれた、悪魔を崇拝する死せる魂だ。これが新しいトレンドだ。真実のな。くだらないものは、全て滅びろ。メインストリームにはポップなものがあふれ、アートは重要視されていない。ただ流行を追ってるだけ。自滅してくれ、クソが…」

■デンマークのどこに住んでいるのですか?どんな街?

「都市からずいぶん離れたところに住んでいる。Skovhastrupっていう、何もかもから遠く離れた街だ。近くには大きな森がある。俺は社交的な人間じゃない、孤独が好きなんだ」

■これは難しい質問ですが、あなたの"ベスト10"レコードを教えてください。

「難問だな。俺たちが聴いてきたメタルとメタル以外のバンドの作品をあげておく」

●メタル

NUCLEAR DEATH
BATHORY
PORTAL
DARK THRONE
PROFANATICA
GOAT VULVA
ABRUPTUM
BESTIAL WARLUST
VONDUR
MYSTICUM

●メタル以外

SPK
THROBBING GRISTLE
GG ALLIN
MX-80 SOUND
THE GERMS
CAPTAIN BEEFHEART and his MAGIC BAND
EXTRA HOT SAUCE
THE RESIDENTS
BOYD RICE
VELVET UNDERGROUND

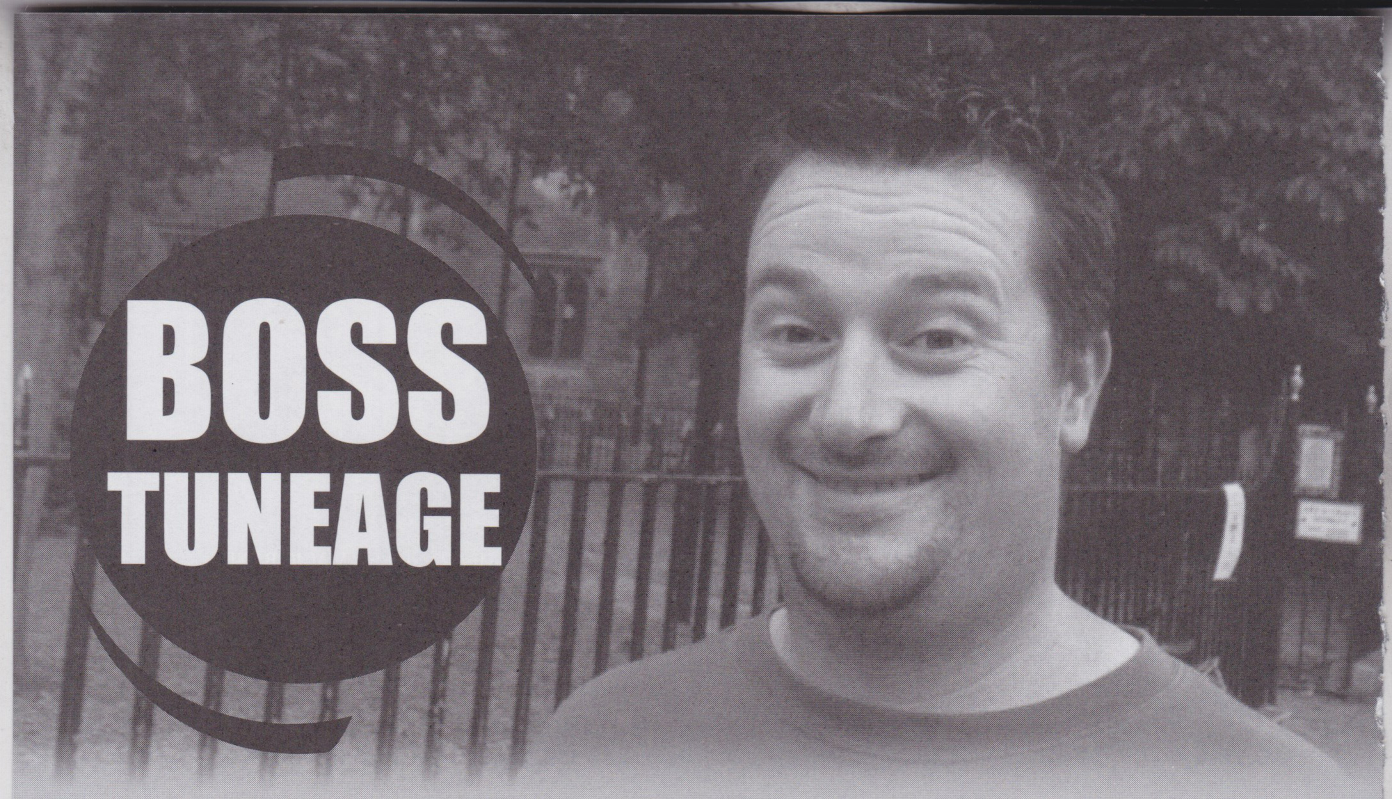
■今後の予定はどうなっていますか。

「4枚のフル・アルバムと3枚のシングルが控えている。他にもいろいろとな。目標は作品を出し続けて、サタニックで邪悪な音楽を撒き散らすことだ。俺たちはやり始めたところさ…近い将来、デンマークからいろんなものが飛び出すだろう。確実にな」

■日本の読者にメッセージを。どうもありがとう。

「サタンと名も無き忘れられた魂を崇拝しろ。聖霊を殺っちまえ、根絶しろ。
Hailオーディン、Hailサタン。Hail Order of the Nonagram。
マッシュルームを喰ってろ、そしてもっとハッパを吸え」





20 YEARS OF BOSS TUNEAGE

GOOBER PATROLとVEHICLE DEREKのスプリットを1990年に発表して以来、休止期間を挟みながらも良質なリリースを続けているUKのレーベル、BOSS TUNEAGE。
メロディック～ポップ・パンクのイメージが強いかもしれませんが、この9月に来日を果たしたGERIATRIC UNITの新譜や、DANにF.U.A.L.といったバンドの嬉し過ぎる再発盤など、誠実で信頼出来る仕事をしているレーベルの一つだと思います。設立20周年を記念してリリースされる120曲入り4枚組(!!)CDボックスも楽しみにしつつ、主宰者のAstonに過去から現在に至るまでの話しを聞きました!

■まず、あなたのパンク/ハードコアとの最初の出会いを聞かせて下さい。SEX PISTOLSやCLASHといったUKのバンドでしたか?それともアメリカのバンド?

「一番初めに聴いたパンク・ロック・バンドはSEX PISTOLSだったな。13歳の時に彼等のアルバムを手に入れたんだけど、そんなには夢中にならなかった。1987年頃にハードコア・パンクに夢中になったんだ。初めて手に入れたハードコア・パンクのアルバムはジョン・ピール・セッションの『Hardcore Holocaust』だったなんて不思議なんだけど。その頃僕はバンドをやっていて、そのギタリストがくれたミックス・テープが僕の人生をまるっきり違うものに変えてくれたんだ。そのテープにはSPERMBIRDS、DESCENDENTS、HARD-ONS、STUPIDS、ADOLESCENTSが入っていた。だからそのテープとの出会いが僕にとってUKとUSのハードコアにのめりこむきっかけになったと言えるだろうね。当時住んでいた町の同年代の奴らは、みんなDAG NASTYやDESCENDENTS等のUSバンドに夢中になっていてUKのバンドは評価していなかった。だけど、僕はその時期からSTUPIDSやHDQやINSTIGATORSがめちゃくちゃ大好きで、USとUK両方のバンドに同じくらいに夢中になっていた。お金があればMEANTIMEやVINYL SOLUTIONといったUKのレーベル作品を優先して手に入れるようにしてたよ。で、高いUSのレコードは友達から借りていたんだ」

■そもそもBOSS TUNEAGEという名前はどうしてつけたのでしょうか?

「この名前は実はあるファンジンから拝借しているんだ。STUPIDS、LOVEJUNKのWolfie Retardがファンジンでレヴュー・ページを担当していてそのタイトルがBOSS TUNEAGEだったんだ。イギリスだと『BOSS』っていうのは、『GOOD』っていう意味も持っていて、BOSS TUNEAGEで『GOOD MUSIC』っていう意味なんだ。それと僕が大のDESCENDENTSのファンで彼等の曲のタイトルは語尾に『age』ってよく付けているから僕が当時住んでいたBOSTONっていう町に『age』をつけた『BOSTON-AGE』を合わせ持った意味で選んだ」

■日本でBOSS TUNEAGEは"メロディック・ハードコア・レーベル"と紹介されることが多いのですが、それについてはどうですか?GERIATRIC UNITなどもリリースしていますが、基本的にはメロディーの良いバンドをメインにリリースしている印象があります。

「8年以上前の僕のリリース作品を見ると明らかにポップ・パンク中心のリリースだったから未だにそう思われているのかな。でも、それは自分で意図してたものではなかったから今は違ったレーベル・カラーになっているね。以前あるファンジンで『BOSS TUNEAGEはDESCENDENTSかLEATHERFACEみたいなバンドばかりリリースしているレーベル』と言われたことがあるよ。僕はポップ・パンク・レーベルとして思われるレーベルをやっているというつもりもなかった。そう思われていることも嫌だしね。僕はレーベルって色々なバランス感覚を持ちながら自分にとっても成長出来るものにしたいと考えている。BEEZEWAXのような純パワー・ポップ・バンドから、GERIATRIC UNITのような対極に位置するハードコア・パンクをリリースしているレーベルなんて他にないでしょ?!」

■再発を手掛けている"Boss Tuneage Retro Series"はどういう基準でバンドを選んでいるのですか?DANやF.U.A.L.、POLITICAL

ASYLUMといった、自分の好きなバンドのリリースがあるのも嬉しいです。

「Retro Seriesにおいては80年代後半から90年代前半のバンドを中心にリイシューしようという意図があるよ。Captain OiやOvergroundのようなリイシュー専門のレーベルは僕が好きな初期パンク音源のリイシューを中心にしているけど、僕は自分が初めて夢中になってシーンに飛び込んだきっかけになったバンドや時代を選んでいるんだ。誰もその時代のバンドの作品のリイシューを手がけていなかったからね。バンドを選ぶ基準は僕が好きなバンドだってことはもちろんだけど、今までにリイシューされていないバンドや、されていたとしても何年も前に廃盤になっているもの、それとブートではなく権利がはっきりしているもの。後は、バンド自身がリイシューを望んでいること。だからリイシュー出来ないときもあるんだけど、リイシューすることになったら選曲からアートワークに至るまで全てをバンドと一緒に作り上げているよ。そのやり方なんでリリースまでに時間がかかってしまうけど。好きなバンドと一緒にきちんと作品を作り上げたいんだ。ライナーもプロに頼むのではなくバンド・メンバーに書いてもらいたいし」

■"ライヴが良いバンドをリリースする"というスタンスのレーベルや、"自分の友達のバンドだけをリリースする"、"メンバーがベジタリアン/ベーガンのバンドだけをリリースする"とか、レーベル毎にリリースの基準が色々とありますが、BOSS TUNEAGEにとってのリリースの基準はなんでしょう?

「僕にとってBOSS TUNEAGEのバンドとしての基準は僕がそのバンドを大好きかってことだけ。レーベルって何か新しいものを提示するものじゃないかな。僕の最近のリリースはその傾向が強いと思う。様々な音楽性から派生しているバンドが中心だと思うし。僕がリリースする上で一番重要にしていることは、僕がその作品を自分で買いたいかってことで、世間の流行とかそのバンドの知名度なんて関係ないね」

■ところで、大学卒業後にはEARACHEで働いていたようですが、どうしてEARACHEで働こうと思ったのですか?そこでの仕事をかなり嫌っていたようですが、具体的にどんなところがイヤでした?

「大学の最終年に単位を取る為にインターンをする必要があったんだ。EARACHEは大学への通学路の途中にあったから選んだ。6週間でそのインターンは終わったんだけど、EARACHEから制作の仕事をしないかって誘いがあって働いたんだ。正直言うと、90年代中期のEARACHEのリリース作品が嫌いだったんだ(笑)。それで音楽そのものが楽しいというより完全な仕事になってしまった。好きでもない音楽(僕個人の好みだよ!)を仕事にしているのはきつかったんだ。でも、EARACHEで働いたことによって、レーベルをやっていくためのたくさんのことを教えてもらえた。もちろん、レーベルを運営していくことで僕が絶対にやりたくないってことも教えてくれたけどね、特にバンドの扱い方は(笑)。僕が90年代中頃に一度BOSS TUNEAGEをストップさせた一番の理由ってのは、その時期に音楽に対する情熱を失ってしまったからなんだ。それからロンドンに引っ越して、CDのプレス工場で働くようになって、またレーベルをやりたいっていう気持ちが湧き出てきた。それで1999年にまたBOSS TUNEAGEを再開した」

■最近ライヴを見て格好良かったバンドってありますか?クラストとかOi!バンドのライヴに行ったりはしますか?

「今年になってからあまりライヴに足を運んでいないんだ。去年はSTUPIDSの全てのライヴで彼等の物販をやったりしていたってのもあって凄まじい数のライヴを見たけれどもね。今はロンドンから80キロほど離れた所に住んでいるから、一番近い場所でライヴを頻繁にやっているのがケンブリッジなんだ。そこでブッキングをしているのが僕の友達なんだけど、今年はブッキングの本数を絞っているからライヴが少ないんだよね。SECTION 13、SHITTY LIMITS、THE MAGNIFICENT、BEDFORD FALLSといったバンドはライヴを見てリリースを決めたバンドだから、ライヴに行くことは大事なことだけど。少なくてもBOSS TUNEAGEのバンドが出演するライヴだったら行ける範囲の距離だったら足を運んでるけどね」

■今のUKシーンについてはどう感じていますか?90年代と現在とでは、大きな違いを感じていますか?

「シーンが細分化されちゃっていて当時のような強固なアンダーグラウンド・シーンは薄れちゃっているね。80年代後半から90年代前半は今みたいに多くのバンドが存在していなかったし、ライヴ自体も色々なタイプのバンドがブッキングされていた。2003年か2004年にFracture Magazine(Maximum Rock'n'RollのUK版と見られていたジン)が休刊してしまってからは、シーンの分断化が進んで情報がばらばらになってしまっているんじゃないかな。何が起きているのかを伝えることが上手くいかない状況でみんないらいらしているね。この間、僕の友達が一番好きな海外のバンドがイギリス・ツアーに来ていたんだけど、彼の地元でライヴがあったこともわからなかったみたいだ。イギリスのシーンには、どこで何があるのかまとまっている情報が必要だったんだよね。インターネットの情報って様々な掲示板から自分が探している情報を持つサイトをみつけられない限り情報は得られないからね」

■今度、ノルウェーのDANGER!MANをリリースしますよね。オスロのDISHONORABLE DISCHARGEというハードコア・バンドのインタヴューをした時(Vol.8に掲載)、彼らがオススメのバンドとしてDANGER!MANの名前を挙げていました。ベテラン・パンクスによる新バンドですが、このバンドをリリースするに至った経緯を教えて下さい。

「これはホントもう偶然にだよ。LIFE...BUT HOW TO LIVE ITのリイシューを進めていて、メンバーのRogerからメールでの連絡が途絶えていたからFacebook経由でコンタクトを取ったんだ。そうしたら彼が今SO MUCH HATE、DRUNK、2:20なんかのメンバーと新しいバンドを始めたって教えてくれて曲を聴かせてくれたんだけど、それがもう半端なく格好良くてぶっ飛んだんだ。それでRogerにリリースしないかって話したら、デビュー・アルバムをCDだけじゃなくてアナログもどうかなって話が膨らんでね。彼等はホントに最高のニュー・バンドなんで、このリリースが決まったことにはすごく興奮しているんだ」

■GREEN DAY、NOFX、BAD RELIGION。この3バンドは、活動の方向性も含めてどう思っていますか?アンダーグラウンドなハードコア・バンドのメンバーにも、"初期のBAD RELIGIONは好き"という人は多いですが。

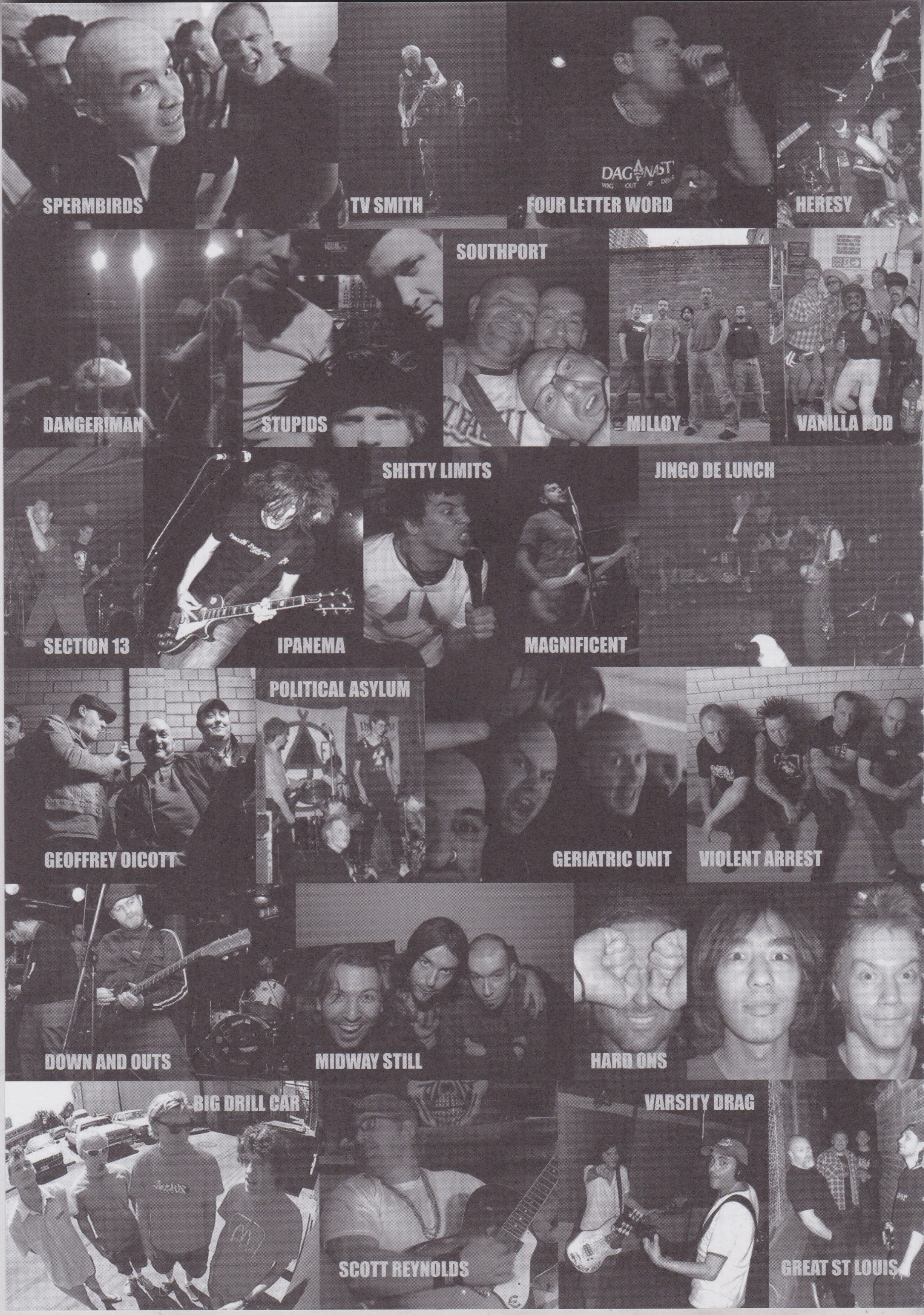
「僕も、BAD RELIGIONの『SUFFER』や『NO CONTROL』は好きだったけどそれ以降は興味がなくなっちゃった。NOFXも同じで『RIBBED』と『THE LONGEST LINE』だけで興味がなくなった。GREEN DAYもLOOKOUTの作品しか聴いていない。ずっと聴き続けてるのはDESCENDENTS、ALL、DAG NASTY辺りで有名なUSのバンドにはもう興味がなくなっているよ。ゲインズビルサウンドと言われるNO IDEAの所属バンドにも好きなバンドはいなくてさ。でも、GREEN DAYやNOFX、BAD RELIGIONに影響を受けたメインストリームの商業バンドを14歳くらいのキッズが聴いて、その後アンダーグラウンド・シーンのバンドに興味を持つきっかけにもなりうるからね」

■あなたが共感できる/好きなレーベルというと、なんでしょう?

「レーベルを始めた当初はMEANTIMEやVINYL SOLUTION、DECOY、WORDS OF WARNING、FULL CIRCLE。アメリカだとCRUZ、LOOKOUTだった。最近のレーベルはバンド自身が立ち上げたり、バンドの友達が立ち上げたりっていう1枚限りの自主レーベルがたくさんありすぎて、ちゃんとレーベルとして運営されているところの名前を挙げるのが困難だよ」

■現在、BOSS TUNEAGEがあなたのメインの仕事ですか?それとも他にも仕事をしていますか?平日の平均的な一日の過ごし方って教えてもらえますか?

「2008年末まではCDとレコードのプレス会社でフルタイムの仕事をしていて毎日ロンドンまで通勤していたんだ。2009年からその会社の相談役にパートタイムでなって、その仕事を家でやったりしてるけど残りはBOSS TUNEAGEをやっている。Julieという僕のパートナーがすでに4年間フルタイム


SPERMBIRDS
TV SMITH
FOUR LETTER WORD
HERESY
DANGER!MAN
STUPIDS
SOUTHPORT
MILLOY
VANILLA POD
SECTION 13
IPANEMA
SHITTY LIMITS
MAGNIFICENT
JINGO DE LUNCH
GEOFFREY OICOTT
POLITICAL ASYLUM
GERIATRIC UNIT
VIOLENT ARREST
DOWN AND OUTS
MIDWAY STILL
HARD ONS
BIG DRILL CAR
SCOTT REYNOLDS
VARSITY DRAG
GREAT ST LOUIS

BOSS TUNEAGE = GOOD MUSIC



でBOSS TUNEAGEの仕事をやってくれているから、BOSS TUNEAGEは1.5人で運営しているってことだな。日々はメール・オーダー中心。朝からリリースが決まっているバンドにメールで進行状況を確認したり、日本で運営してくれているカズと話したり、ペーパーワークに追われているよ。レーベルって思っているよりも多くの管理業務や書面業務が発生するから日によっては朝から晩までそれだけで1日が終わってしまうこともあるね」

■音源のダウンロード販売もされているようですが、一番好きなフォーマットはやはりヴィニールですか?音楽の聴き方もどんどん変化していますが、何か思うところはありますか?

「僕はヴィニールもCDもどちらも好きだよ。ヨーロッパだとCDなんか買わずにヴィニールを買えっていう人が多いけどね。BOSS TUNEAGEの作品はCDとヴィニール両方のフォーマットでリリースしてるけど、CDの方がいつも5倍くらい売れているね。ダウンロードでの販売を開始したのは、廃盤になっていてもリプレス出来ない音源を手に入れたいって質問があったりしたから、オプションの一つとして始めたんだ。後、一番の大きな問題は自分たちでダウンロード販売をしていないと違法ダウンロードをどんどんやられちゃうこと。ファイル・シェアしている人達は気付いていないのかもしれないけど、それがレーベルの息の根を止めてしまうってことだけじゃなくて、バンドの活動をも困難にしてしまうことを理解して欲しい。基本的にバンドがレコーディング代をカヴァーしているから、その行為が回り回って好きなバンドに影響を与えてしまっているんだ。もちろんセールス自体毎年厳しくなっているのも事実だね。だからリリース作品も以前のように好きだからといってどんどんリリースは出来ないから、きちんと先を考えないといけなくなってきている。残念なことだけど、新しいバンドをリリースするのは厳しくなってきているよ。支払いにも追われているから、それをカヴァーするためにある程度のセールスも考えないといけないんだ。悲しいけどこれも現実なんだよ」

■色々なことがあったと思いますが、この20年を振り返ってみての感想を聞かせて下さい。

「最初のシングルをリリースしてからの20年間を振り返ってみると280作品もリリースに関わってきたなんて信じられないよ。ちょっとリリースし過ぎたかなとも思うけどね。いくつかのリリースは世間的に評価が高い作品に並ぶものを発表出来たし、リリースしたいと思っていた過去のクラシックな作品もリリース出来ていると思っているよ。でも殆どの作品は思っていたよりも評価されていないけどね。自分で言うのもなんだけど、僕はリリースすることに取り憑かれちゃっているのかもしれないな(笑)」

■"Too Much Music... Too Many Bands: 20 Years Of Boss Tuneage Records 4xCDセット"をリリースしますが、どんな作品か読者に紹介してもらえますか?それと、今後のリリース予定も教えて下さい。

「ファースト・リリースから20年を経て何か記念の作品を作りたかった。当初はリリースしているバンドに、レーベルの他のバンドをカヴァーしてもらう作品だけを考えていた。だけどそのカヴァー・アルバムだとレーベルの一面しか聴いてもらえないし、Retro Seriesも重要なレーベルの部分だからね。それに全てのバンドがカヴァー・アルバムに参加出来るわけもないって気付いてね。それならRetro SeriesでCDを1枚まとめて、リリースした作品で僕らが特に好きな曲でまとめて1枚追加、さらに廃盤になっているものや未発表曲をまとめたCDも追加って形になって、気付いたら120曲で4枚組のCDボックスセットになったんだ。未発表曲は27曲、レアになっている音源やこれまでにCD化されていない音源も50曲収録しているよ。かなり壮大なプロジェクトになってしまった。だから、この作品はBOSS TUNEAGEの全てを詰め込んだディスコグラフィーでもあり、レーベルの小さな歴史でもあるんだ。みんな手に取ってくれるといいな。この音源のリリースの後は先ほど触れたDANGER!MANのアルバム。それとずっと待ち望んでいたDEPRAVEDとVISION OF CHANGEのリイシューになるよ。まだまだ進行中のリリースはいっぱいあるからね!」

■日本の読者にメッセージをお願いします。どうもありがとうございました!

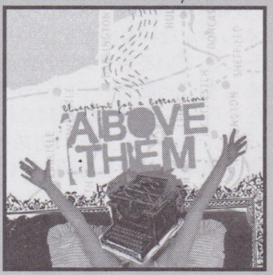
「インタヴューの機会を与えてくれてどうもありがとう。それから僕らがやっている小さなレーベルを長年にわたってサポートしてくれている日本のみんなにも感謝を言いたい。僕らがリリースしているいくつかの作品は、世界中でも日本で一番売れているものもあるんだ。だから日本のみんなにはこれまでも、これからも、サポートしてくれてありがとうって大きな感謝の気持ちを持っているよ」



WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING Vol.9 UK

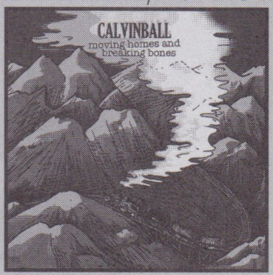
TEXT:
Yuki SP(Y)/WSオニギリ(O)

ABOVE THEM/BLUPRINT FOR A BETTER TIME



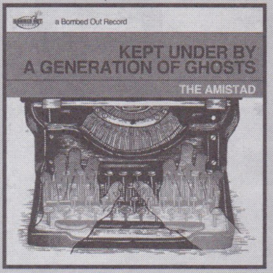
90年代中期から00年代初期に世界中で盛り上がったエモ・シーンの中心的レーベルだったDEEP ELMの人気コンピにもひっそりと収録されていたバンドですが、この1stアルバムでは中期以降のSAMIAMを思わせるめちゃくちゃ歌い上げるエモーショナル度満点のヴォーカルによるメロディック・バンドで、SAMIAM大好きなおれとしては評価が甘くなっちゃいます。イギリスの期待2レーベルが共同でリリースしたのも頷ける作品。アナログ盤は限定300枚。(O)
(INHALER, ROIDH/INH006, ROIDH004)CD/LP 2009年

CALVINBALL/MOVING HOMES AND BREAKING BONES



熱心なメロディック・パンク・ファンの注目を集めている若手バンド。正直にいうとUSからの影響が濃いバンドでLATTERMANやJAWBREAKERといったバンドを連想させるサウンド。けれども、ツイン・ヴォーカルに合唱コーラス等熱くさせてくれる要素はたっぷりで今後確実に化けてくれる存在になりそうなのは確かです。現に、多くのレーベルがすでに彼らの作品をリリースしているしね。1stプレスは速攻で完売した模様で、ジャケも一新して再発されました。(O)
(THIS ONE'S FOR THE CREW/FTC005)CDR 2009年

AMISTAD/KEPT UNDER BY A GENERATION OF GHOSTS



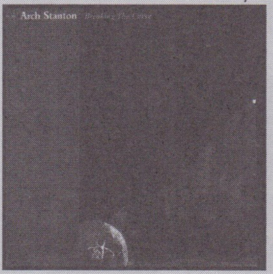
期待されていたのにあっさり解散しちゃったFOUR DUMB KIDSを母体として結成されたシェフィールド出身のバンド。LEATHERFACEやLEATHERFACE経由のいっぱいいるUSのバンドの影響を大いに感じるメロディック・バンド。でもメロディーがやっぱりイギリス人特有の陰りある感じなんでUKメロディック・パンク好きだったらチェックを！これまでスプリットを2枚リリースしていたけど大成長を遂げた今作。LIFETIMEファンもにんまり笑える隠し技ありです。(O)
(BOMBED OUT/BOMB025)CD/LP 2010年

CAVES/ST



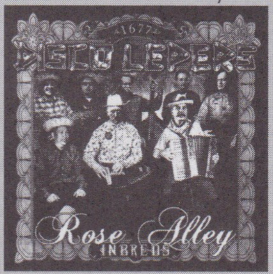
MEASURE(SA)とSPLIT EPもリリースし、これから！という時にあっさり解散してしまったFLAMINGO 50のヴォーカルLOUISE嬢が帰ってきた！透き通った伸びのあるLOUISE嬢のヴォーカルは、やっぱり心をグサグサと突き刺してくるので、哀愁汁が染み出るのを止めることは不可能です。重みの無い軽くフランクなサウンドもこのステキなヴォーカルを引き立てます。USのWORMBURNERともSPLITリリース予定だそうです。今から断言できます。それ、大名盤！(Y)
(SPECIALIST SUBJECT/SPS003)EP 2010年

ARCH STANTON/BREAKING THE CURSE



BOSS TUNEAGEからもリリースしていたSOUTHPAWのヴォーカル以外のメンバーが結成したバンド。はっきり言ってかなり地味です(笑)。だけど聴いているうちにどんどんハマっていくというまさにUK独特の味があります。前身バンドの後期のエモ路線を引き継いだ音なのでメロディック要素は薄いです。これまでに3作品リリースされていますが、この音源には名曲が収録なので。なんと解散して、またSOUTHPAWとして活動するそうです。ぎゃふん！(O)
(FIXING A HOLE/FIX-18)CD 2009年

DISCO LEPERS/ROSE ALLEY INBREDS



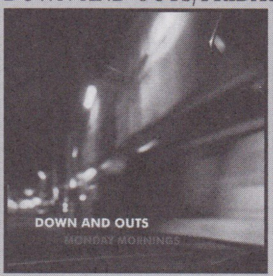
バンド名が似ているとの理由で日本でも大人気のCUTE LEPERSともスプリット音源をリリースしているパンク・ロック・バンド。この2ndアルバムでは大変化を遂げています。これまでの70'sスタイルなパンク・ロックも最高にかっこ良かったけど、今作ではカントリーやフォークも感じるパワーポップになっているのでポップ・パンク・ファンにも聴いてもらいたい。ヴォーカルのMarcoさんは色々なバンドをやっているんだけど、どれもがかっこいいので気になる方は是非チェックを！(O)
(SHATTERED DEBAUCHEE/SDP003)CD 2010年

BANGERS/DUDE TRIPS



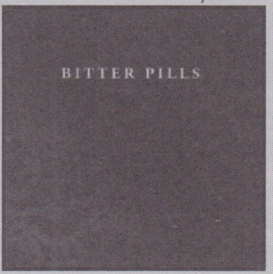
USのART OF THE UNDERGROUNDのシングル・シリーズにも参加していた期待の新星が、現時点でのディスコグラフィー盤的な10曲入りCDを自身のレーベルからドロップ。昔ながらの湿り気UKメロディック・サウンドと、USで盛り上がりを見せるビチビチシンガロング・メロディックを見事に配合したニューUKメロディックのお手本的サウンド。終始拳を突き上げてしまうことで、2日後の筋肉痛が心配になってしまう1枚。(Y)
(SPECIALIST SUBJECT)CD 2010年

DOWN AND OUTS/FRIDAY NIGHTS, MONDAY MORNINGS



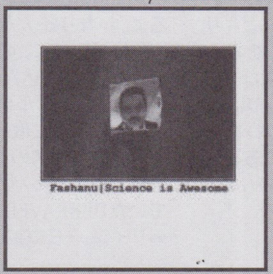
ex.GRAMPUS EIGHTという知ってる人が何人いるのかわからないようなバンドのヴォーカルが現在やっているのがこのバンド。CLASH、またCOCK SPARRERのようなOiパンクからの影響大なシンガロングなサウンドなんですけど、線の細いヴォーカル故に泣きメロディック・ファンは大好きなのではないでしょうか。この2ndアルバムは捨て曲なしの名盤。だけど廃盤になってしまっていたのはあまりにももったいなさ過ぎたので、頼み込んで100枚だけリプレスさせてもらいました！大好き。(O)
(WATERSLIDE/WS048)CD 2010年

BITTER PILLS/ST



ex.HOOTON 3 CAR、BROCCOLI。その情報を聞いた時は三日三晩興奮のため寝れなかったくらいのスーパー・バンドのデビュー作。CHRISがH3C～OHNO EXPRESSと歩んできたサウンドをそのままにBROCCOLIの哀愁を手に入れてしまった今、もはや敵うものなど見当たりません。この湿り気満点のメロディーとギターを聴いただけでH3C/BROCCOLIの日本ツアーがあった1998年にタイムトラベルできちゃいます。とにかくメチャクチャ良いので、あとはしっかり活動してくれれば…。(Y)
(BOSS TUNEAGE/BTRC048)CD 2010年

FASHANU/SCIENCE IS AWESOME



ドラム・メンバーが金髪美女。これだけで名盤確定であることは言うまでもありません。男2女1の若者3人組のデビュー作6曲入りミニ・アルバム。USのLATTERMANから影響を受けたであろうシンガロング・メロディック・サウンドを軸に、若さほとばしる勢いのままに走り抜けます。まだまだ完成されていない感があり、伸びしろもたっぷりありそうなので、次作を毎晩指折り数えて、全曲一緒に歌いながら待ち望んでいます。私的2009年ベスト・リリース作品。(Y)
(DISCOUNT HORSE/DH006)CD 2009年

アッサラーム！ずっとUS勢の勢いに押されっぱなしのイギリスのメロディック/ポップ・パンク・シーンでしたが、ようやくここ最近になって現在進行形で活動しているバンドでカッコいいバンドが突如増えてきているので、この辺で一度紹介をさせていただきます。やっぱりBOSS TUNEAGEのリリースが多いので何作品かを取り上げることになっちゃいましたけど…。今回紹介した音源は全て入手可能な作品のみです。イギリス来そうですね。次号は、いつも通りに戻って好き勝手なイギリス編をお届けしたいと思います。

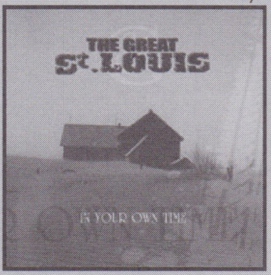
GORDON GANO'S ARMY/ST



ART OF THE UNDERGROUNDシングル・シリーズへの参加から一気に人気に火がつきあれよあれよという間にリリースされたGGAの1stフルレングス。ショボくてどこか切ないサウンドはONION FLAVORED RINGSのファンにとっては生唾もの。全員合唱ヴォーカルも非常にキャッチーで歌いやすいので、部屋で一人でエアGORDON GANO'S ARMYごっこを週3はしてしまいます。歴史的名盤になりうる名盤。(Y)

(ART OF THE UNDERGROUND/AOTU061)CD/LP 2008年

GREAT ST LOUIS/IN YOUR OWN TIME



前作「FOREVER NOW」から4年、待望の2ndアルバム！前作と同様にもちろんLEATHERFACEの影響はありますが、それだけで終わるわけではなく今作は見事にしっかり自分たちのカラーも出しています。今作は何度も何度も聴きたくなるような名盤に仕上がっています。SOUTHPAWやABSのようなUKメロディック・ファン絶妙な展開もあり、USメロディックのようなキャッチーさもあり、お見事としか言いようがないほどの名盤。来日する予定だったけどお金がないとかで延期になっちゃった！(Y)

(BOSS TUNEAGE, JSNTGM/BTRC03)CD/LP 2010年

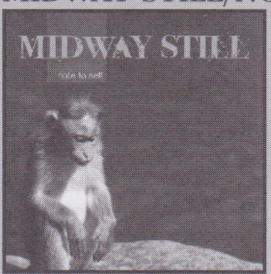
MAGNIFICENT/PAY THE CRIMES



多くのバンドを輩出しているリーズから現れた3人組。これが完全にCLASHの影響が色濃いイギリス人でしか出せないメロディーを持つパンク・ロック。もちろんコピーではなく、そこに彼等なりの現代のエッセンスが加えられています。これはアルバムを通して聴いてもらわないと彼等の良さが伝わらないのではないかな？向こうでは日本でいうところのバンドマンに愛されるバンドな存在になっています。ちなみにベースはMr. BEANに似てる。(O)

(BOSS TUNEAGE/BTRC034)CD 2009年

MIDWAY STILL/NOTE TO SELF



30代以上の人であれば、えっ現行のバンドじゃないじゃん！って思うのかもしれませんが、復活しちゃったんですよ。そしてリリースされたこのアルバムはMIDWAY STILLのメロディックな部分が最大限に引き出された傑作。当時リアルタイムで聴いていた人からもベスト・アルバムでしょうと言ってもらえている内容です。やっぱりこういうギターがばーんと前面に出てるのってかっこいいです。宣伝になっちゃうけど11月に日本ツアーを行います。もちろんDIYツアー！(O)

(BOSS TUNEAGE/BTRC053)CD 2010年

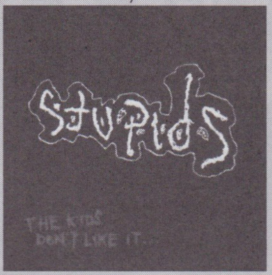
SERF COMBAT/SHOT BAKER/SPLIT



UK vs US SPLIT。このUK担当SERF COMBATを初めて聴いた時あまりのかっこよさに気を失いそうになったのを覚えています。エモーショナルなギターからまさかのハンドクラップへもつれ込むイントロ、そしてその勢いの渦は見る見るうちに大きくなり、サビの一歩前で「ゴー！」というやたら軽いシャウト。そのゴーの掛け声と共に近所の池に危うく飛び込みそうになったとか、ならないとか。アルバムも現在製作中のようで非常に楽しみです。(Y)

(UNDERGROUND CUMMUNIQUE, HOME OF THE BRAVE/UCR032)7" 2009年

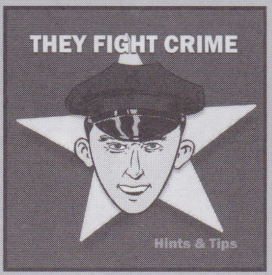
STUPIDS/KIDS DON'T LIKE IT



今更このバンドについての説明はこのジンでは不要ですよね。彼等が再びシーンに戻ってきたことだけでもうれしい。そして産み落としてくれたこのニュー・アルバムはブランクなんて一切感じさせない傑作！昔の方がいいよという人が多くいることはわかります。だけど2010年度版STUPIDSも激烈にかっこいい！そんなことを代弁してくれているような2010年度版STUPIDSの姿がここに。お金の為の再結成じゃないんだよ。実はTommyは日本に4度も来日してる。(O)

(BOSS TUNEAGE/BTRC030)CD/LP 2010年

THEY FIGHT CRIME/HINTS & TIPS



ex.ELMERHASSEL、SPACE MAGGOTS。極々一部の地味メロディック・ファンにとっては涙が出るほど嬉しくなるような前述のバンドのフロントマン、「地味メロディック・パティシエ」の異名を持つ(←今考えました)CLIVEによるニュー・バンド。10年以上経っても全く成長するそぶりを見せない地味サウンドは、ありそうでない、UKメロディック界のスキマ産業。こういうサウンドを聴くと、明日もがんばろうって気持ちになります。ここ数年音沙汰無いけど、多分またひょっこりこっそり出てくると思います。だって活動も地味だもん。(Y)

(STAGETIVE/DIVE013)CD 2006年

TOWN BIKE/GO! FIGHT! WIN!



TOKYO ADVENTURESなどをリリースしていたKEITH RECORDSのオーナー、FLAMINGO 50のメンバーなどで結成された4人組。デモ音源、シングルEPに続いてリリースされたフルレングス。初期音源に見られた投げやりでチープな雰囲気が非常に好みだったのですが、今作では恐らくばっちり気合を入れたのでしょう、非常に安定感バツグンなガールズPOPサウンドに変貌を遂げてしまっており、なんとも煮え切らない気持ち。昔のあいぽんの方が好きだったんだよ！みたいな。(Y)

(SUPER KAWAII POP, FIXING A HOLE/SKP001, FIX-29)CD 2009年

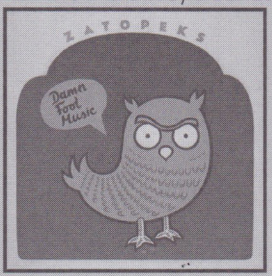
WONK UNIT/FLYING THE JAPANESE FLAG



FLYING MEDALLIONSというSNUFFなどとも親交のあった一風変わったサウンドのバンドをやっていたメンバーが在籍する3ピース・パンク・バンド。GREEN DAYやSEWER TROUTなど初期LOOKOUT的なバークレー・イーストベイ・ポップ・パンクをUK風にアレンジしたサウンド。もっと知名度が上がってもいいのではと思うバンドだけど完全にヘロ〇ン中毒なのは内緒(笑)。ライヴでは曲よりもしゃべりが長いのが玉にキズ。しかしジャケ酷いな。メンバーとメンバーの彼女の写真だけど。(O)

(HOMELESS DRUMMER PUBLISHING/HDR002)CD 2009年

ZATOPECKS/DAMN FOOL MUSIC



イギリスが世界に誇るハートフルPOP PUNKバンドの2ndアルバム。RAMONESやBEACH BOYSを基調としながら、パンク・ロックだけではない色々なエッセンスを注入したことで、見事なまでの優しいサウンドに仕上がりました。音楽が世界を救う、だとか臭い言葉もこのバンドにならば使ってもいいんじゃないかと思います。年を追うごとに残念なくらい濁っていく心を彼らのサウンドで少しでも洗浄しましょう。(Y)

(WHOA OH/WOR113)CD 2007年

レコード屋さん密着24時!!

高円寺 BOY編

普段、何気なくお世話になっているレコード屋さん。しかし、その仕事の実態とは一体どういうものなのか？知っているようで意外と知らないその秘密を探るべく9月某日、高円寺のBOYにお邪魔して朝から晩まで一日中密着してきました〜。



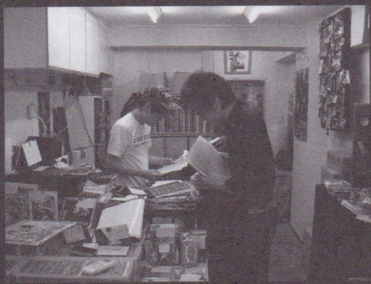
11:20
店長の大倉さん出勤。
開店は13時でも、その前にやることが盛り沢山。



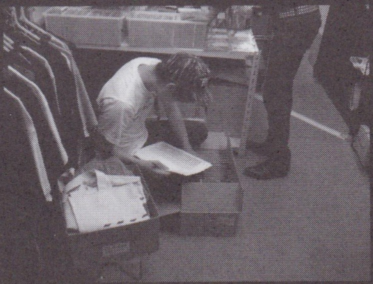
11:30
前日は終電ギリギリまで入荷処理などでバタバタしていたそうで、レジ締めを朝一で行う大倉さん。



11:50
ちなみに開店前のBGMはマイケル・シェンカー・グループでした(笑)。



12:00
バイトのヨモ君が出勤。
今日やることを色々と打ち合わせ。



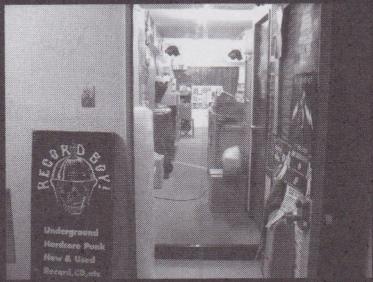
12:10
ヨモ君の今日の仕事は、ひたすら委託商品の在庫確認。リストを見たら大量にあったので大変そうでした…。



12:15
開店前にメールでの注文をまとめて、商品を確保。



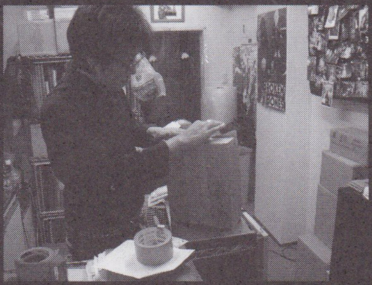
12:50
一通りオーダーをまとめ終わったので、店内のライヴ・フライヤーなどを貼り替えます。



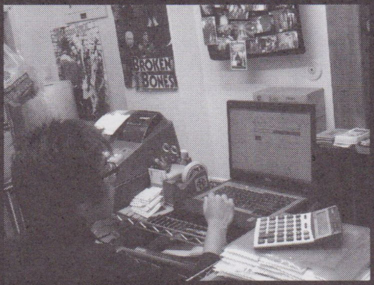
13:00
開店!!
今日はどんな一日になるのでしょうか。



14:00
電話での問い合わせや注文もあったりと忙しい。僕はもっとのんびりした商売かと思っていました…。



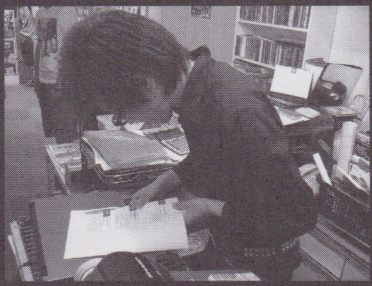
14:30
慣れた手つきで、いくつもの通販商品を梱包していきます。



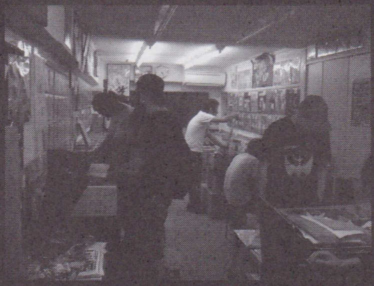
14:50
新たな注文メールや、通販代金の振込がないかなども随時チェック。



15:40
在庫確認を終えたヨモ君は、休む間もなくカード(レコード/CDにつけるコメント)を書きます。



16:00
通販の荷造りが一段落したので、大倉さんもカード作成作業をちょっと手伝います。



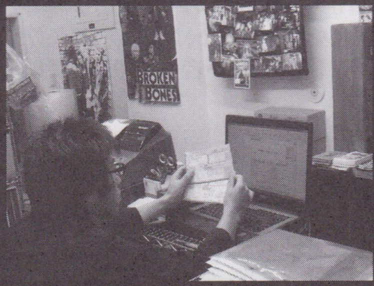
16:05
ここで、来日中のGERIATRIC UNITとCRUCIAL SECTIONの皆さんが来店!!



16:10
Kalv(GERIATRIC UNIT〜ex HERESY)と10年ぶりに対面・談笑する大倉さん。



16:30
仕事を終えたヨモ君があがります。お疲れ様でしたー!!



16:35
先程まとめた注文メールの返信に取りかかる大倉さん。



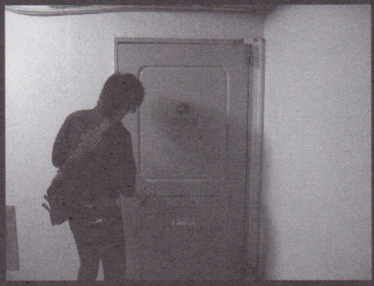
17:50
ひたすらメールの返信では疲れるので、合間を見て面出しレコードを入れ替えたりして、気分転換をするそうです。



19:30
最近のBOYの一押しはスウェディッシュ・ハードコア・デスメタル・バンド、BASTARD PRIEST。



20:40
20時閉店ですが、メールの対応などもあり定時にあがれるわけがありません。



22:10
片付け〜戸締まりをして、本日の仕事終了!!僕がいたので気を使って、いつもより早く終えてくれたようです。一日お疲れ様でした!!

Latin American Punk/Hardcore

日本の(大体)裏側に位置するラテン・アメリカ諸国。
その中ではブラジルがバンド数・知名度ともズバ抜けているわけですが、あまり知られることのないその他の国々のパンク/ハードコア・シーンはどうなっているのか。
コロンビア、ウルグアイ、メキシコ、ベネズエラで活動中のバンドにインタヴューを行い当地の事情を探ってみました。現地の息吹・躍動が多少なりとも伝われば幸いです。

NAGÄF from Colombia

コロンビア。政府軍とゲリラとの内戦、殺人・誘拐の発生率世界一といった恐ろしいイメージが強かったわけですが、近年では治安も回復してきているみたいです。海外企業の参入は増加の一途をたどり、経済の上向きも期待されているようですが、当地の現行のハードコア・パンク・バンド及びシーンはどうなっているのか。
アメリカのFROM THE DEPTHS(ex.CATHARSIS等)とスプリットをリリースしたことのある、コロンビアはボゴタを拠点に活動中のNAGÄFのメンバー、Omarに話しを聞きました。NAGÄF自体、アンビエントの要素とTRAGEDY的なモダン・クラストを融合させた高精度の格好良いバンドで、新しい音源も予定しているようです。是非チェックしてみて下さい。



■メンバーそれぞれの音楽的なキャリアを詳しく教えてください。NAGÄFはどんなふうに始まったのですか?

「今のNAGÄFは5人編成で、プロフェッショナルなミュージシャンは1人もいないよ。ただ、音楽を通して、表現しコミュニケーションを取り合い、思いがけない出会いをしていこうって人間の集まりさ。メンバーを紹介しておこう。

Jhon：ドラム。10年ほどREACTIÓN PROPIAに在籍。今は反資本主義ストレートエッジのRES GESTAEもやっている。
Omar：ベース。REACTIÓN PROPIAで8年間活動していた。2ケ月間だけMANO DE OBRA BARATAってバンドにも在籍。インディペンデント・レコードのPersistencia Recordsもやっている。
Cristian：ギター。元PROPIA IDENTIDAD。今はパワーヴァイオレンス・バンドのGRITA O MUEREのドラムでもあり、SABOTAJEのギターでもある。
Juan：ギター。REACTIÓN PROPIA、OTRA ALTENATIVAの元メンバー。
Nicolás：ヴォーカル。過去にヴェイガン/ストレートエッジ・バンドのXTERMINIOでヴォーカルとギターをやっていた」

■NAGÄFの意味は?

「"NAGÄF"は旧約聖書を批評的な立場から研究しているテキストから見つけたんだ。この本によると"NAGÄF"はヘブライ語で、"強要する、挫折する、侵害する、強奪する、倒れる、罰する、結果を台無しにする、傷つける、殺す、征服する"などの意味があるようだ。そして、地球上に存在する辛さや苦しみは、神に本質的な責任があるものとしている。そういう意味から"NAGÄF"を、支配を基にした社会的な関係が永久に続くこと、領土、及び肉体と精神の征服、それらは"神"に罪がある証拠だと俺たちは捉えたよ("神"は言い換えれば、王、資本家、皇帝、軍人、地主、宗教家、政治家でもあるし、こういう人間たちは、決して間違いを犯さない者のように自らを演出し、さも真実は一つだけのように示しているよな)。
だからNAGÄFと名づけることで、世界を特定の考え方で一つにしてしまおうとするあらゆる抑圧に対し、拒絶を表しているのさ。特定のヴィジョンを弁護するんでもなく、俺たちが暮らすラテン・アメリカに見られるような、暴力・脅迫・抑圧・検閲・"正しいとされる"社会的なふるまいを強要するんでもなくてね。ラテン・アメリカで目にするのは、流血と砲撃で作り上げられたものに服従させられる現実さ。結局、人間・動物・地球の支配を根底にした社会システムが永久に続いているんだ」

■FROM THE DEPTHSとのスプリットCDは素晴らしいですね!彼らとスプリットCDを作ることになったのはなぜでしょうか?

「Crimethinc(USのアナキスト集団)が出しているバンドはよく聴いていたよ。CATHARSIS、ZEGOTA、THE SPECTACLEなどをね。サウンドも歌詞もコンセプトも高く評価しているんだ。それに共通した感覚を持つBrian(元CATHARSIS。今はFROM THE DEPTHS)ともEメールでコミュニケーションを取り合っているしさ。事実、彼は数年前に2つのポリティカルなカウンターカルチャー・ムーヴメントで活動していたこともある。
まず俺たちは他の国や文化にNAGÄFを知ってもらうために、コロンビア以外の国のバンドと2wayスプリットCDを作ろうと考えて、CD用に曲をレコーディングし始めたのさ。それからBrianに手紙を書き、FROM THE DEPTHSはスプリットを作る可能性はあるか、興味があるかどうか尋ねてみたよ。戻ってきた返事には、今新しい曲もいくつかあるし、スプリットを作るのに問題はないとあった。彼らと常にコミュニケーションを取るようになり、スプリットCDを出すに至ったのさ。実現できて嬉しく思う。
CDのサウンドやアートワークが素晴らしいからってわけじゃなくて、この2つのバンドは、自分たち自身のやり方で、現実の政治や経済システムを打ち破ろうとするポリティカル・シーンを構成しようとしていると思うんだ。それと同時に、新しい世界を作り上げようとする情熱的なアイデアを表現しているから」

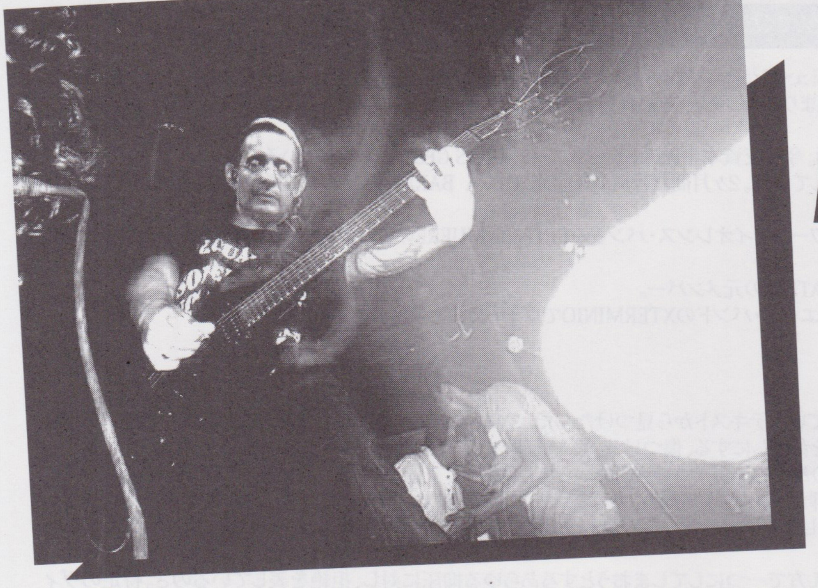


■スプリットCD以外のリリースは?

「今のところ(2010年9月)はないんだ。入手できる作品もない。でも近々、新しい作品をレコーディングする予定はあるよ。あるレーベルと一緒にメキシコで編集するつもりでいるんだよ。フォーマットはたぶん俺たちの希望もあって、ヴィニールになると思う。できるだけ早く日本に作品を送るよ。この新しい作品が他の国でも再編集され、別のフォーマットで出せるといいね」

■あなた方の曲は複雑で、繊細さと破壊性を同時に感じます。1曲作るのにも時間がかかるかと思いますが。

「毎週集まって少なくとも2時間は練習するようにしているんだ。十分な時間でないことはわかっているが、スタジオに入って練習する費用は高いからどうしようもない。他にもやらなくてはならないこともあって、時間も限られているからね。曲はスタジオで作っているよ。ちょっとずつみんなの頭に浮かんだアイデアやリズム、コードをつないで曲にしていく。面白いのはメンバーみんなが自分の楽器に固執してないってことかな。ドラムがギターを考えたり、ヴォーカルでドラムを表現したりとね。幸いなことにNAGÄFは音楽的に妥協するバンドではない。いわゆる、ハードコア・パンクかそうじゃないかって意見に執着せず、自分たちが単純に興奮してしまうアイデアや意見を加えていこうとトライするのが好きなのさ。アレンジに時間をかけるのも好きだね。練習の度によくアレンジを加えているよ。ちょうど今レコーディングしていて、アレンジを



足したり引いたりしているところなんだ。話をまとめると、俺たち5人とも曲作りには積極的に参加していると言えるね。音楽に関してはかなり近い感覚を持っているよ。いつも自分たちのやっている音楽に情熱を傾けている」

■最初に聴いたハードコア/パンク・バンドはコロンビアのバンド?USやUKのバンド?

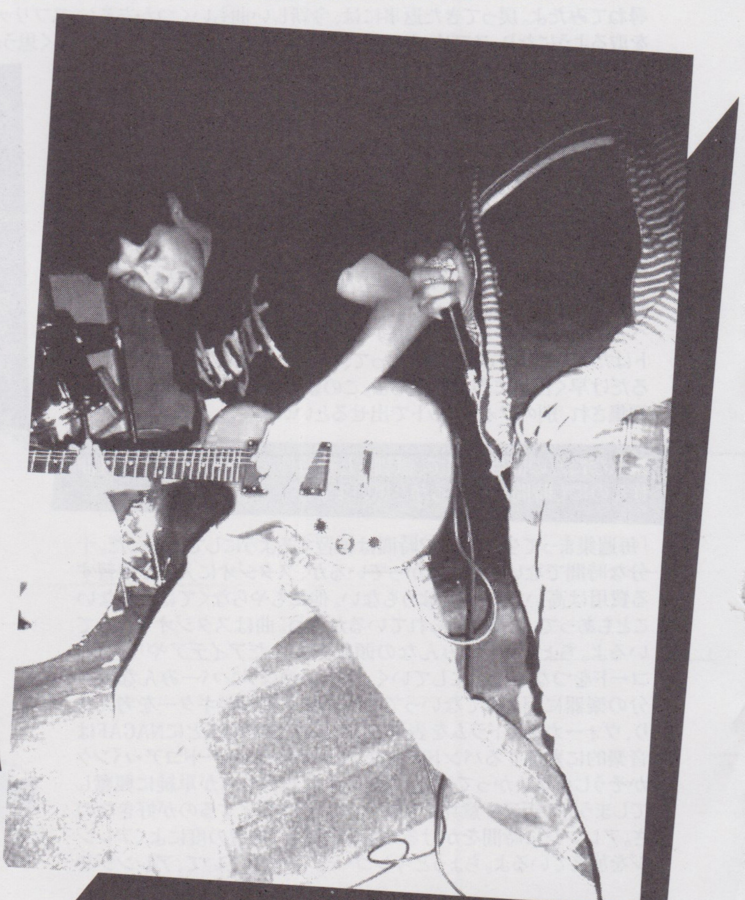
「NAGÄFはまだまだ新しいバンドさ。2年くらいなもんだね。ちょうど今はメロディックなリズムもあり、重たいアンビエントな要素もある、コントラストがはっきりしたクラスト・バンドを作ることに関心があるんだ。
こういう感覚はEKKAIA、MADAME GERMEN、ICTUS、THE SPECTACLE、FALL OF EFRAFA、ICOSなどのヨーロッパのバンド…それから、TRAGEDYやFROM ASHES RISE、ISIS、CATHARSIS、SNAPCASE、BEHIND ENEMY LINESのような北アメリカのバンドを聴いてきたからかな(今も聴いているよ)。とは言っても、影響を受けているのは挙げたバンド以外にもたくさんあるな。パンク、メタル、ハードコア、ヒップホップ、ロック、他にもありとあらゆる様々なジャンルを聴いている。しかしNAGÄFは音楽だけではないし、聴いているものにだけ影響を受けているんでもないんだ。カルチャー、政治、経済、自国の社会的状況、俺たちが暮らしている社会の軍隊、人々の苦闘、グローバリゼーションの弊害、抑圧、仕事の現実、政府の働き、アンデス、農民、権利を求めて戦う道徳論、もちろん自分たちの毎日の経験にも影響を受けているよ」

■コロンビアのハードコア/パンク・シーンが知りたいです。コロンビアのハードコア/パンク・バンドの第一世代については知っていますか?それって80年代の中頃ですか?

「80年代のコロンビアには、ボゴタ(コロンビアの首都)にもメデリン(コロンビアの都市)にも自らを"ハードコア"と名乗るバンドは少なかったよ。"ハードコア"という言葉がボゴタに入ってきたのは90年代になってからなんだ。コロンビアのハードコア・シーンの初期、ハードコアをプレイしていると言われたバンドは孤立していたな。
しかし1996年になると、バンド、ライヴ、ファンジンなどを含む、強固なハードコア・シーンが確立されていったよ。俺たちはこのシーンをSBHC(Santafé de Bogotá Hardcore)と呼んでいるんだ。コロンビア・ハードコアの最初のバンドの一つと言われるのがSIN SALIDA(NO EXIT)で、BREAKDOWNやOUTBURST、THE ICEMENのような80年代のNYHCに影響を受けたバンドだ。団結や規律、クルーとの結びつきをメッセージにしていたよ。このバンドには国軍に寄せる歌もあって、NYHCが生まれる以前には見られなかった要素を持っていた。そういう歌詞があってもこのバンドはファシストだったわけではなかった。
だが、すぐに右翼バンドとレッテルをはられてしまったな。1995年の終わり頃に、SIN SALIDAは最後のライヴをやっている。メンバーの中にはその後数年間、シーンの中で積極的に活動する者もいたよ。その後のハードコア・シーンに現れたバンドにとって、SIN SALIDAは一つの指標でもあった。
多くのバンドにとって彼らはコロンビア・ハードコアを語る上で大事な"過去"だね。しかし新しいバンドにとっては、ただの過去になりつつあるかもしれないな。
ハードコア・シーンが死滅してしまった数ヵ月後、EXIGENCIA、DE FRENTE、ATAQUE EN CONTRA Y PITBULLなどのバンドが現れた。SBHCは続きライヴも開催され、後にブカラマンガ、カリ、メデリンなどの他の街でもバンドが生まれていったよ。
1998年になると、DAR A CADA UNO LO QUE ES SUYO、REACCIÓN PROPIA、RESPLANDOR、JUVENTUD OPRIMIDA、RAZA、ZONA CERO、CARÁCTER、LÍNEA RECTA Y ABISMOなどが登場してくる。自分たちでライヴを企画し、"Do It Yourself"のイデオロギーを持ち、作品を作るようになる。これがコロンビア・ハードコア/パンク・シーンの歴史の一つの起源だよ」

■今のコロンビアのハードコア/パンク・シーンにはどんな印象を持っていますか?お勧めのバンドはいますか?

「今のコロンビアのハードコア/パンク・シーンは多岐に渡っているな。ジャンルもポリティカルなイデオロギーもハードコア/パンクに関する考えも様々だね。ボゴタのシーンには支持者が



たくさんいるが、残念なことに政治的な面は薄いな。メッセージ以上に芸術性を重視しているし、テクニックのほうが情熱を越えている。このシーンにはメタルコアやニュースクール、NYHC、モッシュコアなどのバンドもいる。こういうパンク・シーンはドラッグを乱用しているし、政治的な考え方を持たない、単なる"反抗"の姿勢をただ繰り返すことから抜け出すことができないんだ。
この状況を考えれば、自分たち自身でオーガナイズしようとしているのが俺たちのシーンかもしれないな。音楽を愛しているが、それが終わりではなくて、ポリティカルを表現することを意味する。社会が変わること、強固な関係、俺たちの国との闘いや宗教との闘いを批判的に議論する場所を求めて努力している。シーンに関わっている人間は多いとは言えないが、俺たちが勢力的に動こうとしているのは間違いないよ。このシーンで活動している興味深いバンドには、SABOTAJE、GRITA O MUERE、RESGESTAE、LA VENDETTA、ACCIÓN POR EL CAMBIO、AMOR Y RABIA、SANGRE Y FE、POSITHINKらがいるね。
他にもこのシーンのバンドとは言えないが、俺たちの友達でもある、OTRA ALTERNATIVA、DAR A CADA UNO LO QUE ES SUYO、RESPLANDOR、BILLY THE KIDなども活動しているよ」

■コロンビアの良いレーベル、ファンジン、パンク・ショップなども教えてもらえますか。

「メンバーの1人がPersistencia Records(http://www.myspace.com/persistenciarecords)というレーベルをやっているんだ。Persistencia RecordsはDIYレーベルとして、2000年から運営されている。俺たちのスプリットを出してくれたし、次回作もリリースするサポートをしてくれて感謝しているよ。Step Down Records、Fragment Music Colombia、Sin Fronteras Discos、Gritos De Esperanza、La Sospecha Criminalなども勢力的に活動しているレーベルだね。
ファンジンに関しては、今はあまり存在していないのが本当のところだな。数年前には積極的にやっていた人もいたが、今ではRes Gestae Colectiveが発行している『Jóvenes Ingobernables(Indomitable Youth)』くらいだね。俺たちが知っているボゴタのパンク・ショップは、Rojo y Negro、Cachalote Music、Revolution Storeになるかな。全てDIYで運営され、ハードコア/パンク・シーンに関わっている人がやっているよ」

■いつもどんなところでプレイしているのですか?バーやクラブ?

「他のバンドやポリティカル・ネットワーク、それから俺たちと近い関係にある者が企画したライヴに出演することが多いよ。活動の目的を認めることができるものは積極的にサポートしていきたいと思っている。
たとえば、動物の権利、フェミニズム、反資本主義、反軍国主義などの問題に本気で取り組んでいるイヴェントでプレイすることも多い。ポリティカル・オーガニゼーションをサポートするために資金を募る目的で開催されるフェスティバルに出たり、カウンターカルチャーのスペースや反体制文化に対し強い考えを持った会社を広めようとしている地域のイヴェントに出たりもするよ。もちろん、友達が誘ってくれるイヴェントにも出ている。バーやクラブ、カルチャーセンター、公園、それから、俺たちが興味を持った活動をやっている所ならどこでもプレイしているよ」

■国の政治や内戦についてはどう考えていますか?

「それを取り上げるのはかなり複雑だし、幅が広すぎて難しいな。でもこの国が社会の特定の小さな部分を特別扱いする経済や政治システムに陥っているのは明白だ。その反面、多くの人たちが満足な教育も受けられず、保険や医療も欠如している。
土地、労働、メディアの番組や作品も不平等だし、安定し満ち足りた生活からはかけ離れている。これは今に始まったことではなく、何年もかけて、武装グループを出現させるような、社会の不平等や不正が多くはびこる社会を作ってきた結果なんだ。そのせいで40年以上前から武装衝突が増え続けてきたのさ。少数の手に権力が握られている間はこのシナリオは変わらないだろう。土地所有者の多くが田舎に住む人々を土地から追い出し、彼らを犠牲にして、土地を一つにまとめ集中させている。権力側は個人的な利益(地域、あるいは多国籍)のためだけに手を差し伸べる。軍国主義者のロジックや法の執行が蔓延し続けているん





だ。権利を握った者に全てが支配されている。しかし、この国に住む人間は自分たちの生活や今の人生を変えようとはしない。どう動いていこうともな」

■コロンビアでハードコア・バンドがプレイしていくのに、良い面・悪い面は？

「良い面はサウンドや歌詞を通して自分たちを自由に表現できるところだね。ハードコアを通してこの国に対する問題意識に目覚めることが本当に多いんだよ。これはハードコア/パンク・インディペンデント、それにカウンターカルチャーにとって素晴らしいことだよな。俺たちが出会い協力しあった人たちと、サポートしあい、プロジェクトを共に進めていっているよ。ハードコア/パンクの中ではもちろん、共通のものを感じた様々な社会のオーガニゼーションもサポートしている。
悪い面か。経済状況だな。バンドを続けていくのは厳しいよ。アルバムもリリースできないから。インターネットの普及で、人々は作品を買わなくなっている。ウェブサイトで作品をダウンロードできるからな。スプリットCDを作ったが、手元にはまだ大量に残っているよ。この国の人たちは安い値段で手に入るにも関わらず、買うってことには興味がない。他にコロンビアのハードコア/パンク・シーンの悪い面は、国外のバンドの影響を受け過ぎってことだな。特にUSのね。オールドスクールやNYHCなどの典型的なジャンルのバンドがたくさん生まれている。友情や家族、プライド、ハードコアなどに焦点を当てた同じような歌詞を繰り返しているのさ。俺たちには窮屈に感じるし、くどくて、空っぽなものだ。でも全体的に見れば、ハードコア/パンクには若い人たちがたくさん関わっているし、今までとは違うやり方で何かをやりたいっていう、激しいエネルギーと反抗精神に溢れているように思うよ。だが、ほとんどの場合は、彼や彼女が生きてきたティーンネイジの短くて単純な経験からきているものなんだけど。この反抗がまとまって大きな動きになっていったらとても面白くなるだろうね」

■日本のカルチャーやバンドは知っていますか？

「日本のシーンについては少ししか知らないんだ。でもレーベルのAcclaimとはとても良い関係を築けているよ。日本のタトゥーも知っている。感動するほど素晴らしいね！それから"サンキュー・ベリーマッチ"が"アリガトウゴザイマス"って言うんだろ。ハハハ。俺たちにはとても難しい言語だね、でも興味を引かれるよ」

■今後の予定や目標を教えてください。

「来年に新しいLPを出す予定がある。今の優先課題だね。できることなら、ラテン・アメリカの国々をツアーして廻りたい。いつかヨーロッパや日本などの国でもプレイできたらいいね(俺たちの来日に手を貸してくれる人がいるなら、喜んで受け入れるよ!!)。スプリットCDをもっと出したいとも思っているんだ。音楽のテイスト、闘いや生活の理想に共通のものを感じるバンドや友達と同じプロジェクトを行うには、スプリットはとても良い方法だと確信しているよ」

■日本の読者にメッセージをお願いします。どうもありがとう！

「コロンビアから日本のシーンに挨拶したい。日本のシーンはとても良い状況が続いているのを知っているよ。多くの素晴らしいバンド、前へ向かって進んでいる多くの人たち。いつの日かそういう人たちに会ってみたい。俺たちに連絡を取りたいと思ってくれる人がいたら、xojrhx@hotmail.comまでメールを送ってください。本当にありがとう！」





La Sangre De Verónika

ウルグアイ。ウルグアイのバンドと言われても、僕は何年か前にLENGUA ARMADAから再発されたLOS INVASORESの7インチしか持ってないですし、おまけにウルグアイという国自体、軽くウズベキスタン(中央アジア)やウクライナ(東ヨーロッパ)と混合していたくらいでした。
が、前号でレヴューしたウルグアイ・パンク・コンピ"LA HISTORIA DEL PUNK EN URUGUAY 1983 - 2001"を契機に俄然興味が湧いてきまして、そこに収録されているLa Sangre De Verónika(通称LSDVK)というバンドのHugoに、謎のベールに包まれている当地のシーン事情も含め色々と唐突に聞いてみました。
とかく"南米=Raw"と連想しがちですが、LSDVKは甘い伊達男風ヴォーカルとメロディーが持ち味の70'sスタイルのパンク・ロック。来年にはUKのThe Boysとのライヴも予定しているようです。

■バンドが始まったのは90年代ですか？LSDVKのこれまでの歴史をまずは聞かせて下さい。

「まず最初に、俺たちはこうしてインタヴューされるのが凄く誇りに思えるし、とても嬉しいってことを言わなくちゃね。光栄だよ。バンドは1989年の12月にスタートした。俺たち3人は友人同士で、ウルグアイ(南米)のモンテビデオ(※ウルグアイの首都)にある"Villa Dolores"と呼ばれる町に住んでいた。パンク・ロック・ミュージックに対する同じ趣味を共有していて、特にバンドを始めたばかりの頃はニューヨークやロンドンの70'sシーンのあらゆるバンドを聴いていたよ。例えばRamones、Dead Boys、Damned、The Clash、Sex Pistols、The Boysなんかだね。失業問題と社会的混乱といった社会情勢も70年代のロンドンと似ていたところが、俺たちのモンテビデオにも軍事独裁政権以降あったし、他にもいくつかの理由があって、憎むべきこのシステム(おっとごめん、システムじゃなく"shitstem"だね)に対抗する手段として、パンク・ロック・バンドを結成したんだ。話しを続けよう。俺たちは典型的なパンク・ロック・バンドをやろうとしていた。社会的な内容を持ち、全ての政治家どもとその政治の馬鹿騒ぎに対して敵対を宣言したんだ。そしたら、この姿勢のおかげで手酷い検閲を地元でも受けるようになったんだけどね。自国では8枚ほどの音源を出していて、南米の中だけど10回外国でライヴもやった。そのうち2回はMarky Ramoneと、1回はCJ Ramoneと共演したんだぜ(即興のバンドとして、CJ RamoneとLSDVKで一緒にRamonesの曲を3曲プレイしたこともある)。小さくて貧しい、好機にもめぐまれないこんな国で、政治家や多国籍企業がスポンサーとなっている大規模なフェスへの出演に、バンドがノーと言うのは本当に難しいことだと思う。けど、LSDVKは唯一この手のコンサートに対してノーと言ったバンドだよ。それが、俺たちが常にこういったスポンサーの手下たちから検閲を受け続けた理由でもあるな。LSDVKには信じられないほど誠実で、義理堅いファンたちによるグループがあるから、それが政治家どもとその後援者たちに対抗する手だてとなった。ただ全てのマスメディアは都市部の中流階級によって管理されていたから、ファン層が広がることもなかったけどね。小さな町、それは酷い地獄でもあったよ」

■キャッチーなパンク・ロック・ソングが凄く良いですね。曲はメンバーみんなで作っているのでしょうか？

「俺たちの曲を理解して、好きでいてくれるなんて本当に嬉しいな。曲と歌詞はみんなで書いているし、アイデアも全員で持ち寄るんだ。全てを一緒にやっている。これが本当のチームワークだね」

■ウルグアイではパンクやハードコアの音源って簡単に買えたのですか？どうやってパンク/ハードコアと出会い、そしてそれをどう感じましたか？







「インターネットなんてなかった80年代、パンク・ロック・バンドのヴィニール・レコード、LPにしろカセット・テープにしろ、入手するのは非常に難しかった。当初この手の音楽を見つけるには、世界中を旅行して回る他になかったよ。他の国へと行くことの出来る人々だけが手に入れられた。それもコピーしたものだったりするから、コピーを更にコピーして、そうやってこの小国でパンク・ロック・ムーヴメントが始まったんだ」

■歌詞の内容についてですが、どんなことを歌っていますか?

「基本となっているのは明らかに社会的な内容だよ。俺たちの周りの事象全てとも言える。飢餓、窮乏、検閲、政治家と軍部の犯罪、堕落、閉塞、若者たちの機会の不平等、貧困(特に子供たちの)。"第三世界"における平凡なことだよ。例外として、俺たちの最新のLPでは1845年にウルグアイのモンテビデオに生まれた伝説的な詩人、イジドール・デュカス:別名ロートレアモン伯爵にインスパイアされている(シュールレアリズムの始祖として世界的に有名だよね)」

■あなたが暮らしている、そのモンテビデオっていうのはどんなところですか?パンクをやる会場はありますか?

「最初の質問で答えたように、モンテビデオは暗く、無機質な都市さ。典型的なヨーロッパの暗い都市と似ている。70年代のロンドンと同じ特徴がある。ただ、俺たちが"第三世界の都市"にいる、という明白な違いはあるけどな」

■普段の生活についても聞かせてもらえますか?

「音楽だけで食べていけるわけはないから(特にパンク・ロックじゃね)、生きるために俺たちは働いているよ。システムの一部であるというのはしんどいよ。けど喰っていかなきゃならない。バンドの目的は商業的な成功でもないからね。そうそう、俺たちの音源は全て無料で、http://boicot13.blogspot.com/にアップしてあるよ」

■LSDVKの信念はなんでしょうか?

「パンクを通して受け継いだ最も重要なものは何かと言えば、"Do it yourself"だ。全ての新しいパンク・ロック・バンドに対して、俺たちは自身のパンク・ロック・バンドを作り上げることが出来たし、20年以上に渡る抵抗を続けてきたということを、見せてこれたと思う。だから、これはみんなにも出来ることなんだよ」

■ウルグアイのパンク/ハードコアの歴史についても聞かせてもらえますか?日本には情報が全然ないので。"LA HISTORIA DEL PUNK EN URUGUAY 1983 - 2001"の冒頭に収録されているバンド、Los Estomagos (1983年)がウルグアイでの最初のパンク・バンドですか?

「"Los Estomagos"は軍事独裁政権以降に結成された、最初のバンドの一つだね。こういった重要なバンドはロンドンのポスト・パンクに影響を受けている。だからメンバー自身は自分たちをパンク・ロック・バンドとしては特に意識していなかったよ。それでも俺たちやウルグアイのパンク・ロック・シーンの一部には影響を与えたね」

■80年代の一時期にはパンク・バンドの活動が禁止されていたチリやチェコといった国々がありましたが、ウルグアイはどうだったのですか?

「パンク・ロックとロックは、一般的なマスメ





ディアによる検閲を受けていた。1973年から1984年の間だね。この国の軍事独裁には苦しめられたよ。この期間中、政府はこういった類いの音楽を反乱分子と見なしていたから。パンク・ロック・ムーヴメントなんて一切なかったよ」

■"LA HISTORIA DEL PUNK EN URUGUAY 1983 - 2001"の裏ジャケットにはあなたの名前も載っていましたが、このコンピについて詳しく聞かせてもらえますか?

「そのコンピはウルグアイのパンク・ロック・ムーヴメントを完全に体現しているよ。俺も曲を提供したり、製作にも関わった。(※コンピの立案者である)Marcosってのは俺の友人でね、実に良い仕事をしたと思う」

■では、最近のシーンはどうですか?バンドにレーベル、演奏するための会場は?

「コンピに参加しているバンドにしろ参加していないバンドにしろ、オススメのパンク・ロック・バンドは沢山いるよ。だけど、残念ながらそういったバンドは平均すると3年か4年くらいしか続かないんだ。大概においてテレビやラジオによるサポートが欠如しているから、続けていくのが難しいんだよね。更に言えば、音楽をプレイ出来る場所、特に新しいパンク・ロック・バンドのための場所というのは極限られている。そのコンピに入っているバンドのうち、現在のウルグアイで活動しているのはLSDVKと"Cicuta"だけだね」

■シーンというのは細分化されていますか?例えばSxEシーン、パンク・ロック・シーン、ポリティカル・ハードコア・シーン、ポップ・パンク・シーンといった具合に。

「そうだね、分かれているよ。でもウルグアイではパンク・ロックは多くのシーンと、場所と時間をよく共有している。互いのシーンにおいて、危険な敵対関係を生じさせるバンドの奴らもいるけど、他の国のバンドよりかは互いに敬意を払っていると思う」

■ウルグアイでパンク・バンドをする上で、良いことって何かありますか?

「パンク・ロックを演奏するのに、ここ、"世界のケツ"で良いことなんか何一つとしてないよ」

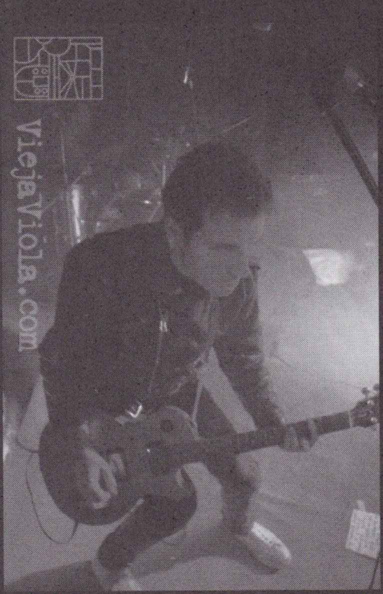
■今後の予定を聞かせて下さい。

「2011年の4月12日に、1976年から続くオリジナルUKパンク・バンド、"The Boys"と、ここウルグアイのモンテビデオで共演するんだ。俺たちの夢が叶うんだよ。"The Boys"はオリジナルUKパンク・バンドとしては、初めてウルグアイを訪れるバンドじゃないかな」

■最後に読者にメッセージをお願いします。どうもありがとう!

「日本のパンク・シーンのメディアからインタヴューを受けるなんて光栄だよ。日本には世界的に見てもパワフルで重要なパンク・シーンがあるよね。日本とは何百万キロも離れているけど、いつの日かそこでプレイしたいな。日本の全てのパンク・ロッカーに、どうもありがとう」

LSDVK









INSERVIBLES

México メキシコ

メキシコ。ラティーノ・パンクが好きな人には既にお馴染みと言っていい国ではないでしょうか。
前号でメキシコのINSERVIBLESをレヴューした際には、"ポンコツ・ブラック・メタルと南米ハードコアと無軌道ガキ・パンクのスカム・ミックス"と書いたのですが、実際のところどうなのか甚だ疑問だったので、インタヴューもやってみた次第です。
思わずジャケ買いせずにはいられない、トチ狂ったアートワークも手掛けているギター・ヴォーカルのYecalが答えてくれたのですが、イカれた反応を期待していたところ、意外と真っ当な人だったのがちょっぴり残念です。





■INSERVIBLESのヒストリーを紹介してください。このバンドを始めたのはいつ頃で、なぜ始めたのでしょうか？

「始めたのは2年前だよ。Borrego（ベース）と俺（ギター/ヴォーカル）は他のプロジェクトもいくつかやっていたんだけど、ドラムのBenjaに出会うまではぴったりのやつを見つけられなかったんだよな。Benjaを加えたメンバーでリハーサルするようになっていき、リズム・ギターはKubleがやっていたぜ。やつは最初はクールだったけど、いつもぶっ飛んでるところがあって、俺がやつを追い出しちまったんだ。今のリズム・ギターはLuisで、楽しくやってるよ」

■INSERVIBLESの意味は？スペイン語ですよね？

「そう、INSERVIBLESはスペイン語だよ。"Useless（役に立たない、無駄な）"という意味になるんだ。このバンドを組んだ当時は、"使い捨て"の意味を持つDESECHABLESってバンドが俺たちのお気に入りだった。それで好きなバンドに敬意を表したってわけだよ」

■Killed By Deathタイプのパンク・ロックや80's ロウ・ハードコア、それからFUNCTIONAL BLACKOUTS（USA）などのカオティックなパンク・バンドからの影響を感じますが、どのように曲を作っているのか全く僕には想像ができません。

「たいていはリフと歌詞が浮かんでくるよ。それから練習場所にみんなで集まって仕上げていくんだ。Benjaには自分の頭の中にあるメロディーを俺に歌わせちまう、クレイジーな町の音楽隊みたいな曲作りのテクニックがあるんだよな。俺はどうにかしてそれをリフに組み込んでいく。ベース・ラインを担当しているのはBorregoだけど、俺たちがベースのパートを書くこともたまにあるよ。そうだね、KBDにはBenjaがバンドに加入するまでは一番影響を受けていたな。俺たち、いつもハードコア・パンクに夢中なんだけど、Benjaが入る以前はTHE PAGANSやBLACK EASTER、MADのようなことをやろうとしていたんだ。しかし、俺の声はそういうタイプに似合うクールなもんじゃなかったから、全くうまくいかなかったよ。他のメンバーが反対のことを言ったとしてもね。とにかく77タイプのバンドは演奏の仕方を知っていたよな。それからBenjaが加わり、俺たちは自分たちのやっていたことをお粗末だと思ったよ。で、俺たちは常にハードコアが大好きだったから、好きなものをプレイしようぜってことになった。でも実は最初、ハードコアはプレイしたくなかったよ。メキシコのシーンはひどかったし、暴力的なSxEや金持ちのクラスト・パンクスが占めていたからね。俺たちはその一部にはなりたくなかった。しかし、今はシーンの中にいるよな、ハハ！FUNCTIONAL BLACKOUTSはロックだね！LPも気に入っているし、DAILY VOID（FUNCTIONAL BLACKOUTSの元メンバー在籍）の作品も好きだよ。でも君が言っている意味はわかるけど、FUNCTIONAL BLACKOUTSからの特別な影響はないな。なあ？」

■『Cultura Pendeja』のレコーディングはどうでしたか？順調にいきましたか？ロウでアグレッシヴなサウンドが好きですよ！

「レコード・レーベルが決めた締め切りをとっくに過ぎた夜にレコーディングしたんだから、全くひどいもんだよな（笑）。レーベルの人間がこれを読んでいないといいけど。猛烈なスピードでレコーディングしたよ。4曲を家に持って帰り、もの凄い速さでミックスしたっけ。問題だらけさ。ある夜、メンバーの誰かが"だいぶ遅れちまってるよな、もうレコーディングしないと"と言ったんだ。翌日には曲を送らないとならないところまできていた。その当時のギターのやつが自分のパートをレコーディングし始めたんだけど、やつはクールな出来だぜと俺に言ってたから、俺たちはそれを聴いてみようなんて心配は全くしていなかったんだよ。だけど、俺が自分のギター・パートをレコーディングする時にやつの音を聴いたら、これがひどくて、無駄な時間を使ってしまったとわかったよ。ますます遅れることになっちまった。何曲かは間違ったコードのまま演奏していたんだぜ。それで俺は怒りまくってやつの演奏を消しちまい、やつには言わずにギターの部分をレコーディングしちゃってね。俺がヴォーカルを録っている間に、他のメンバーはビデオ・ゲームをやり始めてたな。今思い出しても、おかしなもんだったぜ」

■機材はどんなのを使っているのですか？

「機材はひどいぜ。ほとんどが中古のアンプだし、俺のは安い値段で手に入れたボロい



Crateのギター・アンプだしね。だいたいアンプはフリーマーケットで買ったよ」

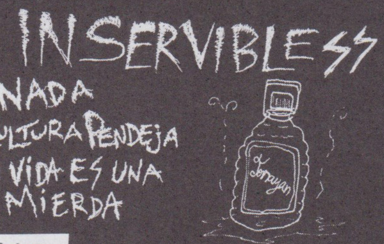
■君のヴォーカル（スクリーム）は最高にブチ切れてますね！好きなヴォーカリストはいますか？

「日本人のヴォーカリストは好きだね。あぶらだこのヴォーカルは凄いよな。作品も大好きなんだ。他にはイタリアのCHAIN REACTIONやINDIGESTIのシンガーも好きだな」

■歌詞についても聞かせてください。どのようなことを歌っていますか？

「フランスのShogun Recordsから出した最初のテープは、7"で再発されたんだよ（買うか、さもなくば死、だぜ！）。ここでは俺たちの年頃のやつらが拒絶されることを書いている。ほとんどの曲は俺たちのことを醜くて貧しいと見下している人間たちのことだね。「Yo No Se」って曲は金持ちのクラスト・パンク・ガールを取り上げている。彼女が白人の金持ちを投影してるってのを俺たちはわかっていたからね。彼女は汚らしいクラスティーズのふりをしようとしていたけど、パンクの真の部分を理解しちゃいなかったよ。「Cultura Pendeja」はメキシコの浮浪者やホームレスについて。ホームレスの酔っ払いを俺たちは"Teporochos（酔っ払い）"と呼んでいる。死にかかっているのに、誰にも手を差し伸べられないことを書いているんだ。みんなの眼の前で死んでいく直前まで、安いメスカル（メキシコ特産の蒸留酒）をもう一杯ほしがる"Teporochos"のことを。「Cultura Pendeja」はメキシコの社会批評家に対する憎しみのアンセムでもある。俺は社会のひずみを並べたてるだけで何もしねぇ社会批評家に憎悪を抱くようになった。Leather Bar Recordsから近々出る7"は、絶望やあきらめ、悲しみ、闘いに疲れ切ってしまったことを歌詞にしてるよ」

■ブラック・メタルにクラスト・パンク、ノイズ・ミュージックは好きですか？聴いてはいますか？



「やあ、ギターを弾いているLuisだ。俺はクラスト・パンクもブラック・メタルも好きだぜ。メンバー全員メキシコのクラストが好きだしね。KAGADA DE PERROやDESOBEDIENCIA CIVIL、それからDOOMやMISERY、DISRUPTなんかの昔ながらのバンドもいいよな。EMPERORの「Wrath Of The Tyrant」やXIBALBAみたいなメキシコのブラック・メタルの曲も好きだぜ」

■よく共演しているバンドというと？

「さっきも言ったように、メキシコの大部分のバンドはクソさ。みんなSxEや流行りのクラスト・パンクに夢中で、ハードコア・パンクに目を向けるやつなんていないぜ。でも、モンテレー（メキシコの都市）出身のRATAS DEL VATICANOは好きだし、友達でもあるよ。1stテープでギターを弾いてくれたDavidもな。彼らとツアーをしたこともあるよ。いいやつらだぜ。ミドル・テンポのスパニッシュ・パンク・ロックをやっている、グアダラハラ（メキシコの都市）のLOS MONJOもクールだよ。ESKORBUTOが好きなら気に入るはずだぜ。俺たちの住むメキシコ・シティのCRIMENもクラシックなハードコア・パンクをプレイするいいバンドだよ。チェックしてくれよな。数ケ月のうちにデビュー12"をリリースする予定らしいよ」

■演奏するのはどんなところで？

「ひでぇバーばかりだよ。オーナーは金を払わねぇし、ビールも飲ませちゃくれねぇしな。スクワットもいくつかあるけど、来るのは問題を抱えたやつらばかりだ。スクワットで演るバンドはスクワットでしかやってなくて、集まるのも友達同士って感じでね。俺たちは年寄りパンクスのケツにキスしに行く気なんてない。まめにライヴをやってるわけじゃないから、友達も少ないしね」

■「Cultura Pendeja」のアートワークを手がけたのは？イカしててクールです。

「俺がやったよ。気に入ってくれて嬉しいな。俺は他のメキシコのパンク・バンドのアートもやってるんだ。http://putosmodernosputabasura.blogspot.comを見てくれ。気に入ってくれたら、君らのレコードやジン、フライヤーのアートもやるぜ」

■『Cultura Pendeja』の裏ジャケにはINSERVIBLE"SS"と書かれていますが、これって単なる間違い？それともメッセージを込めているのですか？



「あれは俺たちが演奏を始めた頃に好きだったり影響を受けていたスパニッシュ・バンドに捧げたものなんだよ。WebeloSS、Las VulpeSS、Anti DogmatikSSなどにね」



■メキシコ国内、あと国外へのツアー経験はありますか？ツアーにまつわる思い出は？

「友達のRATAS DEL VATICANOとメキシコを一度ツアーしたきりなんだよ。ツアーは狂ってるぜ。破産しちまうよ。モンテレーを除けば、誰からも金の支払いがなかった。ツアー中はずっとツナ缶と干し肉ばかり食べてたな。何も食べられないこともあったし、1リットル2ドル以下の安いメスカルを飲んでいた。寝るのはツアー用のバンの中。プレイしたどの街でもトラブルに見舞われちまったしな。アグアスカリエンテス州じゃ、恐ろしくひどい会場でやったよ。スクワットみたいなところなんだけど、パンクスは数人だけで、シンナーを吸ってるギャングがうようよしてた。互いのシャツを裂きあったりしてるんだぜ。RATAS DEL VATICANOが演奏を始め、ベースを弾くVioletaが女の子だと気がついたとたんに、やつら興奮しやがって、彼女をレイプしようって話をし始めたんだ。恐ろしかったな。クソ野郎どもから彼女を守るために、彼女を後ろに連れていったよ」

■他のメキシコのハードコア・バンドにインタヴューをした時に(Vol.6に掲載のMEN OSVALIDOS)、メキシコの生活について尋ねてみました。彼らは、"この国の主要な問題は、貧困とドラッグの売買だ。政治家はメキシコに存在する最も卑劣な階級だ。俺たちはネズミよりも悲惨な生活を送っている。〜(以下略)"と答えてくれましたが、君の考えはどう？

「ああ、メキシコの暮らしはひどいぜ。麻薬戦争は全てをぶっ壊しちまった。政府もな。フェリペ・カルデロン大統領は麻薬密売組織の一つ、シナロア・カルテルをサポートしていて、これは誰もが知っていることなんだ。麻薬密売組織に関わっているやつらは愚かさ。軍隊もな。互いに殺しあっている。あのクソが大統領になってからというもの、麻薬密売組織の暴力はさらに過激になっているぜ。前はドラッグをやっているやつが互いに殺しあっていたもんだが、今は子供や年長の者、クラブで楽しんでいるだけの罪のない人たちまで殺される。暴力は激しさを増し、たくさんの人間が誘拐されたり、首を切られたり、手足を切断されたりしちまうんだ。2006年から今日まで、麻薬戦争のせいで、30,000人近い人たちが死んでるんだぜ。先週（2010年8月）もアメリカへの移民労働者72人が麻薬組織に殺害され、死体が遺棄された。経済状況は暴力と同じようにひどくなる一方さ。次の選挙でも同じような政府の政策が続いていくだろうよ。そんな政府を支持する人間もいるんだぜ。クソばかりだ」



■これからの予定や目標を教えてください。

「来年、SXSW（サウス・バイ・サウス・ウエスト）でプレイする予定があるよ。メキシコ以外で演るのは初めてだ。LPの準備もできている。今年中に出せるといいんだけどね。レコード・レーベルのCintas Pepeも始めて、メキシコとペルーのバンドのコンピレーション『Brutales Matanzas』を出したよ」

■日本の読者のみんなにメッセージをお願いします。どうもありがとう！

「メキシコのハードコア・パンクをサポートしてくれてありがとな。酔っ払おうぜ。幸せになってくれ。楽しもうぜ！」

ベネズエラ。…と言えば過激な反米発言で知られているチャベス大統領、…ではなくアナーコ・ハードコア・バンドの@PATIA　NO!!日本のJABARAとのスプリットを始めリリースも数多くあり、その精力的な活動から今回のラテン・アメリカ勢の中では最もメジャーな存在ではないでしょうか。オリジナル・メンバーのJohnnyに質問を送ったところ、数時間ほどで回答を寄せてくれました(自宅にインターネット環境がないため、仕事場で書いてくれたようです・笑)。

■@PATIA NOのヒストリーを詳しく教えてください。@PATIA NOはどのように始まったのですか？

「まず、インタヴューを企ててくれたことに感謝するよ。俺はJohnny、このインタヴューに頑張って答えるぜ。他のメンバーは旅行中なんだ。1996年から俺は@PATIA NOで活動している。@PATIA NOって名前は90年代初期に作っていた『apatiano』というジンからきているんだけど、このジンはその後ストップしてしまって、1996年にこの名前でバンドをやり始めたんだよ。バンドの歴史を英語で語ったのはこれが初めてだぜ、驚いちまうよな」

■@PATIA NOの意味は？@PATIA NOと名づけたのはなぜ？

「@PATIA　NOには"無気力になるな"って意味があるんだ。90年代のティーンネイジャーはその場その場の刹那的な楽しみに夢中で、真の社会改革に関わってもいなけりゃ、関わろうという気持ちさえもなかった。だからずっとこの名前を使い続けているんだよ。10代の子たちが自分の人生を変えたいと考えてくれるかもしれないしな…」

■最初に聴いたハードコア/パンク・バンドは？

「おっ、そうだな、80's、90'sのメデリン（コロンビア）のバンドに影響を受けているよ。メデリンのシーンは強烈だったし、初期90's（1989年～95年）のシーンは大きかったぜ。まず俺たちはLA PESTILENCIA、IRA、DEXKONCIERTO、FERTIL MISERIAのようなメデリンのバンドを聴き始めた。もちろんCOLERAやOLHO　SECO、RDPなんかの古いブラジルのバンドもだし、ABUSO　SONOROやEXECRADORESらの90'sの終わりに活動していた次世代のバンドも聴いたな。その頃（1992年～98年）のベネズエラのパンク・バンドは、ロウなサウンドとは言えなかったよ。周りのほとんどのやつらは、LA POLLA RECORDS、ESKORBUTO、RIPのようなスパニッシュ・バンドに影響を受けていたね。もちろん俺たちもそういうスパニッシュ・バンドは好きだったが、それ以上にコロンビアやブラジルのノイジーでロウなサウンドの魅力にはまって夢中になってたよ。だから@PATIA NOを始めたとき、サウンドは少しカオティックな方向性のあるロウ・パンクになったのさ」

■曲を作る際に重要視しているのは？

「一番大事に考えているのは歌詞だね。歌詞には重要なことを書いている。社会や政治の構造に対して、個人的な考えから社会的な考えまでを取り上げている」

■ベネズエラのハードコア/パンク・シーンについて教えてください。ベネズエラのハードコア/パンク・バンドの第一世代は？

「第一世代は80年代の中期に遡るよ。多少、虚無的なシーンだったかもしれないな。バンドはレコードを残していないしね。80年代の後半（1989年～92年）になると、パンクの２ndジェネレーションと呼ばれるバンドが続々と登場してきた。カラカス（ベネズエラの首都）にあるカリクワオっていう俺の住む小さな街には、たぶんベネズエラの初めてのアナーコ・パンク・バンドと言われるAUTOGESTIONが活動していたよ。このバンドは後に名前をGRUPO-Aに変え、その後OCTAVO PASAJEROに変えている。他に90年代初期になると、ODIO QUE?、EN CONTRA、VENEZUELA HARDCOREが活動していたね。あの当時、目立った存在だったのが、VICTIMAS DE LA DEMOCRACIAだったな。細かいところまでは思い出せないんだけど、このバンドは1994年まで活動していたと思うよ。1994年から95年にはEPOCA DE RECLUTA、DHD、S.ASESINOらのパンク・バンドの順番がやって来る。その後、1995年から97年になるとRECICLAJE、NADA、RENUENCIA、CRISIS POLITICA、JUAN PEYOTE、GLADYS CORDEROらが活動を始めるようになったね。今じゃもうほとんどのバンドが存在していないんだけどさ。2000年代後半になると、DOÑA MALDAD、LOS DOLARES、LOS DRUPPIES、11011などを初めとするバンドが現れるようになったよ」

■今のベネズエラのハードコア・パンク・シーンの印象を教えてください。お勧めのバンドはいますか？

「今のバンドだと、DOÑA MALDADとLOS DOLARESがお勧めだね。とにかく素晴らしいぜ。他にはもっと若いバンドをあげておこうか。DISSENSION、ANARKOLEPSIA、AMORDAZADOS、GENOCIDIO、それからPIEL Y HUESOSだな」

■ベネズエラのレーベル、ファンジン、パンク・ショップも教えてください。

「あー、悪いな。パンク・ショップっていうようなものはないんだよ。タトゥー・ショップがあるだけで、あとはメタル・バンドの専門店がいくつかとTシャツ屋があるくらいだ。敢えて一つあげるなら、"ROCK ADICTO"って店があるな。カラカスで何年か前に"ANARKIA"って良いパンク・ショップが営業していたんだが、運営していたやつが店を閉めて、他の街に越してしまったんだよ。ジンに関しては、『EL LIBERTARIO』ってアナーキスト・ジン（新聞に近いかな）があって、これは1995年から存在しているぜ。これまで60号まで発行し、それぞれ2000部作っている。アナーキストでありポリティカルなジンで、ベネズエラでは重要なものだよ。もう何年も続いているけど、発行のペースは１年に２、３冊ってとこみたいだね。それ以上は俺にもわからない…」

■いつもどんな会場でプレイしているのですか？バー、それともクラブ？スクワット？

「たいていは貸しスペースでやっているよ。もちろん数年前（1998年～2001年）にはバーでもやっていたが、バーも閉店しちまってね。カラカスの問題点のひとつは、プレイする場所がないことだな。カラカスには"La cigarra"という知られたバーが営業していたことがあって、パンク・バンドはここでよくプレイしていたよ。@PATIA NOも一度ここでやったことがあるが、自分たちなりにやり切ったって状況だったな。バーでのライヴは環境がキツ過ぎるぜ。最悪の状況の中でやっているバンドを目にすることもあるしな。だから俺たちはバーのような場所でプレイするのはあまり好きではないんだよ。バーは演奏するにはひどい状況だ。俺たちは時々、小さな映画館を借りてそこでライヴをやることもある…面白いぜ!!」

■あなた方は南アメリカやヨーロッパを何度もツアーしていると思います。ツアーの最高の思い出は？

「うーん、どの場所も特別な思い出があるな…!!2009年のメキシコ・ツアーと2010年のブラジル・ツアーは最高に凄かったよ。何年も長いこと会えなかった友達と話すことができたんだからね!!」

■ベネズエラの政治についてどんな考えを持っていますか？社会主義をどう考えていますか？(政府は"21世紀の社会主義"を標榜している)

「俺が言える唯一のことは、ベネズエラには社会主義の考えは存在しないということだな。政府は社会主義政府だと言っているが、やつらは世界や国民を欺いている。政府は金を独占し、国民に金はまわってこない。政府は社会主義政府を装っているようなもんだ」

■ベネズエラとUSAとの関係については？(現大統領は強固な反米姿勢で知られている)

「最悪の関係だ。ベネズエラの大統領は一貫して反米を言い続けているが、実際には別のことをやっているのさ。例えばUSAに石油を売り続けているとかね。ベネズエラの政治状況はこういうところから考える必要がある。俺たちはそれについて本を1冊書けるぜ」

■ベネズエラでハードコア・バンドをやっていく上で、良い面、悪い面は？

「良い面は常に友情が存在するということだね。フレンドリーなやつらが多いよ。俺たちはアナーコ・パンク・ミュージックをプレイしているし、アナーコ・パンクが好きなんだ



よ。歌詞には俺たちと同じ考えを見つけることができるからな。悪い面はライヴで行われる、暴力的な"ポゴ"だろうな。お客の中には怪我をする人もいる。そういうのは好きじゃないね」

■日本の文化やカルチャーについては知っていますか？あなたは過去にJABARAとスプリットを出していますね。

「ああ、もちろん日本のバンドやレーベルをいくつか知っているよ。数年前から日本のバンドと連絡を取り合っているからね。HG FactのTadashiとは以前、連絡を取り合っていてJABARAとのスプリットもやってくれたんだ。あれは良いアイデアだったね。日本のシーンについてより多く知るようになったから。好きな日本のバンドもたくさんいるよ。ARGUE DAMNATION、BATTLE OF DISARM、PEACEFULL PROTEST、VOCO PROTESTA、FRAMTID、REALITY CRISISなどかな」

■今後の予定を。

「ALL SYSTEMS FAIL（USA）とのスプリットLPの予定がある。これはうまくいけば9月末頃に出ることになっているんだ（2009年の12月にレコーディングした作品）。友達でもあるALL SYSTEMS FAILと共同で南アメリカ/北アメリカの両方でプレスし、NOSEKERECORDS（俺たちのレーベル）から出すつもりでいるよ。ドイツでALERTA ANTIFASCISTAってレーベルをやっている友達のTimoが別の友達とヨーロッパ・プレスをしてくれたんだ（CDはエクアドルのMAKA ATAKAレーベルから出る予定）。ツアーしながらレコーディングするような自由な時間を持てたらいいね。実現できるか確信はしていないけどな。バンドのメンバーはみんなそれぞれ別の街に住んでいるからね。とにかく目の前の計画を実行しないとな」

■日本の読者にメッセージをお願いします。どうもありがとう！

「やあ、みんな。どうもありがとう。Eメールで情報を知らせてくれよ」

Eメール
johnny <nosekerecords@gmail.com> julia <apatiano79@yahoo.es> erickson <inkdarkness@yahoo.com> luis <druppiesbass@hotmail.com>

ウェブサイト
http://apatiano.webcindario.com/ http://nosekerecords.webcindario.com/menu.htm http://www.myspace.com/oficialapatiano



向井賢治®

MUKA-CHIN *long interview*

from ex-CHICKEN BOWELS, ex-DEATH SIDE, JUDGEMENT
BUZZY大和町BAND, SLIP HEAD BUTT and SMASH DETOX

今回は東京ハードコア、パンク・シーンの中で80年代、90年代、00年代そして10年代の今現在も超現役で活躍中の名ドラマーであり、また新大久保にあるライヴハウス"EARTHDOM"を共同経営するオーナーでもある、そうですムカチンです！皆にも 説明不要だと思いますね！知らない人はいないでしょう？宜しくドーゾ!!!!!

INTERVIEWED:Souichi(UNDER THE SURFACE/FORWARD/SMASH DETOX)

■生まれはどこですか？

「広島生まれの広島育ち」

■市内だよね。

「そうそう。広島市内で原爆ドームのすぐ側」

■子供時代、学生時代はどんな感じだったの??

「ずっとしゃべってばっかり(笑)」

■しゃべってばっかり(笑)。

「そう授業中もしゃべってばっかり(笑)」

■クラブ活動とかは？

「クラブ活動も全然やってない。しゃべってばっかり(笑)」

■物心ついた時に最初に影響受けたバンドっていうか音とかはありますか？

「えーと子供の頃は毎月ね、月の小遣いが600円から1000円の間だったのね。だからね毎月シングルを買えたのね。歌謡曲とかの。あの頃はリリースのサイクルも早かったから毎月シングルが出てたでしょ？」

■出てた出てた(笑)。

「そいで聴いてたのがジュリー（沢田研二）(笑)。でね、うちの兄貴がスピーカーの前にチラシって言うか紙を置くと低音が出るでしょ？」

■知らない知らない(笑)。

「出るのねこれが。で兄貴が"これがバスドラの音なんじゃ"ってのを言ってた。本当に確かにそうなんだ。ラジカセのスピーカーの前にビラみたいなもんをテープで押さえて貼る訳。そうすると低音だけ、LOWが出るんだよね。それでティッシュの箱を叩いてたら、兄貴がお前ドラム叩けんじゃんって言われたのが9歳の時。それでティッシュの箱を叩いてた。ジュリーに合わせて(笑)。その後にYMOとか出て来て。分かり易いじゃんね。8ビートとか」

■ああYellow Magic Orchestra。高橋幸宏とか。

「そう高橋幸宏。そう、だからジュリーとYMO」

■高橋幸宏と言えばシモンズ(笑)。

「そうシモンズ。六角形のシンセドラム(笑)100万くらいするんだよね(笑)」

■では自分が影響を受けた人、ドラマーはいますか？

「やっぱりPILLさんだね」

■その後のバンド活動は？

「中学校のときはやろうやろうといいながらね。練習用ドラムを買って、パットあるよね？一個だけで」

■ああっ(笑)。

「バタバタバタってやるやつ。あれを一個買って、んで元山(CHICKEN BOWELS、OUTO、R.F.D)いるでしょ？あいつも小中と一緒だったんで、小学校の一、あっ中1ぐらいかな？バンドやろうって言って2人で。俺はパット叩きながら、あいつはエレキギターのアンプ通さずにそのままやったみたいな(笑)」

■そうやってたんだ(笑)。

「そうそう」

■CHICKEN BOWELSはいつ結成したの？

「高校一年生くらい。16ぐらいの時」

■じゃあ他のメンバーのユタカとか有井(バンコラン)はまた別の時期？

「そうそうそう。あれより前にやってて、バンドを。それからメンバー入れ替えてバンド名も変えたのがCHICKEN BOWELS」

■じゃあ、元々ムカチンともっちゃん以外は別の人達がいたの？

「そうそう」

■その時のバンド名は何？音はどんなの？

「DISってバンド。ディーアイエス。DISORDERのDIS。これも結構めちゃくちゃでなんでもあり。パンクなのかなあ？でもああいう若い頃ってなんでもサイクル速いじゃん。例えば一ヶ月このバンドが好きだっていっても、次の月にはすぐ変わっちゃうじゃん。最初はね。元山君ギター上手かったから。最初からずーっとギター弾いてたから。だからねマイケルシェンカーグループとかUFOのコピーをまず2人でやってたの。M.S.Gのドラムを練習パットだけでね(笑)。そっから、なんか2人でやってて、でも漠然とハードコアの音とかわからないじゃない？でもそういうハードロックとかメタルの速い曲あるじゃん？あゆうの格好良いねーってずっと言ってて、じゃあ速い曲探そうって。その頃広島にまだEDISONとかなかったから、一軒だけ4 WAY STREETっていう輸入盤屋があったのね。で、そこ行って、中3が学生服で"速い曲のレコードないっすか？"って。そしたらね、CHAOS UKとSLAYERのレコードを出されたの(笑)」

■そこで出されたんだ(笑)。

「で、ジャケ買いで間違ってALIEN SEX FIEND買って(笑)、あのジャケすっごいおどろおどろしいじゃん。そいでALIEN SEX FIENDはちょっと聴いて消えて(笑)。CHAOS UKとか、SLAYERの1stの「SHOW NO MERCY」ってやつを聴いてたよ」





■あれ今にして思えばSLAYERの音はハードコアだったもんね。

「丁度出たばっかぐらいの時だったからね」

■CHICKEN BOWELSは高1位から結成で、有井とかユタカは同じ高校だったの？

「ユタカは、俺が中3位から広島のハードコアのライヴ観に行ってて、そこで河本君ていたじゃん？河本君がその当時、ユタカの姉ちゃんとつきあってて」

■ああっ。

「その時河本君が俺等に"お前等ベース探しとんならこいつを入れえや"って無理矢理メンバーに入ったのがユタカ（笑）」

■有井はライヴハウスで知り合ったの？

「そうそうそう」

■そいでCHICKEN BOWELSをそのメンバーで結成して1stシングル出したよね？そいでカセットテープの「SOLD OUT」出したよね。あの時は実際は何歳くらいだったの？

「17歳位？だから結成して一年位しか経ってない。86年位だったかな」

■その当時の広島シーンでの、よくやってた対バンとかは誰だったの？

「何だったけな？その当時HIROSHIMA STREET PUNK SCENEってのがあったんだけど、その後だったからね。でも愚鈍だけはずっとあって。愚鈍とは、良くやってたよね」

■その時にはGOOGLEPLEXはまだなかったの？

「なかったね、1年後くらいじゃなかったかな」

■じゃあCHICKENの作品としては、あの有井がやってた頃ではシングルと「SOLD OUT」のカセットだけ？

「あとね、実は単独カセットってのがあったよ」

■俺知らないな（笑）。それはもう入手不可能？

「ないね。30本位しか作ってない（笑）」

■それはかなりレアだね。

「そうそう」

■そいでCHICKEN BOWELSが全国区で更に名前が知れたのが「MY MEAT'S YOUR POISON」V.Aだったけど、その時はもう3人編成になってたよね。

「あれは有井がいなくなった時だね」

■いなくなったからもっちゃんがやってたんだ。

「そうそうGr+Voでね」

■実際の活動期間てのはどの位だった？

「3年位でしょう」

■その後、DEATH SIDEに加入する訳だけど、実際どういう経緯があったの？

「まだ高校行ってた頃にさ、DEATH SIDEのツアーがあって（"BLOODY SUMMER TOUR '87" LIP CREAM、OUTO、DEATH SIDE)、あの人達が広島に来た時にはドラムがいなくてミッチュン（OUTO)がドラムをヘルプで叩いてたのね」

■その時はチェルシーがOUTOでギター弾いてたもんね。

「そうそう、カツミがそん時は怪我しててツアー行くのが駄目になったからチェルシーがOUTOでギター弾いて、ミッチュンがDEATH SIDEでドラム叩いてた。その時彼等は全国まわりながら誰かドラムDEATH SIDEで叩ける奴いないか？って探してて、その頃愚鈍の藤井君ちによくDEATH SIDEは泊まってたのね。で、丁度その頃CHICKEN BOWELSがなくなってて、ドラム空いてる奴がいるってので、叩かないかっていう話しになったのね」

■それは高校在学中？

「在学中だったね」

■東京でライヴするのには通ってた。

「新幹線で通ってた（笑）。その頃、「MY ME







AT'S YOUR POISON」V.Aを出す時に、加害妄想やってた藤井君だけでお金を出すのは資金が足んないじゃない。だから結構ね、元山もなんだけど、アルバイト代を全部その制作費にまわしてて、でその出した分だけは返ってくるじゃない?貯金みたいな感じ。多分、15万とか20万とか位だったんだけど、売れたから返ってくるから。ギャラじゃなくてね」

■出した金だもんね。

「そうそうそう、それで最初は通ってた。当時はね2万ちょいで広島から東京まで往復できたからね。片道1万ちょいだった。毎週通ってたね」

■毎週(笑)。

「練習があるからね(笑)」

■その時はどういう感じの状況だった?

「練習で通ってんじゃない?そしたらいきなり何かミニコミのインタヴューがあるって、で行ったらアルタ前で待ち合わせしたのね」

■アルタ前(笑)。

「アルタ前ね。一番分かり易い(笑)。そしたらいきなり会った事もないカツタ君とかガゼル君とか、金髪の毛の長い腰まであるような人達がね、わらわら集まって来て。なんか変な人達がいるなって(笑)思ったら、石屋とチェルシーが来てじゃあ行こうかって。DEATH SIDEのインタヴューなのに30人位集まってて」

■それ関係ない人達だね(笑)。

「そう、関係ない人達(笑)。そいでただ飲み会を、そのミニコミの出資でやるっていう。滅茶苦茶だったね」

■その当時は原宿でよくたまってたクチだ。

「そうそう日曜日に原宿行って遊んでね」

■その当時に頻繁にやってたライヴハウス、ホームグラウンド的な場所は?

「ANTI-KNOCKとか下北の屋根裏とか。俺が入る前は鹿鳴館とかで良くやってたみたいなんだけど」

■じゃあムカチンが入ってからの最初のDEATH SIDEの作品てのは?

「「WASTED DREAM」だね」

■レコーディングはどの位時間かかったの?

「そん時は早かったよまあまあ。で、セカンドが1年かかった(笑)」

■それで全国ツアーに頻繁に行ったりとか。

「そうそう楽しいツアー(笑)」

■その当時のツアーってのは。

「それは言えないね(笑)」

■それは言えないよね(笑)。で、本数をこなしながら。

「本数をこなしながら、まあオフの日も充実した(笑)。これはあんま言えないよね」

■因に「COMPLETE DEATH LIVE」の時は高校生だっけ?豊島公会堂のやつ?

「その時はもう卒業したばっかだったね。18歳だった」

■前にDEATH SIDEがレコーディングした曲を、メンバーが一人ずつヴォーカルをとった作品を聴いた事あるんだけど(笑)。

「ああ、あったあったね!」

■あれって言うのは出さないの?

「(笑)出さない出さない」

■ムカチンも雄君も歌ってたしチェルシーも高音でシャウトしてたし(笑)。あれはノリで録ったんだ?

「そう、なんだろうね、結構、いくらでもチェルシーは泉の様に曲だけ出来るから、煮詰めていく前にまた新しい曲を持ってくるのね。で、取り敢えず録っちまえってみたいな感じで、気分転換もかねて録った」

■あれはね、他の人はあまり知らないと思う。

「知らない知らない(笑)」

■俺、EDISONでガイ君と聴いたもん(笑)。

「結構、地下流通はしてたからね(笑)」

■その後、もの凄い量のツアー、ライヴをこなしていって作品を出して最終的に解散したのが1995年だっけ。石屋がFORWARD結成したのが96年だったもんね。

「そうだね。色々あった」

■実際、DEATH SIDEが解散した後はどうしようと思った?

「それまでね、ずーっとバンドやってたけど、急にね。やることが無くなる訳だから。どうしょうかなと思ったらすぐにノリと藤井君がちょっと話しがあると。DEATH SIDEが解散して1ヶ月後位の話。したら色んなプランみたいなのが語られて、えーって思ってたら、"ドラムやってくれへんか?"みたいな。バンド名はまだ決まってないけど、JUDGEMENTって言う名前が良いと思うって。いや違う、その前にねカキちゃん(鉄アレイ)がセッションで入ってた」





■ドラムで?

「そう、でもカキちゃんは鉄アレイがあるからて言うのであくまで手伝いでやってたんだけど、俺はフリーなんでどうかって言う話しになったの。俺がメンバー集めた訳じゃなかったからね。でそう言う流れから誘われて入ってみたいな感じ。実際の所それまで藤井君とバンドやった事なかったからね」

■からみは長いよね。

「そうそうそう。で、それは面白いかなと」

■その後にヴォーカルのメンバーチェンジがいくつかあって。

「で新譜を録ろうとした前の日にヴォーカルが辞めて、困ったと言う事になってちょっとレコーディングを延期して、でZIGYAKUさんがギター・ヴォーカルでやったのが「NIGHTBRINGS」」

■聴く方は殆どのシングルの作品がヴォーカルが違うっていうのは面白いし、また興味深いかなと。

「ははは」

■で次の作品でサクラも入って。

「サクラとジャジャがね。飯澤は諸事情によりバンドを離れてたから。うん、なんつうんだろうね。藤井君がヴォーカルをとった時点で、メンバーにやる気があればどの状態でも出来るっていう確信はあったんだ。でもやっぱりね藤井君はギターだけを弾きたいだろうし、ちゃんとできるけどやっぱメンバー入れようと。その時ガッチガッチのハードコアやってるバンドで女の子が弾いてるってのがなかったから、それでサクラがいいんじゃないってスカウトしたんだ。で、その時ジャジャはずっとLIPやめてからインドとか行ったりしてたんだけど"ジャジャがいいんじゃねえ"って。俺か藤井君どっちが言ったか覚えてないけど、藤井君かな?で、スカウトに行こうって色々探したらちょうど肝炎で入院してて、病院に行って治療でフラフラしている所に、"久しぶり!"って、病気治ったら一緒にバンドやろうよってグッタリしている時に言っちゃってさ。ジャジャ君判断力がなかったんだろうね(笑)。そんで病気も治ったんでやろうと言う事になった」

■そして去年にテキサスでのステージがあった訳で。あれは本当に1回きりのリユニオンていうか。

「そう言う訳じゃなくて。アメリカ行く前にみんなで話して、今までの経験で例えば"格好良い"とされる曲はいくらでも作れると。ガキの頃とかにね。衝動性でガーって作れる様な気分じゃないのに経験上のみの小手先だけで作ってるのは如何なものか?という疑問がでてきたのね。そう言う訳でスタジオ入ってみんな無口になってきてね。である日、辞めたいと。で、何で?って。何か若い時の衝動が今まであったのにぷっつり切れてしまったと。それは客に対して失礼だからやりたくないと。などみんなで話してね」



■なるほど。

「で、やれっつったら出来るよって。今までの経験でね。できるけど、それは如何なものかなとずっと考えた末に辞めたいと。それはおーいちょい待てよって話しになるじゃない?で、辞めたいつうけど、会社でも何でも組織ならそうなんだけど、活動を辞めたいと言ったって、金銭的な面と、仕切りはずっと俺がやって来たからそれは認めません!と(笑)」

■(笑)。

「バンド解散てのも何かね、皆やってることでしょうって。JUDGEMENTはやった事ない事をやろうつってたんじゃないのって。じゃあ長期休暇でしょうと。また来年やりたいっても、思っても言えなくなるでしょう?と。じゃあバスンと一旦止めましょうと。それでいいかなって。解散はしないよって。ただ動きが止まっただけで皆の仲が悪くなってバンドが無くなった訳じゃないから。で何か面白い事があればまたやろうって。それがTIMMY(Chaos In Tejasプロモーター)の強烈なラブコールによって去年ライヴが実現した訳。1回やったからやっぱ楽しいじゃない。向こうも楽しかったしね。だからまだみんなを口説き中なんだけど。アメリカでは昔の曲ばっかやったじゃんね、だから新曲ができる位になったらまたやろうみたいな。まあぼちぼち俺はリハには入りたいなって言うふうには思ってる。俺はね(笑)。何か解散て格好悪くない?」

■うん何かね。

「何かさみしいよね。だったら結成で発表すりゃ良いじゃん。こんなバンドを結成しましたって。メディアとかに。解散の時だけメディアに取り上げられるよね。ちっちゃなメディアだけどね」

■大体逆だもんね。

「そんなかんじでうちらはやってる訳じゃな

いからね。スタッフ食わしてる訳でもないしね。バンドで(笑)」

■BUZZY大和町BANDについて聞きますが結成の経緯は？

「最初は飯澤と他のメンバーがやってたけど、雄君が入り、その後加入しました」

■BUZZYの音楽性については？

「どうなんでしょ？基本のリフはあるけど、基本自由(笑)。飯澤も雄君も付き合い長いんで複雑っぽい事もわりと勘で出来ちゃう感じ」

■ライヴの頻度とか。

「あまりやってないんで、最近。ライヴ誘って下さい！」

■好きな曲なんかは？

「全部好き!!!!!!」

■ではSLIP HEAD BUTTについて話しを伺います。

「SLIPは最初にヘルプで頼まれたの。結構ROCKINじゃん。ハードコアのビートじゃないじゃん。まあそういう音ってのはずーっとやった事はなかったからね」

■ああそうだね。ずーっとハードコアだったもんね。

「今までハードコア以外やった事なかったもんね。まあやってみたいと言う事は常にあったんだけど、まあその良いタイミングで最初ヘルプでっつうかんじで入ったんだけどメンバーも面白いし」

■もう何年位やってるんだっけ？

「どんくらいだろう？今は休憩中だけど5、6年はやっているね」

■作品としてはCDが1枚？

「CDが1枚。SLIPとしてもあの1枚しか出してないし」

■あの、CDのジャケを裏返すと。

「ああ、オッパイがね(笑)」

■今までハードコアやって来て、ああゆう感じの音のドラムを叩くと言う事に関しては、やっぱこう、躊躇じゃないけど、新しい事って言うか、自分でも今までやってない事をやるって言う事に関してはどんな感じだった？

「やっぱり面白いね。むつかしいけどね。例えばSLIPにもっと上手なドラマーさんが、ロックンロールのビート感が昔からあってって言う人よりは、また違う様な音が出来るんじゃないかなっていうのはあるね」

■なるほど。ロックだけじゃない別の。

「そうそうハードコアのドラムの人がこういう事をやってるってのがね。耳が肥えた人には分かるのではないかなと」

■あとWORLD BURNS TO DEATHのZACと、うちらはSMASH DETOXの音源を録って1年位になるけど、早くシングル出したいですよね。

「リリースまだですかね～？じらす作戦なんですかね(笑)」

■テキサス人のメンバーZACの事をどう思いますか？

「明るくて良い奴だと思います。大雑把な性格なのに意外とギター弾く事は細かい(笑)。住んでる場所はまだBROKEN NECKの倉庫なんですかね？」

■自分のお店(新大久保EARTHDOM)の事について。ムカチンは古川君と共同オーナーって事で経営されている訳で、その前



にも小滝橋通りで新宿DOMを持ってたけど、ライヴハウス経営と言うのは色々と大変だと思うけど。最初に新宿DOMを始めたのが何年前でしたっけ？

「うーん7年前かな？」

■どういう経緯でライヴハウスを経営しようと？

「それがね、これは最初から決まっていた話しではなくて、古川君が高円寺でスタジオDOMのオーナーやってて、俺もスタジオDOMを時々使ってて、その時は、古川君と面識があるくらいで。ブルースビンボーズのピーちゃんとその他で古川君出資でライヴハウスをやると。でも店の場所も決まっている。で、工事にもそろそろ取りかかるんだけど、ブッキングする奴がいないって言う事をカツタ君にぽろっとこぼしたらしく、古川君がね。じゃあカツタ君はそんなんじゃ出来る筈がない。経験者がいないライヴハウス経営は無理だって。そしたらムカチンが、アンチで店長やってて今プラプラしてるから入れた方が良いよって。そんで俺が後乗りで入ったの。その時既に店も物件も決まってて」

■あっそうなんだ。

「で、ピーちゃんとかもいたの。一緒に働くメンツで。でもそういうノウハウは誰も持ってなかったから。PAを誰にするかって時に、適当になるでしょうって。で俺はいやいやPAはちゃんとした人が良いよって。でアンチにいたPAをまた引っ張り戻し、下で働いてた



スタッフやドリンクのバイトも引っ張り出した」

■前のアンチとスタッフは殆ど一緒だったもんね。

「そうそう、でも新宿DOMは楽屋もなかったしさ、最初っから話しふってくれたら、物件選びから一緒にやってもっと良いシチュエーションでやるのにと思ったけど、ある意味、見切り発車でオープンしちゃったから。あの場所でやる事自体が俺の中で結構厳しいなと思ったんだよね」

■隣が飯屋だったしね。

「そうそう。あの辺りってさ、昔のLOFTがあった場所じゃん。あんな老舗のライヴハウスに住民運動があって結局立ち退いた所でしょ?それでこんな新参者がね。かなり厳しいと思ったよ」

■あの当時のあの場所では実際、色々なトラブルがあって。

「めちゃめちゃあってずっと裁判やってたもんね。うちらを追い出したい側が興信所使って店の前で溜まってる客の写真をバンバン撮ってたの。で、裁判で世間では一般的に認められないヤツラがいるって事でね。100人位店の前にいるってことでね」

■上半身裸で入れ墨バンバンで(笑)。

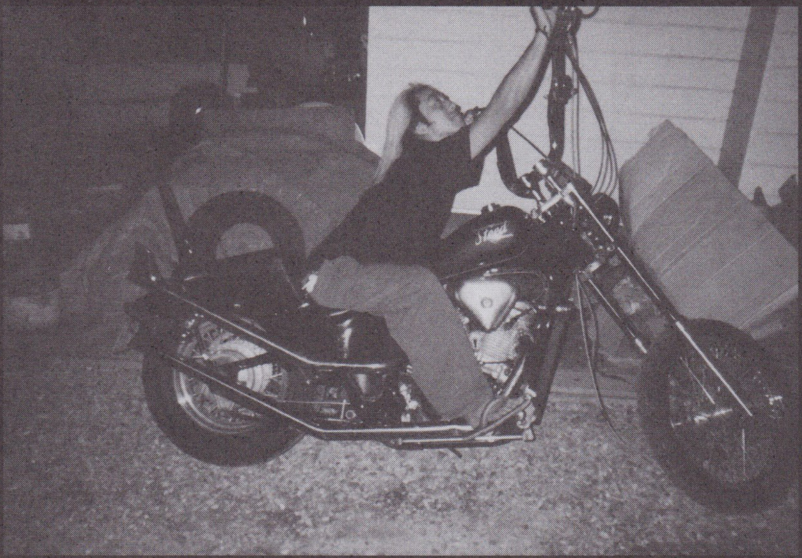
「そうそう写真撮られて。これじゃあ近隣にとって迷惑でしょうてことで。裁判所も和解を勧めてて。まあ初期費用の工事代は損したけど借りた初期費用は戻してやるから出て行って下さいと。金銭的には負けなんだけど裁判的には和解かな。そこで思ったのがこれ以上闘っても勝つ事はないし、みすぼらしい事になる前にじゃあここは出るかってことに決めて。ここじゃあいくら頑張っても無理だからって」

■えーとじゃあ2003年にオープンして閉店が2006年と言う事は3年続いたって事?

「そんで2年半は裁判やってた(笑)」

■それから現在の新大久保へ。





「その間に従業員にはオープンまでアルバイト等で食いつないでくれと、で、どうしても食いつなげない人は言ってくれと、少しは生活費出すからって。でそれは俺と古川君で借金して出した。それが一番大変だったね(笑)」

■OPENした後も建物の水漏れとかあったりトラブルもあったと思うけど今はオッケーなの?

「全然だめです(笑)。ビル自体が古いからね。でも全般的には上手く行ってるよ」

■店の隣にコンビニも出来たでしょう?MINI STOPがあるけど実際店とは共存共栄してる?

「もちろん、店長とも仲いいし、向かいのFAMILY MARTもだよ。ある日店の鍵を俺が開けてた時にスーツの男が2人、たたたーって下りて来たの。何だ?と思ったら、"FAMILY MARTの本社の者です"って。あぁ、またウチのお客さんが万引きしたのかなと思ってたら(笑)、"いつも売り上げが週末とかすごく良くておでんとか、唐揚げがいつも売り切れてしまう"との事で。で、"出来たらお客さんの入りそうな日を事前に教えて下さい"と。60歳くらいの禿親父が一人いたのね。その偉っぽい人がウチのホームページのスケジュールをプリントアウトして持ってたの。で、"山口富士夫は若い時に聴いてました"って(笑)」

■その人はファミマのえらい人なんだ(笑)。

「そう当時のね、たぶん、村八分の頃のファン」

■ビールとかバンバン売れてるもんね。

「そう。最後の方になるともう棚に缶がないもん。あとうちのビルはテナントが商売熱心で店の前に客を溜まらせろっつうの。うちの店の客じゃなくたって。その方が繁盛するからって。実際それを見て人が入るからね」

■大体ライヴハウスの前では溜まらないでっていうのがお約束だけどそれがないっていうのはいいよね。

「そうなんだよね。でも溜まったら大家に怒られる(笑)」

■最近のバンドで良いなって思うバンドはありますか?

「ZENOCIDEやENDONなんかカッコいいね」

■これからのシーンにどういう展望をもってる?

「うーん何だろうね。これはあくまで理想なんだけど例えばライヴハウスやってるでしょ?だったら酒だけの収入でまわしたいのはあるよ。要はチケット代を例えば1000円でやりたい人が、前売りが1000円、入場料1000円のプラスドリンク代、追加ドリンクをうちの方で買ってくれると、全額チケット代バックできるでしょう?で、そういうふうにやりたいんだけど、でもライヴに来る人たちの中にも1回外に出てコンビニで飯買って、階段でしゃべって、好きなバンドになると観に行くみたいな楽しみ方も解るからそんなに厳しく言わないけど、本当の理想はアメリカみたくやっぱさ、外で酒飲めないシチュエーションで、Emo's(毎年行われるパンクフェス"CHAOS IN TEJAS"のメイン会場)なんてめだけバンバカ酒売れてお客さんも入ってね。でチケット代とかもさ、やっぱバンドの人って毎週練習とかに何千円か支出があって、で、ライヴのギャラでお疲れさまって5000円貰っても赤字でしょ。それがとんとんになるような状況を作りたいね。多分ヨーロッパやアメリカでもそうだと思うけど、ライヴやりゃチケット代なんか償却できるからね。ぶっちゃけのところそう言う状況を徐々に持って行きたいってのはあるね」

■日本のライヴハウスと向こうのライヴハウスが違う所は向こうのそれは利益をバンドに還元するのが第一って言うのがものすごくわかるね。

「そうね。持ちつ持たれつの関係ではそこが一番きれいな関係だと思うね。企画やってお客さんが入んなかったライヴは赤字なんだけど、例えば5万円赤字ですとか言うのも忍びないから。まあウチは10万赤字の所を5万位にするけどね。勿論ウチもお酒の売り上げがないとやっていけないけどね。例えば今晩はお客さん少なくてちょっと足んなかったね。でも今日はお酒が沢山出たから今日はサービスしても良いかって言う時もあるもん。折角企画やったのにこんだけ赤字なんて、次やるかなって思うよね。仕切ってやる事には何でもリスクはあるもんだけど、一晩の買い物にしちゃあでかいよね。要はお客さんとして入ってくれる人が沢山お酒買ってくれたらいいんだけど。辛い話しするけど、例えばゲストで入ったりするじゃん、仲いいからって、でそいつらこそライヴハウスでお酒買えよって思う。だってその分企画者に還元出来るんだから。ゲストで入って外で酒買って階段でくっちゃべってる」

■それよくないね。

「俺的にはもっと企画者を助けろよと思うよ。タダで入れて貰ったからにはバーで酒買って企画に還元する様な意識改革ができればもっと良くなると思う。タダで入れてラッキーって言うんじゃなくて、プラス何かをね。思うよね。たまたま貰った缶ビールを飲むとかはしょうがないんだし。線引きはしたくないしね。口うるさく言わないだけだし。そう言う所があっても良いんじゃないのかなーって思うよ」

■これからはどういう環境作りをしたいと思う？

「バンドやってる人はライヴに向けてスタジオに入ってリハをするわけでしょ？バンドにかかった費用はライヴで賄える様になって店を維持する金は取りつつも皆楽しめるっていう状況がベストだと思う。誰もぼろ儲けしない。みんな損しない。バンドにしたって赤字が続きゃできなくなるし、それを上回る気持があるからやって行けてるんだろうけど」

■ではEARTHDOMから、これから企画するであろう人達に何かありますか？

「まあでもやれば楽しいんだけど、次に繋がる位のモチベーションがもつ感じで終えておつかれさまって帰って貰いたいね。今回でこんなんで大変だったけど次何時企画出来るかなって帰って貰うと、なんかあれだね。まあ楽しかっただろうけど。そう言うのがないようにサポートはしたいね」

■バンドをやっている側、またライヴハウスの経営者としてこれからの世代のバンドに何か一言。

「なんだろう？やっぱ人それぞれね。"おっしゃーやりたいぜ！今日は楽しみたいよ！"みたいな感じでやってんだけど、でもバンドマンからしたら日々の積み重ねだって新曲作ったり、テクニックない人達でも練習する訳じゃん。パンク・バンドだっつったって。それが本当ずっと楽しめる様にやって行けたら良いなと思うね。皆がね。お店も何もかにも。面白くやるにはどうやってやれば良いのかなって。ちょっと考えながらね。全く考えないと無理だもんね」

■最後にこれからのムカチンの予定は？

「JUDGEMENTやりたいっす（笑）。他の皆にもアピール（笑）」

EARTHDOM
東京都新宿区大久保2－32－3
リスボンビルB1
TEL　03-3205-4469
HP　http://www1.odn.ne.jp/shinjuku-dom/index.html/menu.html





VICIOUS CYCLE

ベルリンのKopiスクワットで見たカナダのVicious Cycle(Vol.7参照)。ライヴだとパンク・ロック的に聴こえたのですが、改めて目下の最新作"Pale Blue Dot"(アルバム)を聴いてみると、アンビエントな雰囲気も漂うハード・パンク～骨太のハードコア・パンクで実に渋かったのです。というわけで、改めてメンバーのFrankにメールで話しを聞いてみました。細部まで拘りを感じさせる作品を生み出すだけあって、回答もちょっとインテリジェンスな感じです。

■まずはこの5月に行ったユーロ・ツアーの感想を聞かせて下さい。初めてのヨーロッパでしたか?カナダとヨーロッパではシーンはかなり違いました?

「そうだね、初めてのヨーロッパだったよ。本当に楽しかった。全てのギグが素晴らしかったし、僕らが出会った人々も信じられないほど親切だったからね。カナダとヨーロッパかぁ…。うーん、シーンがどう違っていたかって話しは君を退屈にさせちゃうから言いたくないな。でもル・コルビュジエ(スイス生まれの著名な建築家)の肖像が描かれた10スイス・フラン一つとっても、カナダとの違いは明白だよね」

■どうしてオランダのUnion Townと一緒にツアーを廻っていたのですか?

「元々は、僕たちのレーベルが(※カナダのDeranged Recordsのことだと思われます)、Vicious CycleとUnion Townのスプリット7"を出す予定だったんだよね。でもそれは実現しなかった。どうしてだかはよく分からないんだけど、多分、僕らが彼らに依頼するのを忘れていたのかな。それで一緒にツアーを廻るバンドを探していた時に、僕らが乗る飛行機はアムステルダムに着くから、アムステルダムのバンドにしようって決めたんだ。そしたら直後に彼らからMyspace経由のメッセージが来てね、それで彼らとのツアーがブッキングされたんだよ!これよりもっと面白いストーリーがあれば良かったんだけど、これが事実なんだよね。5月の半ばに会って、どうなるか分からなかったけど今じゃ彼らは素晴らしい友人だよ。うちのギターのScottはEdenSpiekermannって広告代理店でのインターシップで、来年の1月にまたアムステルダムに行くみたいだけど、どうなることやら」

■KopiではD-Beatやストレートなハードコア・バンドが続いていたから、Vicious Cycleの音楽性は凄く新鮮でした。典型的ではないスタイルにも感じましたし。影響を受けたというと、どんなバンドになりますか?

「ありがとう。いつも僕らはこの3つのバンドを参考にしている。Fugazi、Fucked Up、そしてRefused。それらのバンドから影響を受けているってことは君にも伝わると思う。(※Fucked Upのメンバーである)Damianが僕らの最新LPで歌っていたり、(※同じくメンバーの)Jonahがレコーディングを担当したから、似たようなセンスも感じ取れるか

な」

■曲作りはどういう風に?

「Scott(ギター)とMark(ドラム)が普段は一緒に作っているね。一度ギターとドラムが合わせてから、ヴォーカルをのっけているよ。曲作りをする時って、僕らはひどく官僚的なんだよね。時々、練習でやるべきことをリストにしてチェックしたりするからさ」

■ところでVicious Cycle自体、どうやって始まったのですか?

「それって凄く面白くないことを約束するよ。僕らの大部分はProvenというバンドでプレイしていたんだ。ストレートなハードコア・バンドだったね。ちょっとポジティヴ・ハードコアっぽかった。けど僕らはポジティヴ・ハードコアじゃないなって気がついて、けど確かな怒りは感じていたからこのバンドをやろうってことになったんだ」

■Vicious Cycleと名付けたのはZero Boysの曲"Vicious Circle"からですか?Abrasive Wheelsは関係ないと思いますが(笑)。

「Zero Boysが100パーセント。Abrasive Wheelsは0パーセントだな」

■"Pale Blue Dot"は音質も素晴らしいですね。レコーディングはかなりこだわりましたか?

「こんな風にやっただけだよ。Jonahが録って、Jon Drew(※Fucked Upなども手掛けているトロントのエンジニア)がミックスした。ドラムは一回で録ったし、ヴォーカルは笑えるくらい録り直した。Nicoはヴォーカル録りをしている時、僕らを部屋に入れてくれなかったんだ。これが不思議な要素だね」

■"Pale Blue Dot"のアートワークなんですが、これは宇宙の画像ですか?どのようにしてこのアイデアが出てきたのでしょう?

「Carl Sagan(※アメリカの天文学者)と"Pale Blue Dot"という写真(※Carlの提案により、約64億キロ離れた宇宙空間からボイジャー1号によって撮影された地球の姿。"暗い青い点"という意味)から感化されたんだ。グーグルで検索してみてよ。凄いぜ。何人かからGermsの"GI"みたいだって言われたけど、それもあるね」

■ジャケットに"歌詞はここまで:(http://www.theviciouscycle.ca/palebluedot)"と書いてあったのですが、見られなかったのです。歌詞のテーマはどんなことでしょうか?

「主に人間、宇宙、地球、環境、想像、そしてこれらに関わる物事だね。"For Carl"という曲にこれらを綴ってみた。アルバムでの僕の気に入っている曲はそれと"Death"だね」

■今のカナダのパンク/ハードコア・シーンについて。

「素晴らしいよ。異なるルーツを持った多くの人たちがショーにやってくる。Fucked UpはトロントのReference Libraryで1000人の前でやったりするしね。Deranged Recordsも本当に良いレーベルだよ。常にクールな北米のバンドを見出してはリリースしているからね」

■ところで、あなたとNicoは一緒に会社を経営しているのですか?バンドと会社の両立はうまくいっていますか?

「うん、Nicoと僕とでBureauという情報分野の会社をやっている。文化、教育、環境分野のクライアントと仕事をしているんだけど、彼らのブランディングやソーシャル・ネットワーキングについてや、刊行物の発行なんかにも協力しているんだ。バンドと会社の2つはうまく共存しているよ。Deranged Recordsのウェブサイトのデザインをやったりもしてて面白いよ。僕らがツアーに出るとちょっとしんどくなるけど、うまく回している。クライアントはみんな僕らがバンドをやっているってことを知っているんだ。秘密にしていたんだけど、おかしなことだよね」

■今後の予定を聞かせて下さい。

「そうだな、僕らはちょうどアメリカのPaper+Plastickというレーベルと契約したところなんだ。何作かそこから出す予定だよ。カナダでのブッキングについてはThe Agency Groupと組んでいて、近い将来、何度かカナダの外でもライヴをして廻ると思う。来年には新しいレコードも、多分出せるんじゃないかな」

■日本の読者にメッセージをお願いします。ありがとうございました。

「Kenji、インタヴューありがとう。日本のみんなへ。読んでくれてありがとう。僕らのブログも読んでみてね。http://theviciouscycle.ca」



Zero Boys 100%
Abrasive Wheels 0%



サカタルイードの『とびっきり対談・アングラぐらぐらグ～ラグラ編』

――ボクハ宇宙船ノ中ニイマス…点滅する光に合わせ揺れ動く音色の輪…それはまるで古いタイプの人間が刷り込まれたイメージ通りの宇宙の音…だってさっきからそいつがポワンポワンと…その着信音が…『着信音』っ!?ケータイが鳴っている!TELの相手は「石原さとみ」。…しかしオレの腕まくらは静かに寝息をたてる「高島彩」の温度を確実に受け止めている。手放しでは喜べないと外した視線に飛び込むデジタルはAM3:00。その隣のフォトフレームの中では「綾瀬はるか」がボクにピースサインを送っている。…ムニャム、ム!…やっぱ夢か?!こないだ病院の待合い時間に『ハートカクテル』読みすぎたなコリャ(涙)。
今回は話題のイケイケ『制作』レーベル『人間堂』の平山クンです!リリース予定が詰まったご多忙の中お相手していただきました。
カンケー無いけど『THEクルマ』のフジワラってピザポテト(ポテチ)を１日４袋も食べるんだって、ワオっ(笑)!それではイッてみましょ～っ!!

H「始まりましたね(笑)」
SR「始まりました!イイね、こういうのも(笑)。じゃあさ～他の雑誌等でも聞かれてると思うけど、ヒラヤマ君が…レーベルやって何年?」
H「はい。ん～と…全然まだ、２年ちょっとくらい」
SR「きっかけは?」
H「『WART』っていう 神戸のバンドがあったんですけど、ボクそれの一番初めにギターを弾いてまして…」
SR「え?そ～なんだ!」
H「ボクはデモの録音だけして、ホント2～3回くらいしかライヴもせず…辞めちゃったんですけど。仕事で東京出てきて、でフツーに働いててWARTは新しいギター入れてメンバー・チェンジしてシングルとアルバムと出して。アルバムが出る前に『解散する』って話が…来て、そん時ボクはもう映像の撮影や編集とか出来る様になってたんですよ」
SR「あぁ、仕事でね?」
H「で、オイスカのワタル君が凄いWART好きで。ヴォーカルのタグってのが『解散する』ってのをワタル君に言ったら『映像残しといた方がイイ』ってなったらしくて。ボクんとこに『やってくれへん?』ていうのから始めることになりましたね。レーベルやろうなんて一切思ってなかったです」
SR「へ～、ところで『人間堂』ってネーミングは何から?」
H「それが…覚えてナイんですよ…」
SR「アハハハハハっ(笑)!」
H「(笑)もう何か、全部『後付け』でイイかな?っていう感じで、『人間味』だったりするのかなと思ったりしてます、自分の中で。語弊があるかもしれないですけど『身内ノリ』がBESTだとは思ってるんです」
SR「あぁ」
H「やっぱし、例えばサカタさんを知らない時点でVEKTORを観るのと、スゴい仲良くなってから観るのとは違うと思うんですよ」
SR「うん?あ～、違うかな」
H「それ抜きにしてもカッコいいモンは『カッコいい』と思うんですけどね…何かそういうの(身内ノリ)でやって行ければな、っていうのが自分の中には在ったのかな?ちょっと曖昧なんですけど(笑)。とにかく全部『後付け』で!レーベルもどんどん変わっていくだろうし。ボク『制作レーベル』って打ってるんですよ、音楽だけの『レーベル』じゃなくて、

色々…やりたいコトがあるし、みんなもその周りで遊んでくれたらなと…」

SR「発信する『基地』として?」

H「うまく遊んでくれたらな、と思ってます。今度『絵本』出す予定なんですけど、そんなんとか…『子供用』のオモチャとか楽器とか、何かみんなで作るのが好きなんですよ」

SR「でも周りに面白ぇヤツ多いじゃん?特に『パンク』ってのは」

H「そうですね。ボクはホンマ周りのヒトに『恵まれてる』なぁ、って昔から思ってます」

SR「あと普段さ、個人的に『私生活』?で仲良くしてるのって例えば誰?さっきケンジ(HAT TRICKERS)の話もしたじゃん?」

H「まぁ、ケンジくんは『一緒に住んでた』ってのもあるんで(笑)。HAT TRICKERSのメンバーはスゴい仲イイですね。で、あと高円寺の同い年くらいのSO君、ISTERISMO、INTRUDERSとかは仲イイです。本当ボク、バラバラで…レーベルのリリース同様(笑)。地元はLUCY＆THE LIPSTIX、狂撃のよーかい君…そうですね『誰と』遊んでる、って言うのは…最近だと『THE LAST MOMENT』のユウスケ、ヴォーカルなんですけど」

SR「『THE LAST MOMENT』今んとこ全然絡みナイんだよな～」

H「あ、ホントですか?元々HAT TRICKERSのベースだったんスよ、今のバンドはサイコビリーですけど。人間堂でリリースするのがまずは『友達から』っていうのもあると思うんですよね。だからそん時にリリースするヒトと一番『遊ぶ』っていう感じです」

SR「でも、そのさ『レーベル色』ってのあんじゃん?本人狙ってなくてもネ。それがサイコビリー出したりキャッチーなパンク出したりしてても『人間堂からリリースしてるのって何か人間堂ってカンジするよな』って言われたら、それはそういう奴らが集まってるってコトになるよね(笑)?」

H「あ、それ多分あると思いますよ。もうみんな『間違いない』ですから。ノリいいヒトばっかだし。…それが何なのかはボクもイマイチ解ってナイんですけど」

SR「(笑)」

H「人間堂から出してるヒト達同士、みんな…仲良くなれるんですよね。『繋がれる』というか、つつ～かすでに繋がってたりもすんですけど(笑)」

SR「ウチら浜松でケータ(DILDOS)が言ってたもん、『サイコビリーも出してるんですよ』って」

H「あ、あそこ(DILDOS)はユウスケも仲良くしてて。あとナンカ君(BASEMENT CLUB)、彼は好きなバンドがボクと全く『カブってる』という。一緒に『人間堂やれば?』っていうくらいの(笑)」

SR「ホントぉ」

H「フツーに聴いてる音楽が『同じ』で。今回THE LITTLE MIRRORSのDVDリリースも最初ナンカ君からメールもらって少し戸惑ったんですけど、つっても『一瞬』ですけど(笑)。まぁナンカ君が言うなら間違いないな、と。基本的にボクの方からオファーしないとリリースしないスタンスなんで」

SR「でも最近は結構言われるでしょう?」

H「そうっスね…」

SR「そんだけ『動いてる感』があれば」

H「凄いウレシイですね(笑)。…とりあえずその『スタンス』は…『タイミング』と『縁』だと思うので」

SR「だって単純にさ、お金と時間とで身動き取れんくて『リリース出来ない』時もあるわけじゃん?」

H「ありますあります。『出したい!』って言われた時に先がもう決まってたり」

SR「バンドが希望する『レコーディング時期』が決定してるトコロにブッ込んできたらカブるもんね。出せないもんね、単純に」

H「ただ単にプレスして、リリースして『終わり』じゃなくてその…出したバンドはずっとサポートしたいんです。大好きな友だちでもあり、ファンでもありますし」

SR「あぁ」

H「ちょっと『リリース数』が多くてテンパってるんですけど(笑)。こんだけバンド居たら毎週色んなトコでライヴあるんで…ヒマはしないです(笑)」

SR「(笑)」

H「とにかくフットワークだけは『軽く』!」

SR「軽いよね(笑)!?あとさ、テレパシーズは地元居るトキから知ってた?」

H「いえ、そこまで『めちゃくちゃ仲イイ』って感じでは無く、コッチ(東京)出てきてからですもん、こうなったの。『急接近』てカンジで、『THE ACTION』の4バンドとかもホント急接近で。でもまあ『これから続くだろう』ってのがあって」

SR「こないださ、ISTERISMOのベースのヒトと喋ったな…」

H「ジュン君?」

SR「つ～の?何かめちゃめちゃイイ奴らしいね(笑)。ウチらベースのアラカワが言ってた。格好もイイ」

H「そうっスよね?彼はめちゃくちゃ何でも聴くんで。ホント『クラスト』だけじゃ無くて」

SR「後で『もっと話しとけば良かったな』なんて(笑)」

H「『耳がイイ』って言うか、別に上から言ってるワケじゃナイですけど(笑)。人間堂から出す様なバンドもスゴい『好きで』居てくれて。喋ってて面白いですよ。もひとつ『HAAVA』ってバンドでヴォーカルやってて、そこのギターがNANOXのギター(サイトウ)だったり」

SR「あ、そうなんだ!そのバンドは何かで知ってるな、『HARDCORE SURVIVES』かな?」

H「そうです」

SR「うん、『NANOX』とか『THEクルマ』みてぇのが居るからオレが『燃える』んだよ!対談しなくちゃ(笑)」

H「大丈夫ですかコレ…まとまりますか(笑)?」

SR「平気だよ(笑)!ヒトってのは目の前に差し出された『カタチ』にどれだけ弱いか(笑)」

H「アハハハ(笑)!話戻りますけど…『友達になるヒトがパンクしか居ない』っていうの、あると思うんですよね、今の『人間堂』があるのは」

SR「うん。…オレなんかさ『一般人』の友達ひとりも居ないよ」

H「なっちゃいますよね?例えば仕事で一緒だったヒトってそん時は仲良くやるんですけど、それからしばらく会わなくなると『話すコト(内容)』が無くなる、っていうか」

SR「う～ん。オレの場合はさ、相手がバンドとかやってれば久々に会ってね、ちょい『曲聴かせてみ!』とか『見してみ!』とかなってさ、例えそれがどんなんだろうと『オレはコレだ』パーンっ!と、行けるじゃん?『バトル』と関係が成り立つじゃん。だけど『最近何やってんの?』つって『仕事です』なんて言われてもそこからオレどうしたらイイのか分かんない。知らないんだよ、そういう『感覚』。ってやって生きていくと『音楽に関わってるヒト』としか自分で居られなくなっちゃう」

H「ありますよね。ボクは仕事とかスゴい『適当』でAV監督したり、カメラマンしたり、映像の編集したり、エロ本の編集したり…コワイやつ(本)とか。ライターで原稿書いたりとか。『やりたいコトだけ!』みたいな。まぁいつまで続くか解らないですけど…」

SR「そもそもさ、何で『ライター』になったの?」

H「『出版社』に一度就職したんですよ。そこも何で『出版社』で『編集者』になろうと思ったか、定かでナイです…」

SR「(笑)!」

H「『鉄工所』で働いたり、パソコンも触ったコト無かったのに。『何か面白そうだな』と思ってちょっと勉強したりもしたんですけど」

SR「うんうんうん」

H「一杯『色んなヒトに会えるかな?』って。ただ単純に。それでアダルトの出版社に入って『編集者』になったんですけど。『夢野久作』とか…解ります?」

SR「うん、知ってる」

H「『ガロ』系とか、あそこら辺の読み物がスゴい好きで、それでず～っと読んでたら『幻想文学』にのめり込んじゃって、その後『SM小説』にいっちゃって。で、『S&Mスナイパー』というエロ本がありまして、…連載している人の中には、『家畜人ヤプー』とか書いてた『沼正三さん(天野哲夫)』とか、居てたりして。昔のモノほど色々ボクの中での『スター』みたいなヒトが出てくるんですよ」

SR「へ～っ!」

H「『コレは面白いぞ!』と思って!『色んなヒトと遊べる!』と思って入社してみたらフツーの…エロ本だった。コンビニに売ってるようなエロ本の部署に配属されちゃって(笑)。で、そういう本てライター雇わないんで、勝手に自分でパ～っと書いてたら…」

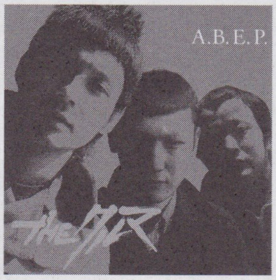
SR「あぁ、そこからだ?」

H「そうなんスよ。そこから、やっぱ仲良くなるヒトは『TATTOO BURST』とか『実話ナックルズ』とかの編集者だったりして。それで会社辞めてフリーになったら『仕事が来た』みたいなカンジですね。『辞めたんでしょ?』って色んなトコロからポツポツ来るようになって」

SR「へ～っ!スゴいなぁ」

H「でもボク頭ワルくて漢字が書けないんですよね(笑)。『平仮名』ばっかなんですけど、それが逆に書くのが難しくて…例えば『4000(文字)』って言われたら、スッごい簡単な文字で、ホント子供でも読めるような、それでちゃんと内容の濃い『4000』作ったらコレはヤバいやろな?と思って。今それをずっと『やれればな』って励んでます」





NOW PRINTING

NOW PRINTING

2010人間堂リリース情報

THE LAST MOMENT『NOWHERE ELSE』(NMCR-007/7"/1,000yen) NOW ON SALE!!
THEクルマ『A.B.E.P.』(NMCR-008/7"/1,000yen) 2010.10.16 RELEASE!!
-REJECT- / FOLKEIIS / SKIZOPHRENIA / INTRUDERS 4 way split DVD『THE ACTION!!』(NMD-003/初回プレス限定黒封筒入り特典付き!!/¥調整中)
THE LITTLE MIRRORS『THE LITTLE MIRRORS LIVE DVD』(NMD-004/¥調整中)
www.ningen-do.net

SR「スゴいな～!」
H「あまり無理せずに、とりあえず『好きなコトだけ』。遊んでるみたいにメシ食えたらな、って」
SR「うん」
H「……ヤバいスね。仕事のハナシになっちゃいました(笑)」
SR「イイよイイよ(笑)!」
H「お金でモメるのとか、やっぱイヤなんで。『人間堂』はそういう汚いトコは『まっ透明』に、メンバーには解りやすく説明しているんですけど。…何のハナシしてるか分からなくなってます。スイマセン(笑)。『人間堂』をやってて改めて面白いと思うのは、やっぱり…サカタさんに対してもそうなんですけど、例えばケンジ君がアクセサリーの『メーカー』じゃ無いけど立ち上げたらどうなるだろう?とか、そういうコト考えるヒトが周りにホント多くて。『制作レーベル』でやってたら何でも出来るんで。さっきちょっと言いましたけど今度『ザ・テレパシーズ』のヴォーカルのユウイチロウ君が『絵本』出す予定なんですよ」
SR「へぇ!」
H「このヒトが絵本描いたらオモロイやろな?とか。適当なコトを実現していく感じですね。実際ボクは『提案』してるだけなんですけどね」
SR「あぁ。だけどそれは『イメージ』してる、ってコトじゃん?」
H「まあ…そうですね。そんなカンジでみんなと『遊んで』行けたら」
SR「多分みんな色んなコト出来るけど『やり方わかんない』とか、そんなもんじゃん?この『対談』だってホントは誰にでも『出来る』モノ、だと思うし。だから『イメージ』出来る人間が居て、『オマエがそれやったら楽しくなるかもね』っていう『アイデア』でヒトの背中を押せる、って必要じゃん?そういう『アクション』を求めてるヒトも中には居るだろうし」
H「ボク、何でもひとりで『出来たい』んですよ。原稿書いて編集して、カメラ回して撮影、で映像をDVDになるまで一応どうやったら出来るか『1から10まで』全部やって、雑誌とかも、こうやったら『雑誌が出来る』って勉強はして…。仕事と遊びは基本『境目』が無い、っていうか」
SR「イイな～」
H「生活も全部、全部が『やってる事』になればイイな。何かお金とか『汚いトコロ』もみんなで『カヴァー』出来たらイイですね。生活ありきなんで…サカタさん、ボク何のハナシしてるか解らなくなってます(笑)」
SR「いや、オレ分かるよダイジョブ(笑)」
H「ボクからの『質問』とか、イイっスか(笑)?」
SR「イイよ!イイね～(笑)」
H「おおざっぱなトコから行きますね」
SR「うん」
H「サカタさん…コワいっスよね(笑)」
SR「(笑)!何?めちゃめちゃ優しいじゃんっオレ～(笑)!」
H「いや～、前の『四日市』の時も『超統リーダー』だな～!って。周り何十人も居て『点呼』とってて(笑)」
SR「アレはね～(笑)」
H「浜松ってBEYOND HATEとかサイコビリーも居て、ジャンルレスにカッコいいバンド多いじゃないですか?みんな仲イイな～って思って」
SR「仲イイね(笑)」
H「『上下関係』とかあるんスか?」
SR「ある!完全に『ある』っ(笑)!」
H「(笑)!それ聞きたかったんですよ。何かあるんですか?」
SR「(笑)!特に無いけど～、東は太田クン(8000)恐ぇ。西は澤さん(ZONE)、オレらで言うとね。つってもお互い『付き合い』長くて、『澤さんはこういうトコ苦手だろうな?』っつ～のをワザと突っついたりとか、そういう『ピラミッド』の中で遊んでる。絶対に『敵わない』じゃなくて、お互いに『解ってる』からさ。先輩も後輩もあえて『歳の違い』を更に演じて楽しんでると思うんだ」
H「ごっつ、何か…『体育会系』なんかな?って(笑)。VEKTORとかLITTLE MIRRORSとか、全然知らないカンジで『パッ』ってライヴだけ観たらスゴい『きらびやか』でやらかいイメージがあると思うんですよ。『毒』も勿論含めつつも『パッと見』はキャッチーな『メロディ』あったりとか、明るい『POP』なんかな?とか思ったりしてたらいきなり『点呼』とってるじゃないすか(笑)!」
SR「アハハハ(笑)!」
H「えぇぇぇ?って(笑)!周りのヒト『うっス!』って言い出して!サカタさんはみんなに『全員声出して～』って(笑)。『1』『2』とちゃんと言ってるヒトらはみんな刺青『ドーン』(笑)!端から見たらあっ、『地獄』やな!って思いました」
SR「ふふふ、うん(笑)。…でも『浜松』元々仲イイかどうか分かんないんだけど、オレ達はそれぞれ『個人レベル』で仲良くやりたい、って思ってる」
H「そうなんすね。あれだけ仲間が居たら色んなジャンルの『ツアー』も受けれますよね」
SR「色々いるからね。結局ナンカとかはDREX辺りと仲良くて毎回ライヴ来てたり、そんなカンジだから」
H「それこそ、さっき言った『人間堂』っぽさ?みたいな『浜松っぽい』ってありますよね」
SR「あるかもね?うん。ウレシイね、それ言われると」
H「あと…めちゃくちゃ『友達』多いですよね?」
SR「いや、少ないよ!」
H「だって何か…」
SR「『知り合い』じゃね?」
H「『友達』では無く…『知り合い』?」
SR「うん。ドコで『線』引く?そのさ、ヒラヤマ君の場合」
H「う～ん…どうっスかね～…」
SR「オレはさ、メンバーだけを『ファミリー』って考えるめんどくさい『体質』で、後は『知り合い』。だからアイツは仲のイイ『知り合い』。バンドっていう『カタチ』にこだわるんだろうね、実際そんなワケ無いのに」
H「あんま『線引き』したコト無いですね。照れ屋なんで『電話番号』聞けないし(笑)。めっちゃ仲イイのに番号しらん友だちが山のように居るし(笑)。だけど大体仲良くなるのは『名前一発で覚えるヤツ』っスね。どんな悪い『出会い』でもたいがい仲良くなりますね、でもそういうのもホント…何も考えてナイんですよ(笑)」
SR「(笑)」
H「子供の頃からある『友達100人できるかな』をずっと継続しているカンジです(笑)」
SR「オレらは…例えばコイデ君(悪意)とかオオサカ(クロスフェイス)とかさ、会えば『イエ～っ!!』ってなるけどヘタすりゃそっから何年も連絡取らんし。只そういうヒトが全国にいっぱい居るだけ。常に連絡してるワケじゃ

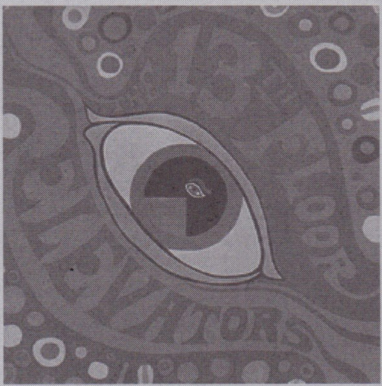
無いもんね」
H「あぁ。って言ってもボクも『誰でもイイ』ってワケじゃナイっスね、やっぱ。(小さい声で)難しいな～…(笑)」
SR「(笑)」
H「『素直なヒト』、自分に対して。そういうヒトがボクは好きです。『地元愛』は強いですけど」
SR「あ、そう?」
H「ちっちゃい頃から遊んでた友だちとか…今は『警察官』とか『美容師』とかいろいろですけど、みんな集まって今でも旅行いったりしますもん」
SR「へ～」
H「それこそ『WART』のメンバーらとかもそうです。忘年会とか30人くらいペロっと集まるんですよ」
SR「スゴいね!」
H「やっぱ…『浜松』にこだわりありますよね?」
SR「オレはさ、ガキの頃から引っ越しが多くて。それを繰り返してたら『サヨナラ慣れ』しちゃうワケ。だから『地元愛』なんてホントはこれっぽっちも無くて『デラシネ(根なし草)』つんかな?目の前に居るヒトも『どうせ直ぐ居なくなるクセに』って心のどっかで思いながら接してる。スゴく…冷たいよ」
H「そうなんスか」
SR「たまに話すんだけど、10代の時にマッドカプセルマーケッツの『ローディ』やらせてもらってて」
H「へ～っ!」
SR「静岡から横浜へ出て行って、そん時『サカグチケン』…てあの…アナーキーとかBUCK-TICKのジャケを手掛けてるヒトなんだけど、それともうひとり『林間強姦』だっけかな?暴走族なんだけど、そこの初代総長の『鳴海さん』てヒトがスゴく可愛がってくれてね、オレ楽しくてさ」
H「うんうん」
SR「そこではその後PILEDRIVERのイチロウやセン、と知り合って。ほぼ同世代なのにとにかく彼らのセンスや生活に『カルチャーショック』を受けて。オレなんかモヒカンで鋲ジャン着てヤンキーみたく歩いてんのに、隣みると『ねぇ、そのトルコ石のピアスとこのガイコツの指輪、替えっこしない?』なんて…超オシャレっ(笑)!ハーレー乗ってローレックスして『ビール盗みに行くべ?』なんてヤツも居てさ(笑)」
H「(笑)」
SR「それで…北野たけしの『ソナチネ』観て、上條淳士の『SEX』読んで沖縄行って、帰ってきて澤さんやシバタ(ZONE)とツルむ様になって。『東京行ってバンドやろ!』って『ZIKKKKEN』やって(笑)」
H「ス～ゴいっスね(笑)」
SR「だから今は浜松に居るからこんな風にやってるだけで…だよ」
H「へ～…でもこの話とか読んでる人ら『知らない』じゃないですか?」
SR「今のハナシ?」
H「はい。こういうトコ(雑誌)で言うてナイですよね」
SR「うん。そ…だね(笑)」
H「こういうコト、聞き出したいんで(笑)」
SR「あ、そうなの(笑)?」
H「ボク、バンドのインタヴューとかするんですけど『音楽』のハナシ、全然しないんですよ」
SR「(笑)」
H「面白いヒトがやったやつは『面白い』し、カッコいいヒトがやったやつは『カッコいい』と思うので、どんな人なのかをメインに書くんです」
SR「あぁ」
H「今のを聞き出しただけで今回は『やった!』です(笑)」
SR「何よ(笑)。だからオレは『モヒカン鋲ジャン』の『静岡シーン』で育って、今はこんなだから結構『突然変異』的に思われがちだけどオレにはオレなりの『文化』と『歴史』があるんだ。オレの人生…VEKTORはそんなん全て『フィルター』を通した『ミュージック』だよ。こう…なってる(笑)」
H「……全然…色んなヒトばっかりですね。…何のハナシしたらイイですかね?」
SR「アッハハハハ(笑)!」
H「『人間堂リリース』のバンドは『はみ出してる』って言うか、『我が強い』ヒト多いっスね」
SR「まぁ『似た』バンドが無いってこったね。『個性』だべ?VEKTORなんかドコ出ても浮くよ」
H「そうですよね(笑)」
SR「だけどそんな人間がやるべきなのが本来の『ロック・バンド』なんだよ『イイ子ちゃん』じゃ無い」
H「『人間堂リリース』のバンドはみんな『素直に』出せてる、というか、そのヒトのそのまのモノが『作品』に出てると思います。ボク、全バンドのメンバーに対して『憧れ』みたいのあるんですよ」
SR「あ～」
H「ほんまに人間堂の音源は『名盤揃い』だと断言できるんで(笑)」
SR「イイね～っ!」

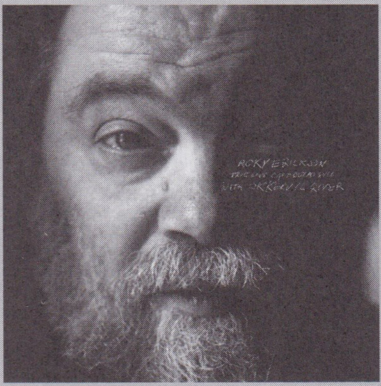
…ヒラヤマくん家は三上博史が独り暮らしでもしてそうな『シンプル』かつ何処か『アヤシイ』部屋でした。これからは高円寺でスタジオ終えたらアラカワの車で送ってもらってヒラヤマくん家に泊まるコトにしよ(本人達の承諾ナシ)パーペキっ!!
それはそうと『902オゼキ大統領誕生日会in磐田』の写真を載せておきます。ZONE、BEYOND HATE、VEKTOR、DREX、902、BOUND、SO WHAT、SCOOTERZ、DILDOS、KAT UGLY他のメンツがいり交えての楽しい呑み会デシタ。イメージとは異なりますがボク達、基本的に暴力は好まないです。しかし『アタマを使った犯罪』にはどこか惹かれてしまう。つ～かバンド名だって『VEKTOR(ベクトル)』だし。
高校生のボクは学校イチのJR定期券『偽造犯』でした。デザイン科だったのですが普通科や特進科の先輩にもよく『オレのも作ってよ』と頼まれて。その定期の３分の１の値段で買い取ってもらうワケです。気になる女の子のものは３ヶ月の有効期限を１年にしてあげたり(笑)。１枚の紙を薄く４枚に剥いで一番上の文字だけを張り付けるから一度作ってパスケースに入れたら作ったボク自身にも見分けが付かない。そんなこんなで稼いだマネーは全て『革ジャン』『ロンドンコーン』『ＣＤ』『エフェドリン』『ボンテージパンツ』に姿を変えました。
…いけね!エルジンて毎回ウチの両親にも渡してるんだった。あっ!ちょっと待って、ケータイ鳴ってる。…相手は「優香」…ムニャム、ム?これも夢か!…良かった(笑)。

前列中央が大統領です。もちろんド平日(笑)。浜松G-SIDEにて10/31(日)『ハロウィンナイト(バンドメンバーごちゃまぜコピー大会)』が行われます。冷やかしに来て下さい。



LASHING SPEED DEMONS VOL.10





THE 13TH FLOOR ELEVATORS(ROKY ERICKSON)

はい、毎号レヴュー20枚ずつ書いてたら、遂にネタが尽きてきました(行川さん、引き続き頑張ってください)。連載10回目にして、リニューアルします。ぶっちゃけてしまえば、DOLL廃刊で中断したかつての連載「LUCIFER SAM'S DINER」の続編みたいなもんだと思ってください。もちろん内容は"DOLL向け"から"EL ZINE向け"にシフト。毎回1バンドずつ、ネタは今までこの連載でレヴューしたのとカブると思うけど、これまで1バンドにつきレヴュー1本180字で書いてたのを、2ページ4000字以上語り倒します。これまで同様ヨロシクお付き合いください(時々趣向を変えるし、レヴューもまたやります)。

TEXT:大越よしはる

そんなワケで、リニューアル第1弾のネタはこの人、ロッキー・エリクソン(THE 13th FLOOR ELEVATORS、THE ALIENS他)。本誌読者様の中で、ELEVATORS～ロッキー・エリクソンなんて聴いてる人はどれくらいいるんだろう、と正直疑問なんだが、どういうワケか本誌に登場する海外のハードコア・バンドのインタヴューを見ると、フェイヴァリットとして度々名前が出てくるのがこの人だ。「CHAOS IN TEJAS」にも出演してたしな。

ロッキー・エリクソン。1947年7月15日、テキサス州オースティン出身。ロッキーといえば、まずはTHE 13th FLOOR ELEVATORSだ。このバンドについては本誌VOL.2でちょこっと紹介しているが、1stアルバム『THE PSYCHEDELIC SOUNDS OF』がリリースされたのが1966年。西海岸でサイケデリック・ロックが最高潮に達して"サマー・オブ・ラヴ"と言われたのが67年。66年といえば一般に全米でガレージ・パンクが炸裂した年として知られているワケだが、灼熱のテキサスでその66年に"サイケデリック・サウンズ"って…かなり先を行っていた、いや先を行き過ぎていた存在だと思う。

THE 13th FLOOR ELEVATORSといえば『THE PSYCHEDELIC SOUNDS OF』、『THE PSYCHEDELIC～』といえば何と言ってもアルバム冒頭を飾るナンバー「You're Gonna Miss Me」。THE WHOの「I Can't Explain」を思わせるイントロから、ロッキー・エリクソンの甲高い狂った叫びが炸裂。

ロッキー・エリクソン。曲作りの才もさることながら、何しろその声が極悪にして強烈。まさに悪魔的としか言いようがない。THE 13th FLOOR ELEVATORSの曲が後によくカヴァーされているのは、曲自体の良さによるところだと思うが、アメリカン・ロック裏街道のイコンとしてロッキーその人が敬愛されるのは、やはりその魔力をたたえた声によるものと思う。

そしてロッキー・エリクソンが歌い始めるか始めないかのタイミングで、ギターともベースともドラムとも、もちろんキーボードとも関係ない「ドゥクドゥクドゥクドゥク…」というヘンテコな音が流れ始める。コレが初期THE 13th FLOOR ELEVATORSの大きな特徴であり、初期のバンド・リーダーだったといわれるトミー・ホールによる"エレクトリック・ジャグ"であります。

初めて聴いたときは口で「ドゥクドゥクドゥクドゥク」って言ってるのかと思ったそのエレクトリック・ジャグだが、なんか酒瓶の口を吹いて、それをマイクで増幅してあんな音にしてたらしい。60年代末からオーディオ・ジェネレーターやアナログ・シンセが一部のロックで盛んに使われるようになり、イギリスのHAWKWINDなんかはそれらを大々的にフィーチュアして意味不明なノイズをビュンビュンいわしてたワケだが、トミー・ホールのエレクトリック・ジャグは超アナログな手法でそれに先駆けていた、といえる。異形のダーク・サイケ「Roller Coaster」にしろ軽快な(?)「Fire Engine」にしろ、トミー・ホールはソングライターとしてもクレジットされていて、その存在は大きい(現在もLSDヤリ続けているという噂!)。

このバンドは発掘ライヴ音源みたいなのが相当たくさんリリースされていて、それらを聴くと元々の音楽性はブルーズや英国ビートの影響に基づくシンプルなR&R…というのはライヴだとカヴァー曲がけっこう多いんでよくわかるんだが、チャック・ベリーもTHE KINKSも…それどころかTHE BEATLESさえ、ロッキー・エリクソンの悪魔的絶叫とトミー・ホールのエレクトリック・ジャグでなんだかよくわからないモノに姿を変えてしまっている。それはもう恐ろしいバンドでありました。

THE 13th FLOOR ELEVATORSに関して言えば、もちろんエレクトリック・ジャグこそがELEVATORS、というワケじゃないし、ロッキー・エリクソンだけが偉大だったワケでもない。ギタリストのステイシー・サザーランドの存在も大きくて、1968年のラスト・アルバム『BULL OF THE WOODS』なんかはステイシーが完全にリーダーシップをとった作りになっている。ここでは最早「ドゥクドゥク…」も聴こえず、大体ロッキーが歌ってない曲も多い。

R&Rのカヴァーすら得体のしれない悪魔の音楽に変換してしまい、1966年に"サイケデリック・サウンド"を標榜する…そう、このバンドはかなり早いうちからアシッド漬けの狂気に振り回されていた。2ndアルバム『EASTER EVERYWHERE』(67年)までは元気いっぱいだったロッキー・エリクソンの存在が『BULL OF THE WOODS』ではフェイドアウト気味なのもそのせいで、バンド末期、ロッキーはLSDのやり過ぎで精神を病み、実に3年も入院する羽目に陥る(アルバム・デビュー以前、既に一度逮捕されていたりする)。

各方面から高い評価を受け、テキサスだけでなく西海岸までツアーしたりと、活発な活動ぶりだったTHE 13th FLOOR ELEVATORSだったが、一方でアルバム毎にリズム・セクションが違うほど不安定なバンドでもあり、バンドはロッキーを欠いて結局崩壊。ステイシー・サザーランドは78年、自分の妻に撃ち殺されるという最期を遂げてしまっ

たので、今や再結成もあり得ない。

しかしTHE 13th FLOOR ELEVATORSの音楽は、パンク以後の音楽にはかなり大きく影響した。「You're Gonna Miss Me」は1976年以後、RADIO BIRDMAN、DMZといったパンク・バンドや、THE LONG RYDERSなどニュー・ウェイヴ以降の多くのバンドにもカヴァーされていて、その生命は今に至るまで受け継がれている。「You're〜」以外にも、「Fire Engine」をTELEVISIONが、「I've Got Levitation」をジュリアン・コープが、それぞれカヴァーしているし、「Fire Engine」は日本のガレージ・バンドのバンド名にもなった。以前から度々言っていることだが、「You're〜」をカヴァーしているバンドに悪いバンドはいない、とここでも改めて書いておこう。



電気ショック療法とかひどい目に遭わされたらしい精神病院を出てからも、ドラッグ常習と精神崩壊はロッキー・エリクソンに付きまとい続けたが、ともあれロッキーのキャリアはTHE 13th FLOOR ELEVATORS時代よりもそれ以後の方がずっと長いワケで、彼はその後も多くの名曲を生み出し、歌い続けた。ちゃんとしたアルバムは1980年にROKY ERICKSON AND THE ALIENSとしてリリースした『I THINK OF DEMONS』まで待たねばならなかったが、THE ALIENSは70年代半ば以降多くのシングルやEPをリリースしていて、ロッキーの後のレパートリーの多くはこの時代に作られている。

それにしてもROKY ERICKSON AND THE ALIENS…いかにも"キメてますよ"といった風貌のロッキー・エリクソン(60年代から今に至るまで宇宙人を印象しているだけはある)を筆頭に、なんか佇まいが尋常じゃない。写真を載せておくが…こっ、怖い！ナニこの人たち…。

ともあれ、もう一度言っておくとこの時期のロッキーは本当に名曲連発。音楽性はメタリックというか、ちょっとハード・ロックがかったR&Rで、メジャーのCBSから出たアルバム『I THINK OF DEMONS』もいいんだけど、同じ曲でもアレンジや演奏は実を言うとそれ以前のインディペンデント系シングルやEPの方がカッコよかったりする(ちょうどパンク・ムーヴメントの時期に録音されたものが多いのは、何かの符合だろうか…)。「Cold Night For Alligators」「Bermuda」「Alien I Creator」「Don't Shake Me Lucifer」「I'm A Demon」「Two Headed Dog」「I Walked With A Zombie」「Bloody Hammer」とか、曲名もホラーあるいはSFテイストたっぷりでイイ感じ。

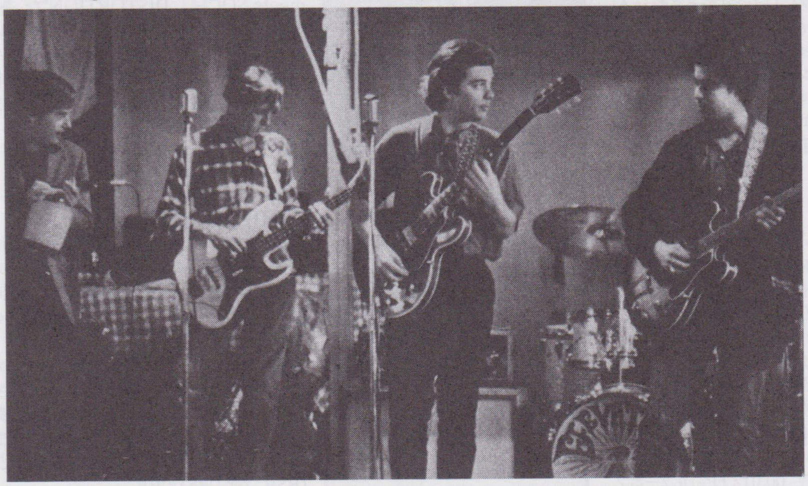
この時期のロッキー・エリクソンの音源としては、1992年にイギリスのSWORDFISHというレーベルから出た『MAD DOG』という編集盤CDが、選曲もアレンジも音質も良くてお勧めなんだが、今手に入るかな…という感じ(と思って今ネットで調べたら、廃盤だけどけっこう安く買えることが判明)。いずれにしてもロッキー・エリクソンのソロはかなりの数の編集盤やライヴ盤が出ているんで、見かけたら手にとってみることをお勧めします。

ROKY ERICKSON AND THE ALIENSと前後して、ロッキー・エリクソンは後にパワー・ポップ・バンドとして有名になるTHE EXPLOSIVESとも活動。ROKY ERICKSON AND THE EXPLOSIVESとしても多くの音源を残している。こちらもイイです(『MAD DOG』にも何曲か入ってる)。これまたパワー・ポップ系で有名になるTHE NERVEBREAKERSとも一緒にやっているし、他にもいろいろなメンツをバックに歌っていて、70年代後半〜80年代後半にかけての10年余りはかなり活発に活動していたのだが、1989年に再びドラッグ中毒で施設に送られることに。

90年代前半には一度復帰して、1994年にはアルバム『ALL THAT MAY DO MY RHYME』をリリース。コレは84〜85年の録音と93〜94年の録音をごっちゃに収録していて、90年代録音の方では、80年代に日本でアイドル的人気があったテキサスのロッカー、チャーリー・セクストンが参加していたりする。比較的穏やかに歌われるフォーク・ロック/カントリー・ロック的な90年代の録音と、どうかするとすぐに悪魔の声になってしまう80年代のR&Rの対比がユニークな1枚。しかしコレで完全復帰とは行かなかったようで、ロッキー・エリクソンは90年代の大半を母親のもとで、ほとんど何もしないで過ごしていたらしい。

ところが21世紀になってからロッキー・エリクソンの活動は再び活発化し、先に書いた通り「CHAOS IN TEJAS」にも堂々出演。この4月には新作アルバム『TRUE LOVE CAST OUT ALL EVIL』をリリース。7月で63歳になったロッキー、歌にも音にも寄る年波は見えるが、一方で滋味も増し、健在は嬉しい限り。

ソロになってからの楽曲も、かなりいろいろなバンドにカヴァーされています。ガレージのTHE LYRESが「We Sell Soul」を、元ANGRY SAMOANSでも知られるジェフ・ダールが「Two Headed Dog」を、そしてなんとENTOMBEDが「Night Of The Vampire」を、といった具合。ニューヨークやハリウッドだけでない、合衆国に偏在するアンダーグラウンドなR&Rの、底なしのディープさと狂気を体現する存在…それがEL ZINEでも多くのハードコア・バンドによって語られるロッキー・エリクソンの不変の魅力、というか魔力なんだろうと思う。

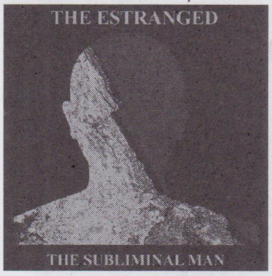


KISS THE DISC

TEXT:行川和彦

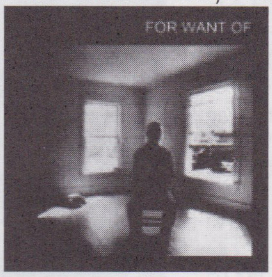
すべて現行のバンドで、ほとんどが2010年に発売された新譜だ。本誌を売っている一部のパンク/ハードコアの専門店でしか買えないレコードも多いが、すべて国内のお店でも入手可能だからチャレンジしてみていただきたい。

ESTRANGED/The Subliminal Man



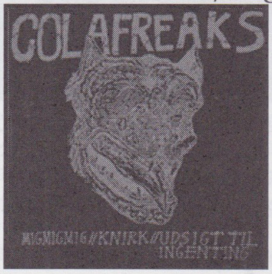
ジャケが薄い紙一枚なのは減点1だが中身は濃くて結局繰り返し聴いてしまう、HELLSHOCKのメンバーらによる米国ポートランド産のセカンド。JOY DIVISIONのアップ・テンポの曲に同郷の大先輩のWIPERS(+BUZZCOCKS)が混ざったみたいで、ドライな音ながらもやっぱりセンスが違うし、パンク・ロックに仕上げているのもさすがだ。英国の初期パンク・バンドのFLYSのカヴァーも渋すぎて泣ける。
(DIRTNAP ZZZ-93)CD

FOR WANT OF/For Want Of



3人が歌い叫びギター2本のテキサス産の4曲入りのデビュー盤。バンド名の元ネタと思しきRITES OF SPRINGらの85年ごろのDC産ポスト/エモーショナル・ハードコアに、BETWEEN THE BURIED AND MEのプログレ・テイストを噛ませて加速&凝縮したみたいなサウンドだ。馴れ合いシーンに縛られぬがゆえの瑞々しい熱情の振動が心に響く。レコードと同内容のCD-R盤とミニ・ブックレット封入。
(RESUSCITATE RR01)7"EP+CD-R

COLA FREAKS/Mig Mig Mig



デンマークの現在進行形パンク・バンドの3曲入り。70年代の各国の地下パンクが80年代のニューウェイヴに噛みつかれて産まれたようなフリークアウト・サウンドで、既成のどのシーンでも居心地悪そうなところもグレイトな"アウトロー・パンク・ロック"がますますディープに迫る。母国語で歌われていると思しきヴォーカルの歌いっぷりもタダモノじゃない。デリケートなジャケットも一体化した表現だ。
(ROB'S HOUSE RHR-061)7"EP

GAMY/Mosh Or Die!!!



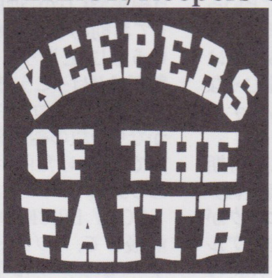
関西の"真性クロスオーヴァー・バンド"の結成15周年記念盤。4曲のリメイクと2曲の新曲で11分28秒という潔く濃い作品だ。すべて曲名に"mosh"が付き歌詞もモッシュの話題オンリーのお馬鹿さも痛快だが、音はACCUSED系メタリック・ハードコア・パンクでかなりカッコイイ。病的なジャケもソリッドな音質も完璧。MUNICIPAL WASTEとタイマンを張れるのは彼らしかいないと再認識した。
(GROOOVIE DRUNKER KOCA-62)CD

SPASTIC PANTHERS/THROWAWAYS/Split



カナダのバンド同士のスプリット盤。SPASTIC PANTHERSは、81年頃のCIRCLE JERKSとD.O.Aが混ざって加速したような音にヘンリー・ロリンズが乗っかったようなハードコア・パンク・ロックが渋い。女性中心のTHROWAWAYSはまったりガール・ポップ・パンクとハードコア・パンクの二刀流で、砂糖まぶしたみたいな粗削りの音とガールズ・パワー全開の不敵なヴォーカルが最高だ。今後も期待。
(HANDSOME DAN HANDSOME-007)split 7"EP+DLクーポン

TERROR/Keepers Of The Faith



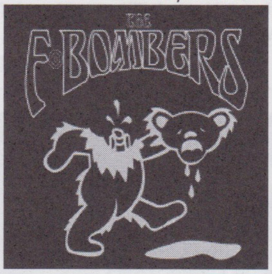
オールド・スクール・スタイルを貫くLAのバンドが結成10年目に放った4作目。ニューヨーク・ハードコア・パンクの伝統を西海岸で太く凝縮したサウンドも、WAR ZONEの故レイビーズが使っていた言葉の精神をくむタイトルが象徴する歌詞も、迷いがなく天晴なのだ。デジパックで小ポスター状の歌詞カードを封入し、日本盤は歌詞と詳細な曲解説の和訳とプロフィールと昨年の東京公演の5曲付。
(DOOM PATROL FOUNDATION DOOM-0027)CD

CONGA FURY/SHITSTORM/Split



予定より数年遅れで発売。高知のCONGA FURYは2006年5月録音でオデンがヴォーカル時代の古い音源になったが、時代を超えてやかましいことを実証する。スラッシュ・パンクにD-beatがまぎれ込んで出てきたC-beatはこの声で加速している。フロリダ州マイアミのSHITSTORMは容赦なきグラインド攻撃で今回も凄まじい。TORCHEにも在籍のドラマーの爆裂ビートも鬼気迫り、オススメ。
(TO LIVE A LIE TLAL38)split 7"EP

F BOMBERS/Sick Of It All



ガンベルトもクールな女性(vo,g)がフロントの米国ニュージャージーのトリオだが、派手なヴィジュアル+要領悪い地道な活動に惹かれる。音は"DISTILLERS meets SOCIAL DISTORTION"な、ありそうであまりない素朴な"バッド・ガール・ロックンロール・パンク"。微妙にハズしているジャケもかわいくてそそられるし、2曲に賭けた熱情むんむんの勝負パンツみたいな真紅の盤にも気合を感じる。
(JAILHOUSE SNA009-1)7"+DLクーポン

LOCUST/The Peel Sessions



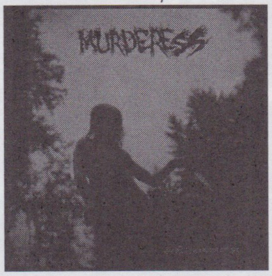
BBCの名物DJジョン・ピールの番組のために2001年8月に録ったスタジオ・ライヴの16曲入り。現在の4人での録音だが、個人的には東京・目黒のMODスタジオで観た初来日公演を思い出す混沌の激速音像にめまいがしてきた。ハードコア・パンクとデス・メタルの激突の中でシンセサイザーが鳴く彼らの真骨頂が味わえるのだ。ヘヴィな中低音も高域の怪音もよく出た音質もパーフェクト。グレイト!
(RADIO SURGERY 003)12"EP+DLクーポン

MINDLESS/Human Conditioning



現在進行形パワー・ヴァイオレンスを叩きつけるテキサス産の初音盤。ファスト・パートにスロー・パートが絡む曲は、CROSSED OUTとNO COMMENTと87年のNAPALM DEATHの妥協無きセッションみたいで、弾力のある音にも持っていかれる。HATRED SURGEなどでも歌う女性ヴォーカルはここでも本気の発声で痺れるし、歌詞も誰かを悪者にした自己弁護とは次元が違う痛々しい深手で強力だ。
(RSR rsr 088)7"EP

MURDERESS/The Last Thing You Will Ever See…



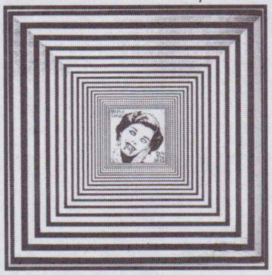
女性が前に立ち男性ドラマーの米国ポートランド産のデビュー作。これがまた斬新ではないにもかかわらず新鮮な"メロディック・メタリック・クラスト・ハードコア・パンク"で、歌詞も含めて"初期SACRILEGE meets HIS HERO IS GONE"とも言いたくなり、しかも旋律やスクリーミング歌唱はブラック・メタルを消化しているのだ。曲が長めでじっくりと取り組んだ、二つ折りの歌詞カード封入の力作。
(ABORTED SOCIETY ABSOR 017)LP+DLクーポン

LAS SENORAS/Las Senoras



品のいいお嬢さんルックスでこの音という意外性でもポイント上昇のスペインの5人組の4曲入り。RAMONES～後期BIKINI KILL～BLACK FORKも思い浮かび、キル・ロック・スターズのバンドがハードコア・パンクをやったような前のめりのビートがエネルギッシュで、薄っすらと覆うキーボードや母国語で歌うヴォーカルもナチュラルでカッコつけないからこそカッコイイ。ジャケットの繊細な作りも素敵だ。
(SOLO PARA PUNKS No Number)7"EP

WHITE LUNG/It's The Evil



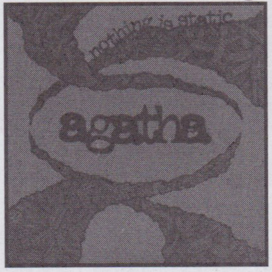
自宅プリントみたいなジャケットだが、CDは期待の10倍超で素晴らしいカナダ産のファースト。何しろ吹っ切れたかのようなスピード感が途切れないクールなパンク・ロックの連発で目が覚めるのだ。切なく元気なヴォーカルと止まらない一杯一杯のビート、ポスト・パンク一気飲みで炸裂した唯一の男性メンバーのギターの押しの強さにたじろぎ、ハードコア・パンク風の曲も増えてビックリ。これもオススメだ。
(DERANGED DY 174)CD

PAIN MORE PAIN/La derniere priere et la mort de Dieu



女性が歌う福島拠点の"ハードコア・ドゥーム・ロック・バンド"のデビュー作。D.R.I.やPOISON IDEAのTシャツも着る人間がやっているだけに、メタルというよりパンクの音作りだ。SLEEPっぽい疾走感のスロー・パートと瞬発力十分の速いパートでうねりを生み、和の情趣が揺らめくACID KING風のクールな歌声も相まって妖しい魅力がある。今後を期待させる挑戦的な18分強の曲も含む約30分4曲入り。
(LIGHT MY FIRE FIRE-001)CD

AGATHA/Nothing Is Static



ヴォーカルなどで女性メンバーを含むシアトルの4人組のデビュー盤。瑞々しい女声をはじめとしてBIKINI KILLも思い出すが、いわゆる激情系ハードコアのエッセンスも息づく衝撃的なパンク・ロックだ。胸に刺さるメロディと生硬な音があまりにナマナマしくてドキドキしてくる。本編とは別の7曲入りCD-R(糸綴じ紙ジャケットも盤面もDIY印刷仕様)も厚手のジャケットに封入。トータル・グレイト！
(RUMBLETOWNE RTR-010)7"EP+CD-R

LUCIFERA/Legiones De Metal



南米コロンビアの女性メタル・バンドのデビューEP。D.R.I.のデビュー盤(リミックス前のやつ)がパワー・アップしたような音質にやられ、つんのめりスラッシュにブラックもデスもメロディックも強引にブッ込んで制覇したみたいな曲に殺られる。スペイン語で歌うヴォーカルも"極道の女"みたいにドス効かせるだけじゃなく泣きあり、人差し指と小指立てる者あり中指立てる者ありのヴィジュアルも完璧。
(LEGION OF DEATH LOD-040)7"EP

BARAKA FACE JUNTA/Baraka Face Junta



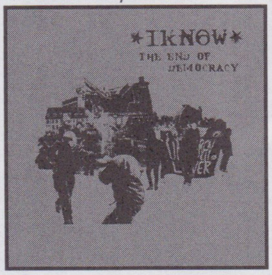
政治的なポーランドのバンドのファースト。The EXがCRASSのスピード感を携えてFRICTIONみたいなフリー・フォームの曲を展開したみたいで、ソリッドなギターと弾むビートの反復を核にした自在な音の躍動感が素晴らしい。ポーランド語ならではのパンチと哀愁が効いた男性と女性のヴォーカルもパワフルこの上無しだ。シンプルかつ深い歌詞の英訳も載った16ページのブックレット付。これも強力盤だ。
(NIKT NIC NIE WIE/TRUJACA FALA No Number)CD

V.A./Desert Storm Of Evil



アフリカと中東のブラック・メタル6組を収録。エジプト、チュニジア、南アフリカ、リビア、トルコ、バーレーン、サウジアラビア、イランのバンドが1曲ずつ提供し、メロディックな音、プリミティヴな音、フリーキーな音など、みな天然でスタイル逸脱して刺激的だ。6組共歌詞は英語だが、滲み出る旋律に民俗性も見え隠れ。近隣のイスラエルと微妙な関係の国もあって色々思いをはせる二つ折りジャケット。
(LEGION OF DEATH LOD-034)LP

I KNOW/The End Of Democracy



東欧ベラルーシのアナーコ・パンク・バンドによる2006～2008年の録音の12曲+α入り。実生活と遊離していたり一方的な視点のナイーヴな歌詞も見受けるが、昔隷属していたロシアに隣接する小国のバンドならではの痛みと強みが貫き、感情が噴き出す熾烈なメロディック・ハードコア・パンクだ。線の細い女性ヴォーカルの歌唱も熱い。歌詞の英訳や英語の解説などが載った20ページのブックレット付。
(STONEHENGE STON 043)10"

WOLD/Working Together For Our Privacy



カナダの"ブラック・メタル・ノイズ"だが、前述のSHITSTORMのドラマーのレーベルからカセット作品を出している。この4作目は不穏極まりない金属質の鳴りに磨きをかけ、耳鳴りが轟音と化したみたいで何が起こっているのかわからないほどだが、トレモロみたいなギターが研ぎ澄まされた地獄の大河の流れを導いていく。黄泉の世界へと誘う覚醒のための音楽である。デジパック仕様の約35分3曲入り。
(PROFOUND LORE PFL-055)CD

＜追伸＞ 本誌のこのコーナーではなるべくパンク・ロック/ハードコア・パンクのレコードやCDをレヴューしたいが、今回もその系統だけで推薦盤を20タイトル揃えられなくてスイマセン。ジャンル問わずあくまでも新しくリリースされたものをなるべく書きたいので、またしても数枚音楽的に幅を広げてやってみた。ここのところ何かと忙しくて自分を追い込むようにして原稿を書いている状態で、紙媒体等の方の原稿の締め切り日を破ってまで書く気はないから更新が滞っている、自分のブログ(http://hardasarock.blog54.fc2.comなめブログ)で取り上げるべき作品も入れた。けどみなパンク/ハードコア好きなら楽しめると思う。

ギタリスト解剖

metal punkやろうぜ!

vol.4 moe

いいバンド、いい楽器使いと言うのは個人の好みを超越した所に在るものだと思う。
去年の今は亡き20000V。ザーンという、まぁどっかで聴いたことはあるトーンのギターが耳に飛び込んできた。ふとリハ中のステージに目をやると、女性がフェンダーを持って立っている。その後よく聴くとザクザクじゃないザンザンしている、どっかで耳にしたことはあるような気がするけど、確かに一捻り加えたギターをキメ始めた彼女は間違いなく以前高円寺BOYでORDER FROM CHAOS LPを持ってニタ～としていたヤツだった!僕は恐ろしくなりその場で声は掛けなかったが遂に今回、ギターについて話を伺う機会が出来た。来年はさらにその名を轟かせる存在になるであろうDEATH METALPUNKバンドSEX MESSIAH!!のBOSS兼、ギタリストMOE登場!!　INTERVIEWED:二ツ木正康

■あなたのお名前、バンド名は?

「SEX MESSIAHのMOEです」



■ギター歴は何年?

「4年くらいです」

■現在の使用ギター、AMP、エフェクターを教えてください。

「ギターはB.C.RICHのIRONBIRDです。P.U.はダンカンのBLACKOUTS METAL。このP.U.は前使ってたBLACK OUTSよりミドルが強調されてて私の音作りだと良い感じです。ケーブルはProvidence。エフェクターはBEHRINGERのV-amp、ARIONのアナログディレイ。迷走してエフェクターたくさん買い換えてた時期もありますが、あまり高いのは買えないし、中途半端なのより安いヤツの方が気に入った音が出て軽くて手軽だったので、こんな感じです。AMPは持ってないけど、マーシャルを使うことが多いです」

■足元を見るとプラモデルを並べてるみたいだけどP.U.は結構な高級品だよね?エフェクターと同様にP.U.の試行錯誤も今までにはしたと思いますが、アクティブP.U.には拘りがあるの?個人的にはプリアンプとかマルチなどコンピューターな感じとツマミが少ないのに高機能なのに弱いんだけど…。MOEさんはMTRとかシーケンサーみたいなのも使いこなせてしまう人なの?

「P.U.は今のにするまではずっとパッシブでした。SH-4(ダンカンJB)が一番長かったですね。アクティブ試したことないし、一度使ってみたいなと思ったとき、EMGはみんな使ってるし、ダンカンのアクティブにしたんです。そしたら好きな音が出たので。アクティブが気に入ってるんじゃなくて、今使ってるBLACKOUTSの音が気に入ってて使ってる感じです。他のアクティブ使ったことがないからわかりません。MTR、シーケンサー…頭が痛くなりますね。MTRは思いついたフレーズをメモ的に録ったり、重ねたいギターのフレーズを確認するとき使うくらいで、全く使いこなせてません」

■自身のギターのチューニングと使用弦メーカー/ゲージ、ピックの種類と固さ。

「チューニングは1音下げです。弦はERNIE BALLのREGULAR SLINKYですが、不満がないからずっと同じの使ってるだけであまり他のを試したことがないです。ピックはティアドロップの堅いのが好きで、ダンロップのデルリンっていうツルツル素材の1.14mmを使ってます。ピックは違うのだと慣れないせいかすぐ落としてしまうし、これじゃないと嫌です」

■010～046の弦SETで一音下げ、ピックはハード。出してる音は女らしくないけど、弦のテンションは緩めだね?ソレをえぐる様に弦をピッキングしてハードな音を意識しているの?何かコツは?

「テンションは緩い方が好きですね。このテンションとピックの堅さに慣れてるだけで、全く意識はしてないです」

■セッティングを教えてください。自分の音の拘り、特徴もお願いします。

「V-amp→アナログディレイ→マーシャル。アンプのセッティングはGAINを抑え目にして、HIGHを0にして、MIDDLEを真ん中～3時くらい、BASSを9時前後、薄くリバーブ。V-ampで歪ませて、コーラスもV-ampの設定でほんの少しだけかけます。ディレイはソロのときだけです。レコーディングのときは、Guyatoneのファズ使って2本目のギター重ねたり、違う音も使います。ライヴでは、ギターリフがくっきり聴こえること、ドラムを食わないことに拘ってます。あとは、ベースとドラムを聴きながら全部綺麗に聴こえるか慎重に調整。バンドとしてのサウンドを大事にしたいので、ギターだけを聴いて調整しないようにしてます。ギターだけで弾いてて気持ちいい音と、バンド全体で聴いててカッコイイ音は全然違う。当たり前のことですけど、それに気づくのにけっこうな時間を要しました。ギター弾き始めたばかりの人だとぶち当たる問題じゃないでしょうか。私だけかもしれないけど」

■ゾワーと言う音を出しながらも音抜けを気にしているみたいだけど、要は個々に分



アイアンバードwithモーニングスター!

離した音が好みってことかな?アンプのセッティングはマーシャルらしからぬ感じだけれども、やはりライヴハウスだとマーシャル900を使うことが多いよね?チャンネルは2つあるやつではどちらのチャンネルを使ってる?また今後自分で所有してみたいAMPはありますか?またソレは何ですか?

「そう、自分のバンドには分離した音が合ってると思って。マーシャルも、割とどこでもあるから使ってるだけですね。2000でも900でも800でも、それに合わせたセッティングを決めてます。チャンネルは、歪まない方使ってます。KAWANAさんの企画で浜松に呼んでもらったとき、KAWANAさんのPEAVEY使わせてもらったけど、いい音出るし使いやすかったので、興味があります。あと、BLACK STAR。誰も使ってないし私も使ったことないけど、名前に惹かれます」

■"ギターだけで弾いてて気持ちいい音と、バンド全体で聴いててカッコイイ音は全然違う"。コレを具体的に言うとどういうことですか?簡単に言えば最高だと思ったギターの音が皆で合わすとベースに食われて何も聴こえない等、そういった内側からの話ですか?

「バンド全体の理想の音があって、その構成要素にギターの音があるってことです。最高だと思ったギターの音が、みんなで合わせて客観的に聴いてみると、普通過ぎたり、目立ち過ぎたり、シンバル聴こえなくなって、あれれ…ってなってしまわないように。最近は、今回のSEX MESSIAHの音はコレだ!ってバンド全体の音を頭で決めてから、じゃあギターはこのセッティングで…と始めます。メンバーそれぞれが作った音が先にあって合わせてから微調整しても、まあまあいいもんにはなるけど、理想と違うから求めてた雰囲気が出てこないんです。材料がありきで作るものを決めるんじゃなくて、作るもの決めてから材料とレシピを考えた方が自分のバンドには合ってたっていう話です」

■最初に買った、手に入れたギター、それは何故そのギター??

「Fender Mexicoのサイクロンです。楽器屋の中古の売り場で、色がすごい好みでずっと狙いをつけてました。FenderなのにP.U.はハムだし、メキシコ製なのがいい。面白いギターなのに、いつの間にか製造中止らしいです。純正P.U.が壊れてしまって、いくつか交換したあと、ダンカンのBLACKOUTSに落ち着きました。このギターはネックが太いし重たいし弾き難かったけど、かなり気に入ってました。そのうちまた使う予定です。Pungent Stenchがライヴ動画でストラト持ってて、デスメタルでFender系のギターっておもしろいなーと思ったので」

■現在までに影響を受けたアーティスト/ギタリストをあげてください。

「●United MutationのJohn Fox。ハードコアなのにすごく自由な感じがするから。
●Brian Baker ●DEVOID/fra hedensktidのKAWANAさん。音が素晴らしいし、リフがすごくかっこいい。 ●AUTOPSY等のオールドスクール・デスメタル」

■その影響は今現在どのように自分のスタイルに反映されていますか?

「John Foxは、ハードコアでもこんなアホなリバーブの使い方してもいいんだ!て衝撃を受けました。ハードコアってのは、かっちりきっちりした音楽で、型にはまったギターを弾かなきゃいけないと思っていたので。Brian Bakerに直接影響を受けたとは思わないし、影響を受けたと言ったら怒られそうですけど、自分のギター弾きとしての原点には、DAG NASTYのリフがすっごい好きで、ハードコアキッチン(神戸のレコード屋)で、お店に置いてあったギターでずっとDAG NASTYを聴きながら弾いてたってのがあるんです。覚えやすいし、かっこいいし、聴いてたら自然とギター弾きたくなるんですよね…。彼は天才!!KAWANAさんとは初めて東京でライヴしたときDEVOIDと対バンで、リハでもうギターに釘付けでした。存分に歪んでるけど、突き刺さる感じじゃなくて、コードでも単音でも頭にぞわーっと広がってくるような音で。あんな音出したいって関西帰ってから色々試行錯誤しました。KAWANAさんがやってる両バンドともリフがカッコよくて耳に残って覚えやすい!そこも憧れです。今のミドルを強調したセッティングはオールドスクール・デスメタルに影響を受けています。セッティング変えたら、Autopsyのリフ弾いてしっくりくるかで確認してますし。Autopsyの聴きすぎで指癖はついてしまったかも…。特定のギタリストとかの影響ではないけれど、ギターを弾き始めた頃はファズにこだわってたんです。それは、日本のアンダーグラウンドのサイケのバンドがすごく好きだったのがあって。ファズでノイジーなやつ。ギター買う前から、ギターを弾くことより寧ろギターでカッコイイ音を出すのに憧れてたから、練習より音作りばかりしてました。今もその傾向はあります」

■音楽遍歴を見ると多種多様に渡りながらも一本、スジが通ったモノを感じますが、PUNGENT STENCH/ストラトエピソードのように何か一風変わった、ありきたりのモノには成りたくないという欲求はありますか?

「あります。私が好きなギタリストっていうと、日本のサイケのバンドの人が多いんですけど、その人たちは、最初の10秒聴けばあの人が弾いてる!ってわかるくらい強烈なんです。ベテランになっても、新しい機材取り入れて全然違う音をやってみたりと貪欲で、音の魔術師だと思ってしまう。毎回違うやり方でも、あの人だってわかるんですよ。メタルやハードコアだと、サイケみたいに毎回違うメンバーだとか、一回限りのセッションってのはあまりないから、バンド単位でそれができたら最高だと思います。ライヴハウス行って人が多くてステージが見えなくても、最初の10秒聴けば、あのバンドがやってるんだ!ってわかるバンドいるじゃないですか。そんな音が出せたらいいと思ってます」

■個人的なギター練習はしますか?

「全然よくないけど…あまりしてません」

■ギターのコレクション、所有している本数とその内訳、特徴。

「前に挙げた2本だけです。弾いてると愛着がわいて、あまり他のが欲しいと思わないですね」

■WAR BLACKに影響を受けたハードコア、そんな風に自らを称していますが、実際はライヴを感じれる、日本のハードコアなグラインド・バンドの影響を感じます。MOEさんがいうWAR BLACKに影響を受けたハードコアとはどんなものなのでしょうか?

「日本のハードコアなグラインド・バンドには、あまり影響を受けてはいないと思います。WAR BLACKの良さは、邪悪な雰囲気だと思っています。リフの一つ一つは単純ですぐ作れそうな感じなんだけど、全体的な音色と構成で聴かせるものにしてる…。ヴォーカルも適当な感じがするけど絶妙なタイミングだったり。でも、リフがくっきり耳に残らないから、一曲一曲意識して聴かない音楽だと思います。ハードコアは、特に私の好きなハードコアは、リフやメロディーがカッコよくて、針を落とせば、あ!あの名曲だ!!って感動があるんですよね。POISON IDEAの「FEEL THE DARKNESS」とか、一曲一曲がもう…。SEX MESSIAHでは、邪悪な雰囲気の曲を、くっきりしてて頭に残るリフ、フレーズでやりたい。SKAVENみたいなデスメタルに影響を受けたCRUSTが大好きなんですが、そういう違うジャンルの音楽を吸収してできるものには、何かマジックが起こるんじゃないかな、と思っています。私の世代って、DISCHARGEもBEHERITも同時に聴いてきた世代だと思います。全部後追いですし。だから、あまり考えず自然にやってたら、後でやりたいことを自覚してきたような感じですね」

■ありがとうございました。

今回のキーワード

**安いヤツの方が気に入った
音が出て軽くて手軽**



脅威のプラスティックボディ!!
エンジニアで踏んだら壊れます

SATANIC OCCULT DEATH III

TEXT:二ツ木正康

何時ものことなのですが、毎月レコード買いすぎです。当初、新品/中古問わずレヴューするなんて言ってましたが最近は中古をそんなに買わなくなりました(普通より買ってるけど)。新品買うのが楽しくて、楽しくて。今回、TOPでレヴューしているBASTARD PRIESTはダークなハードコアが好きな人は全員、正に必聴です!!

BASTARD PRIEST/Under the Hammer of Destruction



カッコイイ!スウェディッシュ・デスメタルパンク・バンド1stアルバム。B面には完全にカッコよかった2008年のDEMOを収録している変則アルバムなですが完全にカッコイイ音源なので問題なし。自国のアンダーグラウンド臭を思いっきり吸い込みPUNK/METALが持つ魔力を身に着け遂に現れたド・ストライク・ダーク・メタルパンク!NIHILIST meets BONBANFALLを完璧に表現。

(Blood Harvest/YOTZ#55)LP

CONTRAST ATTITUDE/SEE YOU IN HELL/Split



三重DISパンクスCONTRAST ATTITUDE VS 2度目のジャパン・ツアーを行ったチェコのSEE YOU IN HELLとのSplit。両者とも核になる影響/存在をおきながらも日々進化を追求していくタイプでノイズ、メタリックとアプローチは異なりますが共通項はハードコア・パンク。マスタリングはWB2Dのジャック氏が担当した模様(最近、多いすっね)。限定版はカラーVINYLでポスターなどが入ったダンボール・ボックスに収まった収納に少々困る仕様(笑)。

(Insane Society/IS098)7" LIMITED EDITION

IRON LAMB/MOTORBREATH/Split



やっぱり出たと思わされた、元祖SWEモーターコアMOTORBREATHと新鋭重鎮デス・ロックンロール・バンドとのスプリット。コレがまた世界ではあんまりうけていないジャンルでして…。IRON LAMBのメンバー曰く、日本は地獄か?!とのこと。両者ともノリの良いロックンロールですが彼らならではの奥底にある"EVIL"を感じ取ってください。

(Hellrocker/001)7"

ABOMINATOR/Barbarian War Worship



オージー基本形WARMETAL 95/97年デモ音源収録2LPs。日本での存在は正直地味だが実力、内容はホントに最高です。BLASPHEMYというよりはTHARSHなイメージを強く感じさせるタイプ95年デモ、がらっと音が更に鈍く重くなる97年デモ、共通項はオリジナルが持つ確実に何かが違うと一聴して感じるトーンである。この手が好きなら何かを処分してでも入手すべき音源である。

(Nuclear War Now!/ANTIGOTH148)2LPs

VOETSEK/BARBATOS/MINKIONS/Thrash Yourself and Fuck The Rest



イタリア・メタルパンク専門レーベルの第一弾リリース!!メタルパンクを盛り上げたい!とのことらしいですが、レーベル側はもう少し色々考えた方が良いのでは?と私は思います。日々色々気づいて行かないとダメです。収録バンドはMETAL PUNK星、南極/北極対決で素晴らしいです!

(Break The Chains/BTC 01)ONE-SIDED LP

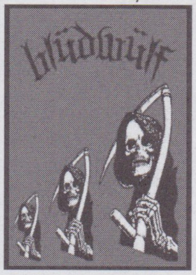
INEPSY/Madness and Overkill



カナダ・モーター・メタルパンク。何か戻りましたね。僕は前作品を毎日聴いていたわけではありませんが好きでした。端から見れば完全な背伸び作品だったのかも知れませんが、確かギターソロが殆ど無くてね。しかし彼らは本当のロード・クルー・パンクスなので恐らく何か楽しいことか、良い事があって(一周回って)またモーターノリノリになったのでしょう。そんな想像にワクワクします!

(Feral Ward/YAN-068)PICTURE 12"

BLUDWULF/Full Metal Warrior



間違いなく2000年代METALPUNK、TOP3の名盤であり、この作風がアメリカより出てきたという驚き、そしてメンバー構成、ルックス何から何まで人のレベルでの限界地点まで来ていたと思う作品。ノリがあるのにダークなメタル・ロックンロール・サウンドにSINNのディモニックなヴォーカル!正に2000年METALPUNK!!

(Witchhammer/HBC003)CASSETTE

IRON LAMB/Peskycostal Preaching



続けて来ましたよ。2nd EP!しかしコレが聴いてみてビックリ!でもありませんがかなり本物ガレージRNRになってきましたねー。こうなってくると僕みたいな半端者はちぇーって思ってきてしまいます(笑)。恐らくそんなに遠くない未来にアルバムが出るでしょうからそこで最終判断をします(笑)。真正HELLACOPTERSファンにもお勧めできる極上RNRサウンド!!

(Soulseller/SSR030)7"

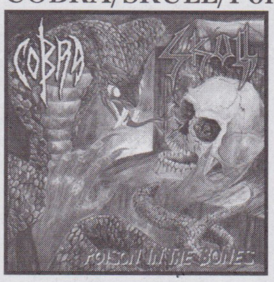
GRAVEHAMMER/Ensnared in Dismal Blasphemies



コレもカッコイイ!USのDEATHを彷彿させる、とも聞いたけど、僕の印象はまずゲイン足り無さギターと昨今、食傷気味リヴァーブ地獄だった私を蘇らせる素晴らしきリヴァーブ・サウンド!完全にDEATH METALなのだがなんだかDEATH指数の少ない、完全なサタニック・デス・サウンド!暴れろ!

(Detest/DR011)7"

COBRA/SKULL/Poison in the Bones



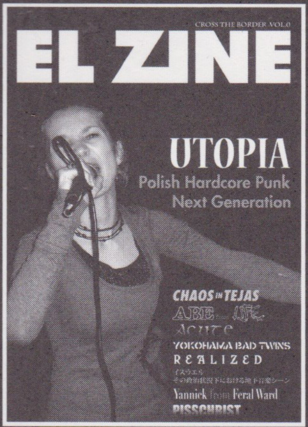
ペルーCOBRAと、コロンビア・スラッシュメタルSKULLのSplit CD。両方とも南米注目バンドなのですが、まぁそんなことよりラストに収録されている、COBRAが演奏してSKULLが歌ったTANKのカヴァーがウルトラ酷い!本当に本当に聴いていて嫌になってしまうのですがなぜかムカつかないです!!コレはフタツギ的にHIT!いたしました。結論から言いますと素晴らしいのだと思います。久々のGOODサンプルです(笑)。

(Austral Holocaust/AHP014)CD

BACK ISSUES

PRICE : ALL Five Hundreds Yen

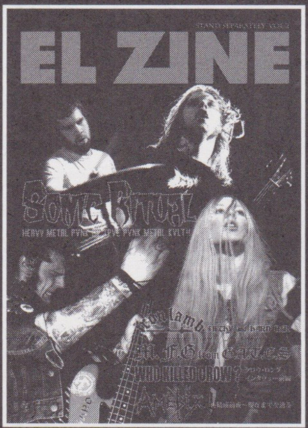
SOLD OUT : Vol . ZERO and Vol . ONE



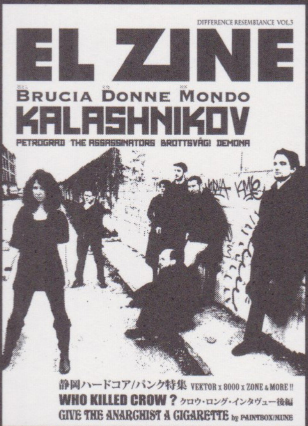
VOL.0 UTOPIA



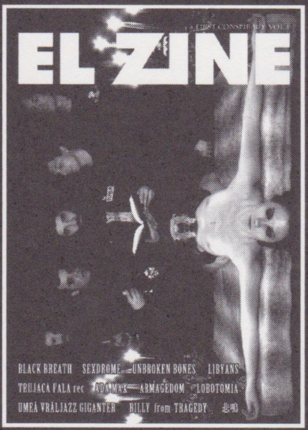
VOL.1 MOONLESS



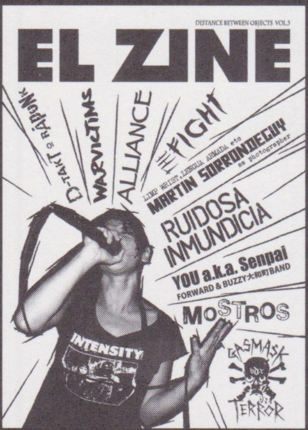
VOL.2 SONIC RITUAL



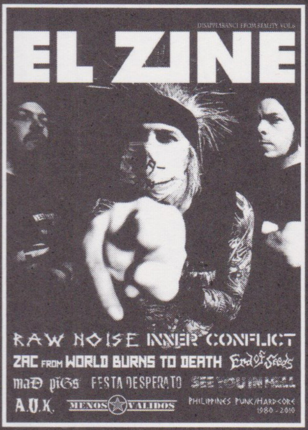
VOL.3 KALASHNIKOV



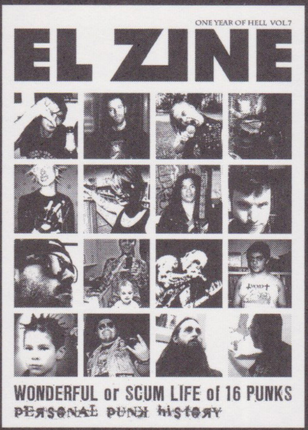
VOL.4 BLACK BREATH



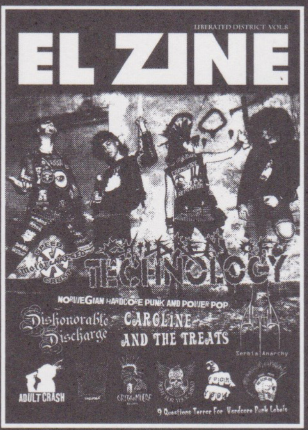
VOL.5 RUIDOSA INMUNDICIA



VOL.6 RAW NOISE



VOL.7 SIXTEEN PUNKS



VOL.8 CHILDREN OF TECHNOLOGY

次号の発売は…11月頭くらい　※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した
EL ZINE vol.9　2010年10月1日発行　HP・BLOG・MYSPACE・MIXI・TWITTER→NO FUN　E-MAIL→unno13@gmail.com

SHOP and DISTRO

直納しているレコード屋さんetc　ANSWER(名古屋)　BASE(東京・高円寺)　BOY(東京・高円寺)　DISK UNION(関東圏)
G-SIDE(浜松/ライヴハウス)　HARDCORE KITCHEN(神戸)　K-CLUB(高知)　record KNOX(水戸)　MISERY(広島)　NAT(東京・西新宿)
PUNK&DESTROY(大阪)　TIME BOMB(大阪)　WOODY(新潟/ライヴハウス)　XES(福井/ライヴハウス)

ディストロして頂いている方々　FUJIさん(REALIZED/北海道)　SOUICHIさん(UNDER THE SURFACE/東京)　YUさん(SKIZOPHRENIA/津山)
はっちゃん(BURST HEAD/沖縄)　紺野さん(SPROUT RECORDS/仙台)　ONIGIRIさん(WATERSLIDE/東京)　YUKIさん(SP RECORDS/東京)
CR JAPAN(東京)　MCR COMPANY(京都)

EL ZINE ¥500

EL Z



MUKA-C

90S US CR

LATIN AMERIC

EL ZINE

NO TITLE NO EXIT VOL.9